
abnormal dialy

アルマジロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

abnormal diary

【Nコード】

N9287R

【作者名】

アルマジロ

【あらすじ】

平々凡々な日常の中に生まれた平々凡々な少年、出湊（通称みつくん）。天然な姉、ノリがいいガールフレンド、前向きな友達、後ろ向きな友達。たくさんの人々の中で、みつくんは平々凡々を貫き通しながら、平々凡々ではなくなっていく日常を、平々凡々にやり過ごす。そんな、normalでabnormalな物語。

- commonplace opening - (前書き)

先に言つときます。

『平凡な物語読みたいなー』

『日常的な物語読みたいなー』

『平和な物語読みたいなー』

という方へ。

この物語、タイトルを見れば分かる通り、日常で終わることはないです。

でも、SFとかファンタジーほど非日常にはならないので、そこらへんはご了承くださいと思います。

- commonplace opening -

暇だなあ……。

日常って、なんて暇なんだろう。

こんなにつまらない世界って、他にないだろうな。面白いことなんて一つも起きやしない。なんの変哲もない一日一日を、今までどれだけ繰り返してきたことか。

……まあ、仕方ないといえば仕方ない。まだ未成年であり学生である僕がそんなことを言ったところで、夢見がちな今時の子供程度にしか見られないに決まってる。大人なんてそんなもんだ。世界なんてそんなもんだ。

——日常なんて、そんなもんか……。

そう割り切って今まで生活してきたけれど、それもそろそろ限界なのかもしれない。

つまらない。

その言葉が常に頭の中のどこかに存在している。つまらない。つまらない。つまらない……。

だから僕は、日常に面白さを求めずに、二次元に面白さを求めた。勘違いしないほしいが、別にインターネットに入り浸りとか漫画やゲームに病的にハマったとか、そういうわけではない。僕は現代の子供とは思えないほどそこらへんに関しては消極的なのだ。確かに楽しそうではあるが……なんか、すぐに飽きてしまいそうな気がする。それに僕、あんまりゲームとか興味ないし……。

というわけで、僕がハマっていたのは、本。

幼い頃から、わりと本を読んでいた僕。お母さんに絵本を読んでもらうのが好きだった。あの頃は、まだ自分で文字を読むこともできなかった。なのに、お母さんが絵本に書かれた文字を躍動感あふれる口調で朗読してくれたおかげか、内容がスツと頭の中に入ってきて、とても面白かった記憶がある。

まだ、日常をつまらないと感じることがなかったあの頃。

しかし、今は――。

「おい。どうしたのみっくん。さっきから黙ってるけど」
つまらない、か。

日常に面白さを求めるのが、そもそも間違っているのか……。
それとも、僕が望む“面白さ”がハイレベル過ぎるのか……。

「……え、何？ みっくんもしかして反抗期？ キヤアアア……！ どうしよう！ お母さん……！ 大変だよ……！ みっくんが反抗期に突入しちゃった……！ 今すぐ病院で診てもらわなきゃ……！ ちゃんと薬もらって定期的に診断受けて治さなくちゃ……！ みっくん、菌が移らないようにマスクして……！」

「人の反抗期を流行り病みたいに言わないでくれるかな……。」
3行シカトしただけでこんなに騒ぐ人も珍しいんじゃないか。ていうか、いないんじゃないか。

ま、昔から僕の姉は寂しがりやなところがあったから、無理もないかもしれない。中学生時代はいろいろ大変だったらしいし。聞くところによると、ある日泣きながら母に言ったそうだ。

「お母さん……私、人が信じられないの……。」

暴君ディオニスも真つ青なこの台詞を、彼女はこの世に生まれてわずか12年8ヶ月で言つてのけてしまった。

僕だつて言つたことないぞそんな台詞……一体、姉の中学生時代に何があったのか……。

気になつて問いただしてみても、姉も母もだんまりを決め込んでいて何も話してくれない。それは僕の父も同様で、時には男同士で夜遅くに自棄酒と洒落込んだこともあった。無論、僕は未成年なのでジンジャーエールで済ましたのだが。

「姉さん。勝手に部屋に入つてこないでつて、前から言ってるんだけど」

「どうしよう……、みっくん完全にグレちゃったよ……。」

面白くなつてきたので、反抗期を演じてみることにした。

姉を無視して、書いていた理科のレポート用紙に文字を埋める作業を再開する。

「今までの私とお母さんの行いが悪かったのかなー…」

何かを反省しているようだ。

…ちよつと待て？

この物言いは、もしかして後ろめたいことでもあるのか？

「みつくんが授業参観のときを狙ってみんなでデイズニールランド行ったり…わざとみつくんの分だけケーキを買ってこなかったり…定期的にみつくんの自転車の空気抜いたり…不慮の事故と装って階段から突き落とす」

「全部確信犯だったのかよー!!」

聞くに堪えなくなり叫んだ。

家族水入らずなんてどこの誰が言ったんだ！

思いつきり除け者扱いされてるじゃないか！

「みつくん」

騒ぎを聞きつけたのか、母が僕の部屋にやってきた。

この状況で、『勝手に部屋に入ってくるな』なんて言うほど僕も野暮じゃない。

「気づいてはいたわ…あなたが、常日頃からつまらなそうな顔をしているのは」

母は持ち前のアルカイツクスマイルを僕に向けながら言う。

「私たちね、みんなみつくんのことが心配で心配で胸がはちきれそうだったのよ。だから、少しでも私たちを頼ってくれるように、いろいろと小細工したりもしてみたけれど、あなたは全然私たちを頼ってくれないんですもの。同じ家族でしょ？なのに、何でそんなに孤独になりたがるの？ どうして私たちを避けるの？ なにか理由があるのなら、お母さん聞くからちゃんと行って頂戴」

うわぁ……。

見事に何の感情もこもってねえ…。

「私、悲しい。みつくんが私たちに何も言ってくれないのが、悲し

い。同じ釜の飯を食う者同士、同じ屋根の下で過ごす者同士、どうして助け合えないのかしら……みつくんが何か重いものを抱えているのは分かっているのに、どうしてそれを私たちにも預けてくれないのかしら……そんなに、信用が薄いのか？　みつくんは私たちのことを家族だと思ってるの？」

「思ってるよ」

観念することにした。

これ以上反抗期を演じ続けても、時間の無駄な上にレポートが進まない。

「だから、もうそんな白々しい演技をするのはやめてくれないかな？」

「あら。分かったたのなら最初から言いなさいよ」
バレてると知れたら、すぐにこれだもんな。

結局これは、家族ぐるみのお芝居だったってワケだ。
こうなってくると姉も怪しいな。

「あ、そうだお母さん」

僕は部屋を出かった母を呼び止める。

「午後から図書館に行ってくる。夕方には帰るから」
「分かったわ」

「……僕が家を空けている間に、冷蔵庫の奥に隠してある期間限定メニュー食べたりしないかね？」

「——なに言ってるの、そんなことしないわよ」

母のアルカイクスマイルが微妙に引きつった。

場所を移して、梅崎市立梅崎図書館。

毎週土曜日の午後近くの図書館へ行くのは、僕の日課だ。

しかしそれにしても、最近は図書館の利用者数がめっきり減ってしまった。ここら一帯は梅崎市内でも閑散としているから、暇な人が集まる場所としてこの図書館は最適だった。それが、今となっちはお年寄りや子供連れの親子が数組いる程度。それほど大きな図書

館ではないが、2階にはパソコンルームや自由読書室なんかもあって、設備は整っている方だ。3ヶ月ほど前まではわりと込んでいた気がしたのだけれど。

思いつく理由といえば、やはり件の3ヶ月前にグランドオープンした梅崎シヨップینگセンターが挙げられるだろう。前述した通りここら辺は片田舎なので、人も少なくお店もなかった。そこに救世主のごとく建設されたのが梅崎シヨップینگセンターなのだった。フードセンターを筆頭に、1階にホームセンターや日用雑貨、洋服店、ブックストアなどが立ち並び、2階部分は大規模なゲームセンター、3階にはデントalkクリニックやスポーツ施設が併設されたマルチな構造となっていて、主婦や学生は大方そちらへ行ってしまうたのだろう。

僕はというと、ぶっちゃけあまり興味がなかった。どれくらい興味がなかったかというと、一度も足を運んだことがないどころか、半径500mにさえ近づいたことがないほどだ。別に避けていたわけじゃない。シヨップینگセンターが建てられた所は、元々僕の行動範囲から外れた位置にあったから近寄る機会がなかったというだけだ。行こうと思えば行けない距離ではないが、自転車ですら30分くらいかかるし、行ったところで特にやることもない。せめてブックストアで暇を潰すことくらいしか僕にはできないだろう。そしてそれは僕の行動範囲内にある古本屋で事足りている。よって僕が梅崎シヨップینگセンターに行く必要性は全くもって皆無ということになる。

と、そんなことを僕は心の内で考えてはいたが、梅崎市内の中学生はそんなに懐古趣味ではない。現にクラスメイトの友達数人に誘われたことはあった。あんなに大きなシヨップینگセンターに向かって行っても暇なだけだなんてさすがにお粗末というものだから言ったりしないが、適当な理由をつけていずれも断っていたのは事実だ。

まあ何はともあれ、図書館は公共施設だから利用者が減ったところで取り壊しになったりはしないだろう。静かな図書室で理科のレ

ポートを仕上げるのも悪くない。

「ただ一つ欠点があるとすれば、図書館の中に長時間いるとのが
渴いてくるんだよね……」

これは僕にとってなかなか苦しい欠点だった。

テーブルにレポート用紙と筆記用具、参考資料が入ったバッグを
置いて席を確保し、本棚へ歩みを進める。適当な書物を数冊抜き取
って（主に“理科用語集”という肩書きのついたもの）戻ってきた。
ぶっちゃけて言うと、昨日の時点で理科のレポートは半分ほど終
わっていた。テーマが“十円玉をきれいにしよう”なのだから無理
もない。面倒なことは早めに済ませたがる性分の僕は昨日のうちに
実験を終わらせてしまっていた。実験といっても、内容はそのまん
ま“十円玉をきれいに”することだ。一時間でお釣りがくる。

春休みが始まったのが本日19日。昨日、終業式が終わって帰宅
する際に実験に必要な材料のあれこれを購入して家路に着く。リビ
ングで韓流ドラマを見ていた母に台所の使用許可を求めると、「夕
飯の前に済ませて頂戴」の一言だけだった。暗に実験を手伝ってほ
しい旨を匂わせていたのに、こういう時ばかり鈍感だ。意図的かも
しれないが。

そんなこんなで翌日の今日、僕は朝から理科のレポート作成に精
を出していたわけだ。予期せぬ姉の不法侵入により迫害されてしま
ったが、あの調子で自室で書き進めていれば午前中に仕上がるはず
だったのだ。午後はのんびり読書でもして過ごそうと思っていただ
けに今のあんばいは僕にとってつらいものがあつた。

これで家に帰ってモンブランがなかったりしたら、「冗談抜きでグ
レてやる。

密かに決意を固めた僕だった。

「あれ？ 君、もしかしてみつくん？」

さて気を取り直してレポートを再開させようと意気込んだ直後、
後ろから声をかけられた。

僕のことを『みつくん』と呼ぶ人物は今のところ母と姉の二人し

が存在しないはずだ。さてはどちらか一方がついてきたのか。母はこの時間帯、韓流ドラマを観るので忙しいだろうから、姉か……全く、僕の家族はどうしてどいつもこいつも僕の邪魔をしたがるのだろうか。僕か？ 僕がいけないのか？

「って、その声は悠木さん？」

「エ？ …… ちょ、やだ。なんで私の名前知ってるの？ うわ、マジそついうのないんだけど」

「いや、名乗ったのはそっちが先じゃないですか」

「相変わらずノリが悪いわよねーあんだ。そんなに友達できるの？」

「悠木さんは僕の友達じゃないんですか？」

「えー…そこノーマルに突っ込むか？ なんか罪悪感抱いちゃったじゃないのよ」

「…すみません」

だからそこはそういう風に普通の返事をするんじゃないかって et c . . . とガミガミ言っているこの人は、名を悠木瞳^{ゆうきひとみ}という。年齢は14歳で僕と同じ年なのだが、訳あって僕だけ敬語&苗字呼びで接している。この人との関係は、またも訳あって後述する。

「で、何の用ですか？」

「この公共施設の第一線を担う図書館を、まるで自分の私物のように言うのね…」

「質問に答えてください」

「ハイハイ。せっかちなところは前会ったときと変わらないわねー」

「1ヶ月で性格が変わる人がいるとしたら是非お目にかかりたいですね」

「んー、まあいるにはいるんじゃない？ 仏の道を志した人とか」

「じゃなくて、質問に答えてくださいってば」

「あんたから振っというてその言い草はないでしょ」

「用がないなら僕はレポートを進めたいのですが」

「暇だったのよ。春休みだから部活もないし、宿題も……って、み

つくん、なに理科のレポートなんかやってるの？ 自習？ クオリ

ティ高いわねー」

「春休みの宿題です」

「…は？」

「春休み・s宿題です」

「英語にしないでいいから…」

「悠木さんはいんですか？」

「…みつくん。全国的に、春休みに宿題を出す学校はほとんどないんじゃないかな…」

「じゃあ、僕の学校は特殊なんですネ。他にも、社会化新聞や読書感想文、ポスターなんかの宿題が出ています」

これは嘘偽りなく真実で、（今まで当たり前だと思っていたが）僕の通う中学校は春休みも他の長期休暇と同様に宿題が出るのだった。一年生の頃は、なるほど、中学校は春休みも宿題があるのか、やっぱりそういうところは小学校とは違うなあと一人感心していた僕だったが、おかしいのはこちらだったらしい。

「あ、でも、もしかしてそれって1月にあった事件と関係してるんじゃない？」

「……………ああ、あの事件ですか」

「ニュースでも派手に取り上げられてたわよね。 “松嶺大学付属中学校にて連続殺人事件勃発！！” とかいうやつ。ありやあないわよね…」

「…ええ」

にわかには信じられないかもしれないが、僕の通う中学校——松嶺大学付属中学校では、新年始まって間もない1月9日から1月14日にかけて、連続殺人事件が起こっていた。その犯人は…いや、この場で言うのはやめておこう。 magari なりにも犯人は僕たちにとっての先輩であり、先週卒業した三年生なのだ。もちろん正式な形で卒業することはできなかったが、何にしてもあの事件についてはできるだけ語りたくはない。

そんなご大層な事件が身近に起こっておきながら『暇だなあ…』

なんて言葉から物語を始めるなど言われればそれまでのだが、僕にとってあの事件は一生記憶に刻まれることとなるだろう禍々しいものだ。直接事件に関わったわけじゃないだけで、その恐怖は思い出すだけで身が震える。

「あ……ごめんね。なんか、思い出させちゃったみたいで……」

「いえ。——もう、過ぎたことです」

「あの事件が起こってから、1月いっぱいには臨時休業だったんでしょ？ だから宿題を出さざるを得なかったとか」

「そうですね。去年と比べて、今年は3倍近くの量の宿題が出ていきます。まあ、1月は冬休みを継続させたようなものでしたからね。

本当なら春休みがなくなっても不思議じゃないくらいですよ」

「20日近く休みにしちゃったら、そりや大変だったでしょうね、学校側も…。受験生とか大丈夫だったの？」

「なんとかなったみたいです。犯人の先輩は、郊外の高校に左遷されたそうですが」

「左遷ね…。サラリーマンじゃないんだから、もっとマシな言い回しはできないの？」

「あんまり語学力ないんですよ。僕って、もともとあまり率先して会話するようなキャラじゃないんで」

「どうでもいいけど、左遷って聞くと、超早口で『すみません』って言われてる気にならない？」

「ならない上に真実どうでもいいです」

「みつくんって、たまーに鋭い一言を言うよね」

「そりやサーセン」

「そこは『左遷』でしょ!!」

ホントにノリ悪いわよねー、と、悠木さんは僕をにらみつけて言った。

「大体ですね……そういうのって僕は良くないと思うんですよ。本当に申し訳ない気持ちがあったら、普通は『サーセン』ってだらし

なく崩さなくてちゃんと『すみません』って言うもんでしょう。今は文脈の流れで言ってしまいましたか」

「…あんた本当に平成生まれ？　なんでそんなに懐古主義なの？」

「別に懐かしんでるわけじゃないですけどね…。いや、だって当たり前じゃないですか？　僕が将来どこかの会社の上司とかになつて仕事をミスした部下が『サーセン』なんて言ったらとても許す気にはなれませんよ」

「それはまあ、そうかもしれないけど…ほら、あれじゃない？　友達とか、仲がいい者同士で使う場合にはそういうお咎めはないですよ。俗語ってやつよきつと」

「今時の若いもんはこれだから」

「うわ、年寄りくさー」

「僕が若い頃はですね」

「あんた現在進行形で若いじゃん」

「ノってみたんですよ」

「分かりにくっ！！」

と、悠木さんの突込みが鋭く決まったところで、午後2時を知らせる柱時計が鐘を鳴らした。

「あ、もうこんな時間じゃないですか」

「そつえばあんた、レポート書いてたんだっけね」

「悠木さんと話していると、時がたつのを忘れますよ」

「その言い回しって、基本的に相手をほめるときに使う言葉だけど、この場合は迷惑の意と解釈して相違ないのかしら？」

「構いませんよ。及第点です」

「正解は？」

「…言わずもがな、ですよ」

「酷いっ！！」

悠木さんは人並みに空気を読める人だった。是非見習ってもらいたい血縁者が約2名。

「分かったわよ、出て行けばいいんでしょ！！　それであなたは満

足なんでしょ!!」

「昼ドラみたいな台詞を言わないでください」

「もついいもん! ええ承知したわよ、帰ってやろうじゃない! さようならまた会う日まで!!」

月並みな捨て台詞を残して、彼女はそこから立ち去ろうと――

――「ちょっと君たち」

ふいに第三者の声が挟まれ、僕と悠木さんは振り返った。

そこには、中年の、ある程度身なりの整った男の人が立っていた。中学生の性^{さが}として、この年代の男の人に話しかけられると自然と身構えてしまう僕。

しかし、男の人の首にかけられたネームプレートを見て、全てを悟った。

「図書館を利用してくれるのは結構なんだけどね。ほら、受験生とかもいるし。あまり騒がれると他の人の迷惑になるから」

その後10分間、僕と悠木さんは梅崎図書館責任者の人に説教されることとなった。

午後2時半過ぎ、家に帰った。

母と姉は買い物に行ったらしく、鍵がかかっていたので、僕はあらかじめ外出時に持ち歩いている合鍵で玄関のドアを施錠した。

リビングに向かい、冷蔵庫を開ける。

モンブランがなくなっていた。

- commonplace opening - (後書き)

次回から登場人物とか紹介します。

敢^あえて見ないで新鮮な気持ちで読みたいという方、もしかしたら
いる可能性も捨て切れないのでそういう方、うん、別に飛ばしても
構わないと思いますんで。まあそんな感じで、次のお話も読んでく
れたら嬉しいな、読んでくれなくてもコレ読んでくれて嬉しかった
ですありがとうございます。

乞^こうご期待。

- junior high school - 登場人物（前書き）

物語が進むにつれ、書き足します。

ネタバレとかは、あんまりない…と思います。おそらく。

- junior high school - 登場人物

いずるみなと
出湊

- junior high school - の主人公…だと思う。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。

コンピュータークラブ所属。

日々暇を持て余してる様な子。

ニッケネームは『みつくん』。

いずるみおり
出美渚

みつくんのお姉さん。

せいらん
星鈴高校在学、2年生。

剣道部所属。

生粋の天然娘（自覚してるっばいけど）。

ニッケネームは『みっちゃん』。

いずるみさと
出美郷

みつくん、みっちゃんのお母さん。

のんびり主義の専業主婦。

お菓子作りを人生における愉悦の一つとして捉えてる人。

いずるみきこ
出美紀彦

みつくん、みっちゃんのお父さん。

頑張るサラリーマン。

女性陣に打ち負かされた時は、みつくと晩酌を交わす人。

たかだひろと
● 高田寛人 ●

みっくんのクラスメイト。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。
サッカー部所属。
サハラ砂漠の様に心が広い子。

● 吉川大瑚 ●
よしかわだいこ

みっくんのクラスメイト。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。
合気道クラブ所属。

名前のわりに小柄だけど、小柄なわりに強い子。

● 光村修哉 ●
みつむらしゅうや

みっくんのクラスメイト。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。
バスケット部所属。

校内有数の健全なチャラボーイに認定された子。

● 鏡崎亮介 ●
かがみひさきりょうすけ

みっくんのクラスメイト。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。
科学研究クラブ所属。

校内有数の科学研究クラブに所属する健全な子。

● 大原夏輝 ●
おおはらなつき

みっくんのクラスメイト。
松嶺大学付属中学校在学、3年生。
バスケット部所属。

ある友達を捜しにこの町にやってきた不思議な子。

● 荒瀬勝也 ●
あらせかつなり

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。
バドミントン部所属（部長）。

莉子とは幼馴染みで、彼女を心配する正義感の強い子。

● 鶴嶋京平 ●
つるしまきょうへい

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。
帰宅部。

滅多に登校してこない、謎多き子。

● 佐上惇 ●
さがみじゆん

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。
帰宅部。

京平と仲がいらしいけれど詳細は一切不明な子。

○ 蓮音香奈 ○
はすねかなりな

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。
剣道部所属。

キレると容赦なく竹刀を振り回す子。

○ 茉莉沢由真 ○
まじさわゆま

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。
合気道クラブ所属。

彼女一人いれば地球温暖化が解決できると比喻される子。

○ 朝井日向 ○
あさいひなた

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。

陸上部所属。

名前の通り陽だまりの様に朗らかな子。

○柳川莉子○
やながわりこ

みつくんのクラスメイト。

松嶺大学付属中学校在学、3年生。

帰宅部。

姉を失ったショックで心を失くしてしまった子。

悠木瞳
ゆうきひとみ

みつくんのお友達。

梅崎学園在学、3年生。

家庭科クラブ所属。

もっと女の子らしくなりたいと密かに思ってる子。

悠木慧
ゆうきさとこ

みっちゃんの担任。

星鈴高校数学家教師。

剣道部副顧問。

男尊女卑を心から嫌悪するフェアな人。

あー……くそ…。

まさか、こんなに悩むことになるとは思いませんでした。

この手の二者択一って、どちらもどちらでそれぞれに利点と欠点
がほぼシンメトリーに配置されてるんだよね……。こんなに悩んだ
ことなんて“ポケットモンスター”のダイヤモンドを選ぶかパール
を選ぶかって時以来だ。

結局僕はダイヤモンドを選んだのだが。パッケージのポケモンが
青をイメージカラーにしたデザインだったからという、それだけの
理由だ。

「ああ…僕はどうするべきなんだ…どっちを選べばいいんだ…」

いつそ天の神様の言うとおりにしてみようか。いや、あの選択方
法のメカニズムは解明済みだ。二つの選択肢をそれぞれA、Bとす
ると、ショートバージョン（どちらに…言うとおりで、Aから
始めればもう一方のBを選択することになる。Bから始める場合も
また然^{しか}り。ロングバージョン（…鉄砲撃ってバンバンバン。すごく
思うのだが、なぜここで鉄砲を撃ってしまうのだろう。文字数稼ぎ
なのだろうか。擬声語を使ったり、なんだかいかにもわざとらしい）
では、始めた選択肢を最終的に選ぶことになる。

もしかしたら夢を壊してしまったかもしれないが、こういう選び
方は良くないという、また現実^に天の神様なんてものは存在しない
という意味で言うておく。参考^にしてくれたら嬉しいな。

「お前、さっきから何一人でブツブツ言うてんだ？」

引き続き悶々^{もんもん}と悩んでいたら、肩を叩かれた。

「その声は高田？」

「お前、そのフレーズ多用しない方がいいぞ。気の早い読者は、早
くもお前を『声を聞くだけで誰なのか識別できるキャラ』って認識
し始めてるかもしれないぜ」

「それは困るな。僕が声で人を判断できるのは、声が発せられる際に発生する空気の波を感じ取っているからなのに」

「だからそういう誤解を招くような発言は控えろっての」

この、やたらと僕のキャラを心配する人物は、名を高田寛人^{たかだひろと}という。一言で済ませると、僕の友達だ。始業式が終わって3年1組の教室へと向かう途中の廊下で、間抜けにもネームプレート^{ネームプレート}を落としたやつがいて、しかも落としたことに気づかずにシカトしていて、見ていられなくなった僕は良心を発揮してネームプレートを拾ったが、記された名前を見ても誰だか分からない。ひとまず教室に戻って落ち着いたら返そうと思いつくままやり過ごしたのだが、出席番号順で僕の隣の席に着いたやつはネームプレートをつけていなかった。そして未だ^{いま}気づいていなかった。なので僕は隣の人物にネームプレートを返してあげた。そしたらなんか必要以上に感謝されてしまった。で、最終的に仲良くしようぜ的な空気になって、現在に至る。

僕の学校は毎年クラス替えが行われるという、珍しい規則がある。中・高・大とエスカレーター式なので基本的に受験の心配をすることがなく（もちろん進級テストはあるが）常にのほほんとした雰囲気^{雰囲気}が漂いつつあるのが現状だ。よほど重大な事件をやらかさない限り、とりあえず高校までは進路を確定されたようなものなのだ。高校入試を経験^あする機会を失くしてしまうのは口惜しい気もするけれど、じゃあ^あ敢えて別の高校を受験するかなと思われれば答えは否だろう。誰だって安定した進路へ進みたいと思うのは当然のこと。ルールが敷いてあるのならそのルールに沿って進めばいい。それだけのことだ。

そんなわけで配膳室。

松嶺大^{しょうりゅう}付属中の珍規則その2。

給食を選択できる。

「この制度って…なんというか、前人未到だよな。わざわざ給食にまで選択権を与える必要性がどこにあるのか、俺の残念な頭では見

出せなかった」

「それは同意見な僕に対する遠回しな侮辱ってことでいいのかな？」

「良かねえよ」

「そりゃ左遷」

「……？」

「聞き流していいよ」

首を傾げる高田を尻目に、僕は再び悶々と悩みだす。

もうご存知だろうけれど、僕が悩んでいるのは給食。

給食にはAとBの2パターンがあり、毎年どちらの給食を選ぶか決めることができるのだ。

Aは和食を基調とした淡泊なメニュー。

Bは洋食を基調とした濃厚なメニュー。

「そんなに悩むことか？ どーせ給食なんて200回あるかないかだろ」

「悩むよ…一度決めたら、途中変更はできないんだから」

「つつても、全く同じメニューってわけでもないんだし。A中学校の給食とB中学校の給食なら、どっちの給食が食べたいですか選ばせてあげますよってだけの話じゃないのか？」

「そういう高田はどっちにしたの？」

「俺は、朝飯が和食だからB」

「単純だな…」

「そんなもんだって。こんなことでいちいち悩んでたら、埒あかねえじゃん」

高田の言い分も一理ある。

しかし僕には高田の様な決め方は出来ない。

理由は至極単純、僕は基本的に朝食を食べないのだ。

低血圧というわけではないのだけど、どうも朝は食欲がわからない。中学1年生の中頃まではそれでも我慢して食べていたのだが、そのうち吐き戻すようになり、不可抗力で食べなくなった。成長期のこの時期に朝食を抜くのは一般論にしてもよろしくないことだが

仕方がない。そのせいで身長は未だに160cmに届かないこともまた然り。一応気にしてはいる。僕だって男の子なのだ。

「高田はいいよなあ……」

「物事を複雑に考え過ぎちまうのがお前の悪い癖だと俺は思っぜ。もつと気楽に生きてみるよ、そんな気難しい顔してつと疲れないか？」

「いや違……まあ、そうだね。気楽か……僕にはきつと無理だな」

「どうして。あ、お前が気楽になつたら鏡崎とキャラが被るな。うん、そりゃダメだ」

「そうなのか？」

「あいつが気難しい顔すると、たまにお前に似ることがある」

「たまにだろ」

「何、またいつにもまして渋面ですか？」

「今、鏡崎と喧嘩してるんだよ……。くだらない言い争い。自分の信念を曲げないっていうのはなかなか出来ることじゃないけど、それって口論になった時結構困るスキルだよな」

「そういえば最近、ジャスパーが“ぶんどり術”を修得したんだよ」

「何の話だ？」

「知ってる人は知っている」

別の話をし始めたらしい高田のことはちょっと放っておくとしよう。明日から早速給食は始まる。今日中に申請を出しておかなければ、最悪明日の昼食は弁当持参になってしまいかもしれない。高等部にあがるまで弁当持参は校則違反だ。なぜ中学生は購買部を利用できないのだろう。義務教育とかが関係しているのだろうか。

前述した通り僕は朝食を食べない（というか食べられない）。だからこそ昼食は重要だ。悩む。

「……って、お前まだ悩んでんのかよ」

「お前みたいに簡単には決められないんだよ。朝の分のエネルギーを昼食で補わなければならいんだから」

「……………あーもう、俺そーいうの嫌なんだよ！ 目の前で

人が悩んでるのに何にも出来ないとかさあ！ 自分の無力さを思い知らされるっていうか……」

「な、何だよいきなり」

「よし。出、^{いっしょ}ちよつと聞け」

「だから何」

高田は持っていた学校指定バッグのサブポケットから単語カードを取り出し、付属されていたボールペンで英単語を書いた。

“umbrella” って分かるよな」

「ああ、アンブレラ…傘ね。うん。それが何か？」

「これからいくつか質問するから、直感で答えていつてくれ」

「はあ。よく分からないけど、別に構わないよ」

「大問1」

「大問形式かよ」

「卵料理と肉料理ならどっちを食べたい？」

「は？ ……それ、比較するには相応ふさわしくないんじゃないか」

「いいから」

「…どっちだろな。気分的にベーコンエッグが食べたいんだけど」

「それじゃ両方含んじまうだろ。どっちか選べ」

「じゃ、食パンでサンドすると美味しいベーコン」

「じゃあ、ベーコンとレタスだったらどっちが食べたい？」

「レタス？」

「いいから」

「……ドレッシングがあるなら、レタス…かもしれない」

「本当だな？」

「あるならね」

「ん、分かった。お前Aな」

「は！？ ちょ、そりやどついう」

「俺流の心理テストだ」

「心理もヘツタクレもないだろこんなの！」

「とにかく。決まったことは決まったんだから、さっさと申請しに

行けよ。期限、放課後までだぜ」

「決まったって、僕はまだ容認してない！」

「どーせそういう風にいつまでも悩み続けて、いつの間にか放課後過ぎて残念賞って結果になるのは目に見えてんだよ。ここは一つ、騙されたと思って言ってみろって」

「……………」

基本的に、僕はこいつをそれなりに信頼している。言っていることにも間違いはないし（このタイミングで高田が現れなかったら、きっと今日中に決めることが出来なかっただろうことは火を見るより明らかだ）、実際、この程度のことではいちいち悩んでいたら、気苦労が絶えない。こいつほどではないにせよ、僕はもうちょっと肩の力を抜いた方がいいのだろう。

「お？ それは俗に言う暗黙の了解ってやつですか？ 黙秘権とかなしにして下さいよ旦那^{だんな}？」

「そうだな…僕は、もうちょっとオブラートに包まれて生きていく方がいいのかもしれない」

「なぜその慣用句が出てくる！？」

「そうだな…僕は、もうちょっとビブラートを響かせて生きていく方がいいのかもしれない」

「まさかのカウンターテナー志望！？」

「ノってみたんだよ」

「クオリティ高すぎる…」

まあ、この一連の会話でご理解頂けたと思うが、つまり高田寛人という人物はこういう人間だ。

おっと、念のため言っておくが、僕のこの給食のエピソードは高田の人物紹介のために回想したものではない。

簡単に言ってしまうえば、これは序章のようなもの。

何だかんだで、僕の平々凡々な学校生活の1コマを切り抜いてみただけの話。

僕が日々つまらないと思い続けているこの日常の中で、これから

一体何が起こっていくのか。

それは僕にも分からない。

しかし、たとえ何が起こったとしても、僕は今まで通り平々凡々、肩の力を抜き、リラックスして日常を過ごしていくだろう。

…たとえ、何が起こったとしても。

それは、日常での範疇内のことに過ぎないのだから。

- junior high school - spring 1 (後書き)

寛人流の心理ゲームとは一体どんなものなのか？

どうやってAと決めたのか？

…真面目に考えるという矛盾が生まれます。だって寛人作だもん。

気になる人は、自分で考えたりしてみてください。ヒントは、アンブレラを英語表記にしたところ、とかかな？

「だってあんた、勉強って……学校始まって3日しかたってないのに……」

「ていうかお前勉強って熟語知ってたんだ」

「あれ、今幻聴か何か聞こえたような気がしたんだけど気のせいだな、空耳空耳……ってなるかボケ！！ てめえ荒瀬えええ！！ もう一度言ってみるこの野郎！！」

「ていうかお前幻聴って漢字で書けんの？」

「ああ！！ え、何？ 幻聴幻聴……えーと、幻に……耳かいて……えーと……知るかー！！」

「知つとけよ！」

「あ、おい、俺のノートで人を叩くな！」

以上、3年1組の休み時間教室にてお送りしました。

しかし、中学3年生といっても、年齢にすればたったの15歳。

いや、まだ新学期始まって間もないから、大半の人が14歳か。

春の陽気が関係してるのかもしれないけど、やっぱり新学期ってのほほんとした空気がどこかしらに存在している。僕たちは受験もないし（それに代替する進級テストはあるが）将来の心配も今のところしなくてもいい。人生の中で受験を経験できないのはなんだか勿体無い気はするけれど。

規則が厳しいのが玉に瑕^{きず}か。大学部にあがるまで携帯電話の持ち込みは禁止（持ってきた場合強制的に永久没収）、その他不要物を持つてきた者は奉仕作業1週間。制服も学ランにセーラー服というレトロな仕様。髪形や服装についても生徒指導の先生が毎月集会を開いてチェックする。これがまた面倒くさくて、僕みたいに普通に生活している生徒にとっては退屈でしかない。注意されるやつなんて毎月大体決まっているのだから、規則を守っている僕たちがまるで無駄な努力をしているように思えてならない。

なぜこんな古風な学校に入りたがる生徒が多いのかというと、やっぱり将来の問題だろう。前述したがこの学校は入りさえすれば成

人を過ぎるまで安心した進路を進むことができる。ただ、学区が非常に狭いため、無条件でここに入学できる生徒なんてほんの一握りで、大抵は皆受験してこの松嶺大付属中に入ってくる。偏差値は結構高いらしい。有名校というほどでもないが、郊外から電車通学している生徒も多数見受けられる。高田もその一人だ。つまりこいつは小学6年生の頃、受験を経験したということになるが、……別に、羨ましくなんかない。

その高田は、現在読書をしている。珍しく静かだ。まあ、騒ぎながら読書するやつなんてそうそういないだろうが、こいつが休み時間に本を読んでいること自体がまず珍しい。普段なら冒頭で実況した吉川や光村たちの会話に混ざってバカ騒ぎするのが日課なのに。気になった僕は、隣に座って気難しい顔で紙面をにらんでいる高田に話しかけてみた。

「なに読んでんの」

「あ、…出か。いつからいた？」

僕は朝のホームルームから席を動いていない。

「さっきから、ずっと同じページ見てない？」

「あー、それが……ちよつと、読めない漢字があつてさ」

「漢字？ どれ」

昨年度の2月に漢字検定準2級に（ギリで）合格した僕は、難読漢字を解読するのが趣味になり始めていた。確かに、本を読んで読めない漢字があつたりすると、なんだか読む気が失せてしまう。

「これなんだけど」

と、指差された文字は、僕にも見覚えのないものだった。

“ 慇懃 ”。

……………。

自信喪失。

準2程度で浮かれてはいけない。

「読み仮名振ってないの？」

「ご覧の通りだ」

「この、下に共通してついでる“心”って文字がミソなんじゃないか？」

「うーん……っことは、これって形容動詞？」

「かもな」

「“慇懃”だよ」

僕と高田が考え込んでいると、横から声がかかった。

丁度、二人の間に位置する場所。その目は紙面ではなく確実に僕を見据えていた。

「意外だなあ。みつくんにも読めない漢字というのはあるわけだ。へえー……じゃあ君は前言撤回をするべきだね。もう少し自分を客観視することを覚えた方がいいよ。僕が言えることじゃないけど、君は自分を過大評価し過ぎている節がある。そういうのは目に余るからやめてもらいたいね」

「前言撤回？　今は腹持ちが良くないからあまり笑わせるようなことを言わないでほしいな。それを言うならお前だって撤回すべきことは山ほどあるだろ」

「ないね。何一つないよ。僕が撤回する言葉は全くもって存在しない。君は図々しいね。今まで大分責任転嫁をすることで自分の非を他人に押しつけていただろう。それは良くないよ。君の腹持ち以上にそれはよろしくないことだ。押しつけられた側はたまったもんじやない。さては君、他人の気持ちというのを考えたことがないね？」

僕はそれほど人間として劣ってはいないから、ある程度の他人の痛みとか苦しみは理解しているつもりだよ」

「“慇懃”から登場しておいて勝手な言い草は控えてもらいたいだがな。他人の気持ちを理解しているんなら、今の僕の気持ちも少なからず理解しているはずだと思うんだけど？」

「うん。もちろん大体分かってるよ。君と僕はつい先日喧嘩したばかりだからね、お互いに会話をしたくないのはよく分かってる。昨日の敵は今日も敵だよ。明日も敵で明後日も敵だ。敵は所詮敵でしかないものね。何のメタモルフォーゼで敵が友になるのか、その

メカニズムは複雑怪奇だよ」

「ならないんだろつな。敵と友が対義語じゃない限りそんなことは起こり得ない。つまりこれから先僕とお前は永遠に敵対関係をもつことになるから話しかけないでくれと僕は今しがた心の中で呟いていた」

「ぼやいていたの間違いじゃない？ あるいは嘯（ささや）いていた、とかね。正直に言えば？ 君は僕を邪険に思っているよね。今すぐ消えてほしいと心の底から思っているよね。ショックだなー。敵とはいえここまで忌み嫌われると僕のガラスのハートは崩壊寸前だよ」

「防弾仕様のな」

「ご名答だよ」

というわけで鏡崎亮介。

僕が先日喧嘩をした相手だった。

きっかけは些細な口喧嘩。こんな感じの会話が平行線上に続いていき、僕の線が若干内側に折れた形で口論になった。それほど仲が良いというわけでもないが、取り立てて悪くもない僕と鏡崎。簡潔に表してしまうと、中等部にあがってから今年を含めて3年間、ずっとクラスが同じだった数少ない人物だったりする。

高田は、気楽になった僕と鏡崎はキャラが似るみたいなことを言っていたが、正直、心外だった。こいつだけには似たくない。まず、自分とこいつを何事においても比べられること自体が嫌だった。

「あのー……ちよつとお二方さんよ」

無言のうちに火花を散らし合っていた僕と鏡崎に、控えめに高田が口を挟んだ。

「饒舌キャラ同士の言い争いは王道パターンだったのは分かるけどよ……その中に、俺みたいな右脳発達型キャラが混ざっていると、俺がバカみたいに思われるからやめてくんねえか？」

とことんキャラを重要視する高田だった。

そんなに大事か、キャラって。

「……………えつと……………」

「はあ……やっぱり憶えられてないか……俺ってそんなに影薄いのかな……ちよつとシヨックだな……俺は一応憶えてただけ……ギブアンドテイクが成り立ってねえよ……」

ギブアンドテイクの意味を間違えているやつが約一名。

「みつくん。この、妙にキャラに執着する人物は誰だ？」

「高田寛人。サハラ砂漠のように心が広い」

「よく分からないんだけど……？」

「こう言えばよく分かるか？ 『3年生になって初めてできた友達』

」

「ああ！ じゃあ、君が高田寛人くんか！！ うわああー、はじめましてだね！ 嬉しいなあ、このクラスにはみつくんの他には同じクラスだった人はいないと思っていたから、少なからず寂しさを抱いていたところだったんだよ。そうだね、いないのならば作ればいいんだ。僕は鏡崎亮介だよ。これからよろしくね、高田寛人くん！」

僕のシンプル&スタンダードな説明が功を奏したのか、鏡崎は手の平を返したようににこやかな笑みで握手を求めた。されるがままに手を差し出す高田。客観的に見れば、『おめでとうございます！

！ 宝くじの一等が当たりました！』『は？ え？ あ……マジ

っすか』的な会話が成り立ちそうな場面だ。その場で当たる、ロト
6。^{シックス}

「おい、僕の他にもう1人いるじゃないか。鶴嶋の存在を忘れるなよ」

一方的に展開されている友好的ムードに水を差す一言を浴びせると、鏡崎は一変して露骨に嫌な顔をした。

「ああ、彼のことか……僕は鶴嶋くんのことをよく知らないんでね。残念ながら、喋ったこともないような人物を友達とは呼べない」

「？ 鶴嶋……？ って、誰だ？」

ニューワードが出てきて我に返った高田が僕に訊いた。

こいつ、昨日僕に同じことを訊いたじゃないか。僕はちゃんと模範的回答をしたのに、すっかり忘れてやがる。

「今日の朝先生が話してただろ、聞いてろよ……鶴嶋は、1年の頃から数えるほどもしか登校してこない、いわゆる不登校児だよ。これ、昨日も言っただけだよ」

「へえー……今時、いるんだな」

「……今時っていうか、むしろ最近の方がわりと一般的に見られるもんだけどな。もつとも、引きこもりって訳じゃないらしい」

鶴嶋京平。

入学当初から滅多に学校へ来ない不登校児。

しかし、創立記念日なんかで学校が休みだったりすると、たまに目撃情報が寄せられるので（この物言いは、人間に対してはいささかお粗末なものがあがるが）、いわゆる“ヒッキー”の部類に入るわけではないと思われる。単に学校へ来るのが面倒なのか、何かよほどの理由があつて学校そのものを嫌悪するようになったのか、その理由は教職員側も分かっていないそうだった。

僕は彼と、2年生の時に同じクラスになった。当時、既に彼の不登校は恒常化しており、周りは彼がいなくても平然としていた。結局、2年生のうちに彼を校内で見る機会はたったの2度しかなかった。

まあ、つまり、そういう人物だ。

「逆に、校内の生徒で彼のことをよく知っている人物がいる方が驚きだよ。どうやって関わりをもったんだろうね」

「さあな。多分いないんじゃないか？ そんなやつ。ていうか鏡崎僕は今、現在進行形でお前と喧嘩しているんだから、話しかけるなよ」

「は？ ちょ……このタイミングでそれを言うか？」

「そうだよ。多分今、読者の皆さんは『この二人、いつの間にか仲直りしてんじゃない？』と思っただころだろうのに」

「それは困るな。僕は金輪際、鏡崎と仲良くするつもりはない」

「……いいよ。分かったよ。このまま永久に決別してやろうじゃないか。言つとくけど、一度決めたら僕は信念を曲げないよ！ ちょ

つとやそつと札束積んだくらいで心変わりなんてしないからね！」

「金で解決すんのかよ」

文字通り現金なやつだな。

とはいえ、鏡崎が思ったよりすんなりと引き下がったことを意外に思った。あれ、こいつ、こんなに淡泊なキャラだったわけ。

…と、僕までキャラにこだわってどうする。

「じゃあね。きつともう会うことはないだろう」

「理科の班一緒じゃなかったか？」

午前中に再会できんじゃねえか。

「あーあ……次は社会か……あれ、歴史だっけ地理だっけ……ああ、違った、3年生は公民か……まぎらわしいなあ……」

ブツブツ言いながら、鏡崎は去っていった。

そしてその直後。

僕は、策士・鏡崎亮介の本性を垣間見ることになる。

<キーンコーン…カーンコーン…>

僕は席を立っていた。

というのは、先程まで会話をしていた鏡崎が立っていたので、フエミニストの僕としてはたとえ喧嘩中であろうと、同じ目線で会話をしようという厚意からの姿勢だった。

それをあいつめ、仇で返しやがった…。

「ん？ 出。お前今立ってたよな？」

「え？ いや、これはちよつと、わけがありまして。どんなわけかと言いますと、突如空中に豚が浮遊しているのを」

「チエック1」

迂闊だった……。

僕のその場しのぎの言い訳は完膚なきまでにスルーされ、放課後3年教室前の廊下を1往復する羽目になったのだった（全長30m）。

時は少々遡り――さかのぼ――。

みつくんたちが鶴嶋についてのことを話していた時、密かに身を震わせた人物がいた。

休み時間の間中、学ランのそでに付いているボタンをいじっていた手が、鏡崎の何気ないつぶやきによって止まった。

「逆に、校内の生徒で彼のことをよく知っている人物がいる方が驚きだよ」

ビクリと、一瞬眼が見開く。

「どうやって関わりをもったんだろうね」

鏡崎が放つ一言一言が、彼の胸に深く突き刺さる。

聞くに堪えなくなり、彼は真新しい^{あめ}飴色の机に突っ伏した。

“慇懃”って、読めます？ 中学3年生入学直後の時点で。

なかなか難しいと思うんですよね……私も、最近本を読んで知ったばかりなんですけど。

亮介のキャラあれで決まっちゃったのかな……たしかに、彼が楽観的じゃなかったら、寛人じゃないけど、みっくんとキャラがぶつちやうよ……どうしょ……。

途中で性格変わる可能性あるかも。

今のうちに予告。

いや、ないにこしたことはないですけどね。

え？

今、何て言った？

何で。

どうして、この人物が。

彼女のことを知っているんだ？

「おはよつす、出^{いづる}」

本日、4月9日。

新学期が始まって4日目の朝は、いつも通り平々凡々に幕を開けた。

「おはよう、高田」

僕はいつも通り、返事をする。

「おいおい……あのさ、出。俺は、とどのつまり朝の挨拶つてのは爽やかさが求められると思うんだよな。そりゃ、『Good morning, Takada!』とまでは言わねえよ？ 言わねえさ。だけどさあ……こう、なんつーか……何、朝から何か気分を害す出来事でもあったのか？」

「いや別に……そういうことは」

正直言つと、ないでもなかった。

しかし、こんなこと、何も知らない高田に言ったところでどうにもなるわけでもない。それに、元はといえば僕が悪いようなものなのだ。相手側が誰かに言うようなことではあっても、自らが自らで言う話でもない。誰だって、自分の失態を話したがるなんてことはないだろう。

そう、僕は大分前に、放置してはおけない失態をしてしまっていた。

あれはあれで、及第点ではあったのだから、わざわざ正解を匂わ

せる必要はどこにもなかったよ……。ああ、何が『言わずもがな』だ。何で最後の最後にカツコつけようとしたんだ、僕は！

「ないけど？」

「絶対あるよな。その長い地の文に何が隠されてんだよ……。俺は読心術とか心得てないからそういうの分からねえよ」

「ないない。まさか、こんな爽やかな朝に、春休み中にいざこざを起こしたガールフレンドに朝早くから携帯の着信で叩き起こされるなんてこと、あるわけないじゃないか。ここは日本であってコメディードラマの冒頭部分ではないんだよ？」

「……………」

全てを悟ったような顔をして、高田は静々と僕の隣の席に着いた。
ん？ 何かおかしいなことでも言ったかな、僕。

「……………」

何で静かなんだ高田。たしかに今日の僕は若干ローテンションではあるけれど、それこそ気分を害すような対応ではなかったと思うけれど。反抗期ってやつか。この時期に反抗期ってやつが到来したのか。

「……………」

言っててばかしくなったので、自主規制した。僕じゃあるまいし、高田は反抗期を気取るようなキャラではない。そして僕も、姉じゃあるまいし、高田が反抗期になったところで病院に連れて行ったりなんて愚行はしない。

反抗期になった弟を病院に連れて行く姉なんているのだろうか。

いや、いるはずがない。いていいはずがない。

僕が居心地の悪い空気に耐えていると、救世主のごとく教室の引き戸が音を立てて開いた。

入ってきたのは去年赴任したばかりの新米教師、みさお操先生。いつになく引き締まった表情をしている。

暗黙の了解で、僕らは起立して「おはようございます」と挨拶をした。まだ委員長やら何やらが決まっていけないので、クラスのリー

ダー的存在がないのだ。

それに軽く会釈をして応えると、操先生は教卓に両手を付いて、引き締まった表情をさらに硬くして言った。

「みんな、大事件だ」

……。

？

えと……… ということだろうか。

「今日、このクラスに転校生がやってくる」

台詞の後半部分は、クラスメイトたちのどよめきで聞こえなかった。

転校生。この、妙にタイミングをずらしてしまった形でやってきた、転校生。普通は3学年進級に合わせて、自然な流れで転入するものではないだろうか。なかなか珍しいパターンだ。一体どんな人物だろう。

「実は、既に教室の前まで来てもらっている。まだ制服が間に合っていないので、以前いた学校の制服を着ているが、そこはまあスルーしてやってくれ」

簡単な注意事項を述べると、操先生は先程入ってきた引き戸を細く開けて、向こうの人物と二言三言会話を交わした。僕は前から4列目の席なので、話の内容は聞こえなかったけれど、先生は引き戸を大きく開くことで転入生の登場を示唆した。

こういうのって、もちろん転入生側もかなり緊張するのだろうか。なぜか受け入れる側の僕も緊張してしまう。気になって横にいる高田を見ると、外のリラックスした佇まいで、特に不安げな様子もなく転入生の登場を待っているようだった。右脳発達型キャラの強いところ。

程なく、開け放たれた引き戸から転入生がやってきた。

……… おお。

いいな、ブレザーとか。学ランって、僕、あまり好きじゃないんだよね。中学校でブレザーとか結構珍しいけど、うちも高等部にあ

がればブレザーだし。うん、この人物、なかなか大物の予感がしなくもない。

「……………」

若干戸惑った表情を見せながらも、なんとか教卓の前まで歩みを進め、転入生は挨拶した。

「葉林ようりん付属学院から、一身上の都合？　で、この学校に転入することになりました、大原夏輝おおはらなつきです」

葉林……？

聞かない学校名だった。付属学院ということは、病院に学校がセツトになっているということか？　それはまた、珍しい。

転入生——大原は、僕らに向かって一礼すると、『次はどうすりゃいいんですかね？』というような表情で操先生を見た。

対して操先生は、

「まあ、そういうわけで、転入生の大原夏輝くんだ。彼が言った通り、一身上の都合で、タイミングをずらしてこのクラスに入ることになった。みんな、仲良くするように」

転入生が来た時のお決まりの台詞を言うと、

「えーと、席については……茉莉沢の隣が空いてるな」

僕の左斜め後ろの席に目をやり、

「じゃあ、その席に座ってくれ」

着席するよう促した。

おお、マジか。

まさかの転校生、まさかの左斜め後ろ。

なんか別の意味で緊張するな……。

「大原くんの出席番号は11番だから、それ以降の出席番号の人は1つずつ後ろにずれることになるからな」

11番。っていうと、誕生日は8月辺りか？

といえば、悠木ゆぎさんの誕生日だ。たしか、8月19日。僕の誕生日の、ちょうど1ヶ月後にあたる。

「えー、じゃあ、出席を取るぞー。河園さーん」

「はい」

「平内くーん」

「へーい」

それからはいつも通りのホームルームだった。

なんだか拍子抜けしてしまった。この時期の転入生って、実はそんなに珍しくもないのだろうか？

高田も、依然として表情に変化はないし。

興味がないことに関しては何わりと冷めてるからな、こいつって。

「出くーん」

「え？」

他のことを考えていたため、名前を呼ばれたのに気づかなかった。

「あ、はい」

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「いえ、…大丈夫です」

「そうか」

隣にいる高田が、えもいわれぬ哀愁を漂わせた顔で僕を見つめていたが、数秒間シカトすると顔を前に戻した。

さつきから何なんだこいつは。

「1時限目は社会だな。くれぐれもチャイム着席を守るんだぞ」

やがて操先生も教室から去り、軽い休み時間的な余裕ができる。

と、その時、後ろから背中をつつかれた。

「？」

後ろの席は茉莉沢だが、彼女は僕を背中越しにつついたりしない。ということは。

「あ、俺俺」

彼女の隣に位置する人物。

大原が、あいまいな笑みを浮かべてこちらに身を乗り出していた。言うまでもなく、詐欺ではない。

「勘違いだったらメンゴなんだけど、もしかしてあんた、出湊^{みなと}？」

……ん？

あれ、おかしいな。

僕、多分この人物とは、初対面のはずなのだけれど。名乗った覚えもないはずなのだけれど。

何者だ。

転入初日から何者だ、この人物。

「……………」

「……………」

「……………」

「あー……すみません、間違えまし」

「あ、いや、合ってるよ。君の言う出湊とはまさしく僕のことだけだ……………」

僕が聞きたいのはそんなことじゃない。

「なーんだ、やっぱり。そんな渋い顔で黙られたから、心配しちゃったよ」

「何で僕の名前を知ってるの？」

「え？ あー、はいはい、そりゃそっか。うん、あんたからしてみりゃ、その反応もないじゃないわな」

「？」

「あのさ。悠木瞳^{ひとみ}って、知ってんでしょ？」

え？

今、何て言った？

何で。

どうして、この人物が。

彼女のことを知っているんだ？

「……………な、んで……………」

「実を言うと、俺、悠木瞳とは知り合いなんだ。てか……………ん、まあ浅からぬ縁ってやつ」

「知り合い？」

「そ。ちょっと……………いろいろあってさ。一身上の都合ってのは、それ」

「……はあ」

「詳しいことは説明めんどいから端折^{はしよ}るけど、ぶっちゃけ俺、悠木瞳の紹介でこの学校に来たんだよ」

「……マジ？」

「マジマジ。ちょうど、こちら辺に滞在したくてさ。どっか良さそうな学校ないかって相談してみたら、『友達がいる』って、この学校を勧められたってわけ」

「へえ」

「知らないだろうけど、悠木瞳って結構人脈あるんだぜ。俺の他にも、海外にも知人が数人いるって言うてたし、この辺りにも従姉弟^{いとこ}が住んでるって前に聞いたな」

じゃあつまり、大原は悠木さんと面識があるのか。

それは意外な接点だった。

「当たり前だけど、俺、この学校で知り合いとかゼロだからさ。ま、お互いフレンドリーなお付き合いと洒落込もうぜ」

随分とライトな性格のようだった。

悠木さんとは、相談し合えるくらいの仲なのか。

ノリ良さそうだな、大原って。

のわりには、いちいちフルネーム呼びなのが疑問ではあるが。

「じゃ、そういうわけで。悠木瞳に会ったら、よろしく伝えといってくれよ」

「ああ、……分かった」

そんなこんなで、今朝は驚きのダブルサプライズが待っていた。

……予期せぬ事態は、これで最後にしてほしい。

しかし。

そついうわけにも、行かないようだった。

- junior high school - spring 3 (後書き)

無意味な質問をします。

葉林付属学院、大原夏輝。

この固有名詞、見覚えのある方、まさかいたりしませんよね？
いるはずないですよね……いたりして……やだやめて……怖いわ……。
本当は本題に移ろうと思ったんですけど、なんか思った以上に夏輝
登場までに文字数使っちゃったんで（きりも悪いし）、次の話に持
ち越します。

悠木瞳の伏線に気づいた人、どれくらいいたんだろ……。

先に言っとく。

亮介は悪い子じゃないんだよ！

嫌いにならないでね。お願いします。

引き戸を開けて入ってきたのは、見知らぬ先生だった。

「ん？」

見間違え、か？

それとも、操先生^{みさお}、イメチェンしたのだろうか。

「えっと、ですね」

素性の分からない謎の先生は、教卓の前まで来ると、「何と云っていいのやら」とぼやいてからクラスメイトたちを見た。

もちろん、僕たちはこの人物のことを知らない。

「操先生は……」

なので、その後に続く言葉も、当然予想できるはずもなかった。

平々凡々に始まるはずだった、4月10日。

突然入ってきた先生は言った。

「失踪しました」

昨日の夜、操先生は宿直で、夜遅くまで学校の職員室に残っていました。

仕事を終え、校内の見回りをし、最後に職員室の電気を消して、先生は学校を出ました。

午後11時ごろ帰宅し、12時前には就寝しました。

次の日の朝、寝室に先生の姿はありませんでした。

先生は、毎朝6時には起きていました。

今朝は早起きをしたのだろうと判断しました。

玄関に先生の靴はありませんでした。

スーツも、カバンも、書類も……先生が出勤した後にはなくなっているあれこれが、玄関に投げ出されていました。

家中捜し回っても、先生は現れません。

先生自身と、靴だけが、その場からなくなっていました。

学校へ電話をしてみても、先生は学校にはまだ来ていないと言われました。

先生の携帯にかけてみると、彼の部屋から着信音がしました。

先生は携帯も置いていつていました。

先生との連絡手段が、完全に絶たれました。

その後、すぐに警察に捜索願いをし、近辺を捜し回りました。

先生はいませんでした。

「失踪……か……」

配られたプリントをもう一度読み返し、僕はため息をついた。

先程入ってきた先生は非常勤講師らしく、操先生が見つかるまでこのクラスの臨時の担任を務めることになった。

「このプリントは、操先生の奥さんから事情聴取をした際の証言をまとめたものです」

文庫本ほどのサイズの小さな紙切れ。手書きの文章をコピーしたらしくところどころ薄れていたが、文字からはこれを書いたのである。先生の奥さんの放心した内情が読み取れた。

ショック……だっただろう。

昨日までいつも通りに勤務していた夫が、ある日突然いなくなっただけ。

しかも消えた時の状況が普通じゃない。

「気になるのは、やっぱり……玄関の産卵具合と、携帯についてだな」

「……お前、冷静だな」

考え込んでいると、隣から暗い声が重く響いた。

「いや、逆に高田が沈み過ぎてるんじゃないか？ 失踪だったって……」

「そんな大事の様には見えないけどな」

「大事だろ。先生がいなくなったんだぜ？ 時期考えろよ、学校始まって何日目だ？ どう考えたところで、変だろこんなの……」

変、か。

それは、そうかも知れないと思う。学校が始まったのが4月5日。それから一週間もたっていない。

このタイミングは——おかしい。

それこそ、新学期直後にやってきた転入生さながらに。

「今、俺のこと疑ったろ？」

チラッと頭の隅で思っただけなのに、そして口に出したわけでもないのに、“転入生”は不機嫌な声で訴えた。

「疑ったって……何を？」

僕は観念して、左斜め135度振り向いた。

「僕がお前を、何において疑ったって言うんだ？」

「つと、失言ソーリー。てか、過言ソーリー？ どっちでもいいや。みつくん今、チラーッと操先生の失踪と俺の転入を関連付けなかった？」

「……………別に、そんなことは」

「してた。絶対してたよ。俺はこの目ではつきりと見た」

「思想は視認できねえよ」

まさか大原、読心術を心得ているのか。

……………なんちゃって。そんなはずはない。高田だって会得していないのに、まだ正体が分からないこの人物がそんな無茶なキャラだとしたら、僕は泣くぞ。泣いちゃうぞ。

「言つまでもないけど、全くの無関係。俺は圧迫です」

「圧迫？」

何か重荷を背負っているのだろうか。

「あ、じゃない潔白です」

「なかなかない間違いだな」

「“け”と“あ”を間違えて毛穴全開」

「それが言いたかったただけだろ」

どんなギャグだ。

「とりま、先生が失踪なんてことになっちまったからにや、このクラスは臨時休業か」

「んなわけない。義務教育はそんなに甘くないんだよ」

「えー。ちよつと期待したんだけど俺」

「不謹慎なやつだな……」

「臨機応変なプレイボーイといってくれ」

「ただの遊び人じゃねえか」

「差別だ！！ 全国の臨機応変なプレイボーイに対する冒涇だ侮辱だ陵辱だ！」

「全国規模で考えるほどいないと思うけど、臨機応変なプレイボーイ」

「とりあえずここに1人」

「はい1人カウント」

「向こうに1人」

「あ、そりや違う。光村は臨機応変なプレイボーイじゃなくて校内有数の健全なチャラボーイに認定されたんだ」

「それはプレイボーイとは違う？」

「違う違う、健全だしチャラだし」

「チャラって聞くとドラゴンボールを思い出すな」

「カメハメ波打つぞこの野郎」

「何でそこでキレル！？」

ともあれ、昨日今日と朝からお騒がせな1組。

僕としてはもちろん不本意だが、大原が言った通り本日は午前中で下校となった。

まあ、いきなりのことだし。

翌日、4月11日。

「今日はエイプリルフルでついた嘘を明かさなくちゃならない日なんだぜ」

「理に適ってねえよ」

というような会話をしながら、僕と高田は教室に入った。

午前8時。

クラスメイトの5分の1ほどが集まっている状態。

この後、5分刻みで、朝練を終えた運動部員↓時間にルーズな一般生徒↓友達と話しながら登校してきた女子グループ↓遅刻常習犯の面々、の順でやってくる。

あさどく
朝読開始のチャイムが鳴る8時20分までに登校してこない生徒は遅刻。こちら辺はそれほど厳しくない。

しかし、安全性を考慮して、僕と高田は8時ちょうどに登校している。悪い心掛けではないだろう。

「おはよう、みつくん」

後ろから朝の爽やかな挨拶。

この陽だまりのような温かな雰囲気は、きっと彼女だろう。

「ん、おはよう朝井」

「よお、お前はいつも朝が早いな」

「家が近いからね」

「いいよなー朝井は。家から学校が見えるんだろ？」

「直線距離だと、100m弱」

「近っ！」

あさいひなた

朝井日向。

8時から既に登校している、考え様によつては僕たち以上に用心深い人物。一般論から言えば、朝が早い。

「昨日は、いろいろと驚きの連続だったから、これでも寝つけなくて、今日は遅い方だよ。みつくんたちは規則的だよな」

「まあ、な。朝からグダグダなのは目覚めが悪いし」

「出つて何時に起きてんの？」

「午前6時」

「……家出るのが、7時40分だろ？ その間、何やってんの？」

「新聞読んだり、コーヒー飲んだり」

「うわっ、サラリーマンかよ」

「カフェインは朝に摂るべき成分だと思わないか？」

「それ分かる。コーヒー飲むと頭がスッキリするよね」

「え、マジ？ 出も朝井も朝はコーヒー飲んでんだ」

「高田は飲んでないの？」

「あー……俺は……時間ないし」

「……たてまえ……
というのは建前で」

「本当はコーヒーが飲めないんだよね。高田くんって餓鬼だよね」

「……！！ うわ……今来たわ……心臓部に来たわ……これがホントのハートブレイク……」

この女生徒、実は隠れ毒舌キャラである。

高田がブローケンハートなので、代弁。

キャラの解説って楽しいかも。

「あ、鏡崎くん」

「あ」

とつさに後ろの引き戸を見やると、たしかにそこにはやつがいた。

……よな？

あれ、鏡崎だよな？

なんか、えらく落ち込んでいるようだけど……。

「……昨日の先生の失踪が原因だな、うん」

「鏡崎くん、どうかしたの？」

「……」

「？」

「……」

「おーい、鏡崎？」

「……帰りたい」

「は？」

高田と朝井が、揃って首を傾げる。

ナイスなことに角度が等しい。

何の以心伝心だ。

「帰りたいって……どうしたよ？ 具合でも悪いのか？」

「……あ……ん？ 誰かと思えば、高田ちゃんと朝井さんじゃないか。いつからそこにいた？」

「え、さつきからいたけど」

「僕としたことが、気づかなかったよ……」

気丈に振舞っているように見えるが、明らかに様子が変だった。そんなにシヨックだったのか、操先生の失踪。

「——はあ……」

おぼつかない足取りで自分の席へと歩き、カバンを置いて机に顔を伏せる鏡崎。以後、死んだように動かない。

「鏡崎くん、どうしたのかな？」

「さあ？」

「余命宣告でもされたような表情してたね」

「ありや1ヶ月もたないパターンの表情だった」

「これが花嫁だったら感動ものだけど」

「まあ、死なねえだろ。死んだところで感動ものじゃねえな」

「逆に白けるのが目に見えてるね」

「だな」

朝井の毒が高田に移った。

くそ、いいやつだったのに。

「いつそこの手で……」

「ちょ、待て待て。この話、今のところキーワードに『残酷な描写あり』はないからそれはまずい！」

不毛な言い争いをしている残酷な描写@二次元たちをよそに、再び引き戸が開かれた。

時計を見ると、8時12分。

時間にルーズな一般生徒がやってくるころだ。

「そろそろ席に着こうかな」

のんびり移動しかけたその刹那。

とまった。

僕の足だけではない。

高田も、朝井も、その他教室にいたクラスメイト全員が。
瞬時に、とまった。

「……………」

「……………」

「……………」

鶴嶋京平。

滅多に登校してこない不登校児が、教室の中でただ1人、自分の席に向かって歩いていった。

「いい朝だね、鶴嶋くん」

自分の席に座って本を読む鶴嶋に、鏡崎が皮肉げに言った。

こいつ、いつの間に回復していた。

いや、ダメージを喰らっていたわけではないけれど。言葉のあや。「学校で会うのは何ヶ月ぶりかな？ 半年？ もうそれくらいってるね」

「……………」

「学校には来るんだ……去年は2度しか来なかった癖して、3年になったとたんどうしたんだい？ さすがに留年を恐れたのかな？ 今年は進級テストもあるからね」

「……………」

「不満を言うわけではないけどさあ。君みたいにやる気のない生徒が、今日みたいに気まぐれに学校に来るの、やめてほしいんだよね」

「……………」

「君が教室に入ったとたん、空気が変わったのが分からない？ 皮膚科の先生紹介しようか？ いや、君の場合は……精神科医か」

「……………」

「そうやってだんまりを決め込むのって悪い手じゃないけどさ、取調べじゃないんだから、黙秘権なんて通用しないよ。それとも、何か後ろめたいことでもありそうな態度だよね……見様によつては」

漠然と、鏡崎が誘導したい話題が分かってきた。

こいつらしい、回りくどい手段だ。

「……………」

「いつまでも黙ってればいいと思ってもらっちゃ困るよ。何も言わないことは意思表示じゃない、ただの逃避だ」

「………」
「もしかして、君が今日登校してきたのって、操先生が失踪したのと何か関係があるなんてこと——」

「——やめてよ！——！」
バン、と。

机に両手を叩きつけた音が響いた。

窓際の席の男子が、我慢しかねたといった風に立ち上がっていた。
鶴嶋ではない。

「鶴嶋くんは……関係ないよ。ただ登校してきただけだ」

「………」
「……根拠もないのに、人を疑うのって………良く、ないよ………」
急激に勢いをなくしていく声。

「……フン」
鼻で笑って、鏡崎は声の主を睨んだ。

「早合点はやめてほしいな。僕がいつ、誰に、鶴嶋くんを疑っているなんて言っただんだい？」

「……！」
「疑ってるのは君の方だよ。人のことを言えないね」

「………」
冷たく言い放たれ、すっかり畏縮（いしゆく）してしまったらしく、反論の言葉はなかった。

怒ると怖いよなー、こいつって。

「………」
「おい」
鏡崎が口を開きかけた、その時。

鶴嶋が席を立ち、鏡崎の席に近づいた。

「………」
「ヤバイ。
殴るか？」

鶴嶋のガタイから見ると、喧嘩とか結構強そうな気がする。
ていうか、完全に傍観者だな、僕。

現場はこんな雰囲気じゃありませんよ。

「何が言いてえのか知らねえが」

低い声で唸るように言う鶴嶋。

貫禄あり。

「いい加減黙れ。耳障りだ」

それだけ言っつて、鶴嶋は席に戻ることはせずに、そのまま教室から出て行った。

「……………」

「……………」

引き戸が閉められる音が、エコーのように長い余韻を教室に残した。

鏡崎は思案顔で、先程異議を唱えた男子を睨んでいた。

それきり、鶴嶋は教室には戻ってこなかった。

これもまた、話題の一部が持ち越し……。

私の書く小説は、無駄話が多いんだな。夏輝との絡みとかコーヒ
ーの件とか、削れるネタはたくさんあるんだけど、ここら辺はノリ
で思うがままに書いてるから……とまらない……きり悪いのとかやだし
…。

京平をかばった声の主とは一体誰でしょう。

つつても、次話で普通に明かすんだけど。この人物、春キャラの
中である意味一番恐ろしいかも……ついに『残酷な描写あり』にチ
エック入れなきゃならない時が来るのか……。

いや、ないに越したことはないですけどね。ホント。

波乱の11日から24時間たった、4月12日の朝。

「マルチ商法ってキャリア豊富なセールスマンが使う奥義なんだぜ」
「詐欺の一種だよ」

というような会話をしながら、僕と高田は教室に入った。

いつも通り、8時ピッタリにアルミサッシの敷居をまたぐ。なぜ引き戸のサッシがアルミ製なのかというと、窓に使ったサッシが余ったのでリサイクルは大切だということで再利用されることになった、なんていう裏話があったりするのだが、要は経費削減だ。

珍しいことに、今朝は室内に誰もいなかった。下駄箱には誰かの靴があったはずだけれど、どの机を見てもカバンは置かれていない。どこか別の教室にでも寄り道しているのだろうか、こんな朝早くに別に僕としては関係ないけれど。

昨日の殺伐とした雰囲気か嘘のように、朝の3年1組は静まり返っていた。というか、教室にいるのが僕と高田だけで、いずれも喋っていないのだからそれは当たり前なのだが、それにしても空気が違い過ぎる。

あれから、教室から去っていった鶴嶋の行方を追って、例の非常勤講師、御影さん（まだ20代前半なので、どうしても“先生”をつけて呼ぶのに違和感を感じる）が奮闘していたらしい。当の本人は結局帰ってしまったみたいで、放課後に鶴嶋の家に置いていったカバンやら何やらを届けに行ったそうだ。操先生の受け持つ教科は英語なので、英語科専攻の非常勤講師を選んだという話を職員室で聞いたことがあったが、この御影さん、非常勤にしておくにはもったいないほどのクイーンズ・イングリッシュを持ち合わせていたのだった。いや、それは言い過ぎかもしれないけど。

閉話休題、とにかくにも、非常勤という肩書きに似合わないほど尽くしてくれる、実はいい人物であることが判明したわけだ。無

論、操先生が見つかり次第このクラスからは外されることになるのは分かっていたから、御影さんも一時的なそれという認識で動いていたのだと思うが。

なんて、ちよつと物思いにふけっている間に時は過ぎ、朝のホームルームが始まった。

「……あーあ……早く操先生見つかつてほしいなあ……心配だなあ……」

そう呟きながら教室に入ってきた御影さんに対し、暗黙の了解アゲインで自主的に席を立ち、挨拶をするクラスメイト一同。

号令もなしに一方的に挨拶をされてしまった御影さんはかなり驚いた様子でうろたえていた。昨日はあんなことがあって挨拶どころじゃなかったしな……。

「えっ……と……。じゃ、とりあえず出席。河園さん」

この人の性格なのか、それともホームルームというものに慣れていないのか、なんとなくグダグダな感否めない。しかしまあ、及第点ということで良いのではないだろうか。多くを期待し過ぎるのは彼にとっても負担だろうし、ていうか何で僕こんなに上から目線なんだろう。ごめんね御影さん。

「佐上くん」

と、そこで唐突に、順序良く進行していた健康観察が途絶えた。

「あれ……佐上くん、いない？」

それを聞き、心当たりがないでもない僕と高田は彼の席を見た。

佐上惇。^{さがみじゆん}昨日展開された鏡崎と鶴嶋の一騎打ち（簡潔に言うと一

方的な尋問）に割って入った人物。当時の挙動からも分かる臆病な性格で、クラスに馴染めている様子もなく、1ヶ月後にはいじめの対象にされていてもおかしくないポジションにいる男子。彼とは鶴嶋と同じ時期、つまり中2からの付き合いになるが、内向的な性格故かほとん^{ゆえ}ど関わりを持たなかった。昨日だって、普段ならばあのように急に怒鳴ったりするような人物ではないだけに驚いた。

「……欠席？ ま、いいや……えーと、………？ ん？」

「あ、出でいっせす」

半ば予想できていたので、自主的に挙手した。

それほど珍しい苗字でもないけれど、読めない人がわりといる。

「？ はあ……」

分かったんだか分からなかったんだか、曖昧な表情をして、御影さんは健康観察を再開した。

最後の人物の名前を言い終わり――。

ん？

「鏡崎くんも、休みか？」

そういえば、朝から見ていなかった。あいつは遅刻なんてしないだろうから、今日は欠席らしい。

珍しいこともあるもんだな……。

「――で、なんで俺たちが行かなくちゃなんないんだよ！」

「これも、薄々感づいてはいたけど……まあ仕方ないよ、確かに僕たちの方向はあいつの家に近いんだから」

なかなかマイナーな区域でのお約束だが、僕と高田が鏡崎の家へ書類を届けることになった。

タイミングの悪いことに、明日が新入生歓迎会ということでたくさんプリント類、それにプラスして“新入生歓迎会のしおり”（なぜ歓迎する側の僕たちにもしおりが必要なのだろう……）、さらには遅れて配られた理科の移行措置教材（3年の場合、表紙が緑色で刷られている、薄い冊子だ）まで、てめえら確信犯がこの野郎的な質量の配布物が一斉に配られたのだ。あいつ、もしかしてこのこと知ってて持ち帰るのが面倒だから仮病したなんてことはないだろうな。確信犯はどっちだ。どっちもか。

あー、面倒くさい。何で僕が、よりによって喧嘩をしている相手に、常軌を逸したボリユームの書類を届けなければならないんだ。逆に困るだろ、渡された側も。何かの罰か。天罰なのかこれは。

「高田は御影さんに言われてないんだろ？ なら、来なくても構わ

なかったのに」

「孤独な俺はお前以外に帰路を共にする仲間がいなんだよ！」

「ご愁傷。こっち方面の生徒って少ないけど、それだっていなくはないんだから誰か作れよ」

「友達は作るものではない、得るものだ」

「あつそ。じゃ、頑張つて友達ゲットしろよ」

「故意にぞんざいな言い方すんな！」

「そりゃ左遷」

「……？」

「聞き流していいよ」

とはいっても、学校から鏡崎の家まではそれほどの距離でもない。寄り道といえるほどずれた場所にあるわけでもなく、書類を届けること自体はそんなに面倒なことでもない。

むしる問題は相手。

「そろそろか？」

「ああ……あのグレーの家だ」

ここら辺は、僕の家ほど閑散としてはいないが、やはり人が少ない。近くにお店やら娯楽施設やらが不足しているわけでもないし、梅崎ショッピングモールが影響しているわけでもなく、どちらかと言うとメンツの問題だ。たしかこの辺は、3組の葵が住んでいたっけ。あいつもあんまり活発なキャラじゃない。

育つ環境ってのは、なかなかどうして人格に影響を与えるもんだよな……。

僕の人格も、周りによって形成されたものなのだろうか。

だとしたら、一体誰に？ 姉？ 父？ 母？ それとも悠木さん？ まさかの慧先生？

……。

ないない。

この人格は、完全に僕個人のオリジナル。もしくは……サラブレット、かな？

「あれ、きみ達。我が家の前で何やってるんだい？」

インターホンを押そうとした時、そばから声をかけられた。

「……………」

えーと……誰だろう。

鏡崎の家族？

うわ、なんかタイミング悪いな。

「おばさんたちに何か用でもある？」

「？ おばさん……って、あ」

もしかしてこの人、前に話に聞いたことがある、あいつのイトコか？

そっぴい最近遊びに来てるとか言ってたような…。

女の人だとは思わなかった。

「松嶺大付属中？ じゃあきみ達、亮介の知り合いだったんだね」

「はい、まあ……そうです。学校から書類を届けるよう言われまして」

「書類？」

「はい。……じゃ、あの、鏡崎に渡しておいてくれますか」

「亮介はいないよ」

「え？」

「昨日から帰ってきていないが」

「帰って……ないって、どういうことですか」

「そのまんまだよ」

あいつ、欠席したんだよな？

てことは、普通に考えて自宅にいるものだと思っていたけど、まさか帰ってきていないとは。

それに、昨日から？

……それって、客観的に見ても、かなりマズい事態なんじゃ……。

戸惑う僕を無感情な目で見つめて、イトコさんはつぶやいた。

「これはさっき、おばさんに聞いた話だけれど」

「はい？」

「昨日の夕方、亮介からメールがあつたそうだよ。友達の家泊まるって。だから、そんなに心配する必要はないと思うよ」

「え……泊まり、ですか？」

「うん。おばさんも心配してたみたいだけど、メールが届いてからは天真爛漫な様子で南米のドキュメンタリーを観て爆笑してたよ」

……南米のドキュメンタリー？

鏡崎の母はわりとラテンアメリカ人だった。しかも、爆笑とな……

…。

「じゃ、そのうち帰ってくるんですね」

「だと思っけど」

「友達の家って、その友達は誰ですか？」

「んー……それは聞いてない」

「そうですか……」

……あいつの友達………。

いたっけ？

1組にはいない気がする。かといって、他のクラスとはあんまり関わりもってなかったし。

「分かりました。ありがとうございました」

「お礼を言われるようなことは何一つしてないよ」

「いえいえ」

最後にもう一度頭を下げ、僕は鏡崎家を去った。

今度来る時は要注意だな……。

あのイトコさん、侮れない。

「話終わったか？」

「高田。お前、さっきまでどこにいたんだ？」

「舞台裏。あんなに俺が加わったら、ごちゃごちゃしてスムーズに進行しないだろ。ああいう重要な会話の場面は、1対1の方がいいんだよ」

「つまりは僕を置いてトンスラしたって訳だな」

「そうとも言う。あ、いや、言わない言わない。空気を読んだんだ

よ」

「空気は読むものじゃない、吸うものだ」

「リアリティのある格言だな……」

まあそうなんだけどさ、と、乾いた笑みを浮かべながら僕の横に立つ高田。

「あいつ、友達の家に泊まってると。自宅には昨日から帰ってきてないらしい」

「え。……友達って、誰よ」

「さあね」

「いるのか？ あんな気難しい性格した人に、友達なんて……」

「僕はその１人らしいよ」

「すげえな出」

「嬉しくないよ」

再び歩き始めた僕の耳が、聞き覚えのある声をとらえた。

んーと……誰だったっけな。最近聞いたぞ。

「……なんか聞こえない？」

「あ？ ……言われてみれば。これ、佐上の声じゃないか？」

佐上？

何であいつが、ここに？

欠席したんじゃないかったのか？

「誰かと話してるみたいだ。……こっちから聞こえる」

「おいおいおい。何する気ですか出くん。まさか盗み聞きとかするつもりじゃないですよ出くん？」

「盗み聞きは悪いことじゃない。周りに聞こえるような音量で喋る相手が悪いんだ」

「はいはい、屁理屈はお手のものだな」

「おかげさまで」

「俺は関与してねえよ！」

「お前の評判を下げるためのネタだ」

「ひでえ！」

もちろんネタはネタであり、それ以上でもそれ以下でもない。

言うまでもないけれど、僕の屁理屈について高田は無関係なので誤解しないように。

雑念は捨てて、耳を澄ます。どうやら話し声は裏の空き地からするようだった。“裏の空き地”なんて描写をしまつと、なんというかいかにも過ぎてしまつので、もっと現実的に表現するとしてた“梅崎ショッピングセンター開店により客を根こそぎ奪われてあえなく取り壊しとなった寂れた一商店跡地”とでも言うのだろうか。いや、リアルすぎだ。もつと夢を見てもバチは当たらない。

「……………鶴嶋？」

コンクリートの壁からそつと覗いてみると、そこには佐上と鶴嶋の姿があった。

何か話しているようだが、この距離からじゃよく聞こえない。

「あの二人、関わりあつたっけ？」

「何とも言えねえな。佐上はクラスでも地味で臆病なやつだし、鶴嶋はまず学校そのものに来ねえもん」

「裏で繋がっていたとしても不思議はない、か……」

「でも、佐上も鶴嶋も今日は欠席してたよな？　こんなところで、何油売ってたんだ？」

「油売ってるわけじゃないよ。何か話してるみたいなんだけど、声が聞こえないんだ」

「もーちよつと、近づいてみるか？」

「は？」

言う間もなく、高田は僕の腕を引っ張って、“梅崎ショッピングセンター開店により客を根こそぎ奪われてあえなく取り壊しとなった寂れた一商店跡地”——“裏の空き地”でいいか——に生えていた低木の陰に隠れた。佐上たちとの距離、約5m。

「ちよ……っ！！　見つかったらどうすんだよ！」

「見つかってないんだからいいだろ」

「見つかった場合のことを言ってるんだ！」

「俺は見つからなかった場合のことを言っただよ。事実、見つからなかったろ？」

「……………」

言いたいことは山々だったが、あえて黙ることにした。不毛だ。噛み合わない会話というのはここまで不毛なものなのか。

「いいから黙れって。ここで騒いだら水の泡じゃねえか」

「シッ。……お前の声は常日頃ボリュームというものを知らないのか？」

「ボリュームってのは、あれだろ、ホーンみたいなもんだろ？」

「違う。ホーンは声の大きさの単位だ」

「詳しいな」

低木の葉がガサガサと音を立てる。今日はあまり風が強くないので、下手に動いたらごまかしきれない。

「見つかった時に、猫の鳴き真似して上手く逃げるってのは王道だからな」

「男の僕が猫の鳴き真似をしたら首んとこにシャンプーハットみたいなのをつけた病気持ちの猫と間違えられる可能性がある」

「ねえよそんな専門的知識が要求される間違い」

「もしかしたら、親が獣医とかいるかも知れないじゃないか」

「だとしたら、それこそ猫の声じゃないって一発で分かるだろ。てか静かにしろって言ったのはお前なのに、何騒いでんだよ」

んな理不尽な……。

騒がせたのはどいつだ。

ともあれ、かなりダイレクトな手段ではあったが佐上たちに接近することができた僕は、再び耳を済ませる。

……いえ、盗み聞きじゃないですよ？

「——…から、ついカツとなっちゃって……」

「あれは不自然すぎんだろ……勘のいいやつは察しがついたかも知れねえ」

「ごめん……でも、……でも許せなかったんだよ。だって京ちゃんは

悪くないのに……」

「おい」

「あ………、……ごめん、僕も悪かったよ」

「……いや……」

「でも、これだけは言わせて。京ちゃんは悪くない。何も悪くないんだよ。だってあれは不可抗力だし——」

「そうはいっても……手を下したのは、他でもないこの俺だ。俺に非がないわけがねえ」

何の話だろう？　なんとなく絞れはしたけど、漠然としていて全容が掴めない。

何て言うんですか、並々ならぬ関係ですねこれは。

絶対なんかありますよ、こういう意味深な会話の裏には。

「つて、何気に敬語キヤラになってるぞ、僕」

「あ？　なんか言ったか出？」

「いや、何でも。……それより、高田も聞いただろ今の話。分かるか？」

「ぜーんぜん。さっぱり意味不明。隠語盛り沢山って感じだな」

「……しかしな。今、鶴嶋が『手を下した』って言っただろ？　それがキーワードのような気も、しなくもないんだけど……」

「手を下した、ねえ……。それって、ニュアンスを変えればわりと何にでも使えるフレーズだよな」

「そうっっちゃそうだけどね。どこその宗教団体気取りのイカレ野郎なんかがぼざいてそうなたわ言だ」

「………お前、『手を下した』ってフレーズに何か恨みでもあんのか？」

「え？　ないけど？」

「あつそ……」

今朝のような哀愁を漂わせる顔を復元させる高田。

坂本竜馬に見えなくもない気もするけれど見えない気もしなくもないし見えていたとしてもそれは一種の錯覚でしかないのであろう

ことから多分見えていないということは明白だからきつと見えていないのだろう。

と、低木の向こう側で鶴嶋が強い口調で何かを言った。

僕はもう一度耳をそばだてる。

「……お前……そんなことして、ただで済むと思ってるのか」
「……済まないだろうね。きつとただでは済まないよ。でも構わない。はなっからただで済ます気はないしね」

「だからってお前……」

「僕はさ、京ちゃんを侮辱する人間がひたすらに許しがたいだけなんだよ。大丈夫、ただの個人的な怨恨じゃないから。言ってみれば、そうだね……これはある種の取引だよ。京ちゃんのことは、まだ学校側には伝わってないんでしょ？ 周りに知られたらいろいろと面倒だし、まだ公になっていないうちに京ちゃんのこととはもみ消さなくちゃならなかったんだけど……。ごめんね、僕の手違いで、あまり円滑には進まなくなっちゃった。だから強行に出るよ。さすがに生徒を人質に取られたら学校側だって成す術なしだろうからね。そこまで鬼になれないでしょ」

「人質？ おい、佐上、それは……」

「うん。そういうことだよ。言っただでしょ、ただの個人的な怨恨に突き動かされての行為じゃないんだよこれは。至極合理的な手段なんだ。僕の恨みも晴らせるし、京ちゃんの罪も晴れる。正確には、なすりつける形になるんだろうけど、それはまあ誤差の範囲。僕は京ちゃんの罪を失くすためなら何だってしちゃうからね、これくらいは朝飯前だよ」

心なしか、佐上の態度が随分と変わったように思える。さっきまでは鶴嶋が会話の主導権を握っているような気がしたけれど、今じゃ真逆だ。むしろ佐上の独壇場で、鶴嶋がついていけなくなっているようにさえ感じる。

あれ……佐上って、こんなよく喋るやつだったっけ？

鶴嶋の前だから素の自分が出せるとか？

「……出……まずい」

「ん？」

振り返ると、高田が異常なまでに目をしばたたかせていた。
こんな重要なシーンに何をやってるんだこいつは。

「どうした？ 高……」

「ダッシュで逃げ」――

言いかけて、言いかけたその刹那。

盛大なくしゃみが空気の波となって聴覚器官を駆け抜けた。

……な……。

「高田あああああああ……！！！！！！！！」

「悪い！！ マジ土下座するから、とにかく逃げろ！！ 息とめて
全速力で走れ！！」

言われなくともそれしか選択肢ねえだろこの野郎！！

とことん右脳発達型キャラだな！！

「そこにいんのは誰だ！！」

いち早く察した鶴嶋が低木に近づく。 気配だけで分かるハイエン
ドなどや？ 顔。

おお、関西出身以外で、ここまでどや？ 顔が似合う人を、僕は初
めて見た。

とか言ってる場合じゃないんだけどね！！

これ見つかつたら完全にフルボッコパターンだよね！！

クソッ恨むぜ高田！！

「……、……？」

F1王者も真っ青の超スピードで地上を駆けた僕と高田は、幸い
にも鶴嶋に見つかることなくその場を後にすることができた。

- junior high school - spring 5 (後書き)

ああ……なんでだろ……この小説には理屈っぽいキャラしか登場しないのだろうか……それが最初はそうでもなかったけどだんだん周りの影響で理屈っぽくなっていったのかな……うああ……寛人とか京平もいつかはあんな風になっちゃうのか……そんな未来は嫌だよー(泣)

まあアレですね、アルマジロがまず友達に「理屈っぽい」ってよく言われるのが原因ですね。呆れるほどに明快、なんて素敵。

4月13日。

僕は基本的に登下校は高田とプラス不特定多数で済ませているのだが、今日は1人だった。といっても、あくまで“基本的に”なので、別にそうそう珍しい出来事でもない。週に1回あるかないかの割合だ。一人でも全然困らないし、ぶっちゃけ昨日高田によって酷い目に遭わされたので、グッドタイミングと言えなくもない。

見慣れた廊下を歩きながら、僕は昨日の佐上と鶴嶋の会話を思い返していた。

もちろん、あれはあくまで会話の一部始終でしかない。端から端まで、プロローグからエピローグまで全てを余すところなく聞いていたわけではないのは分かっている。だけれど、その短い会話の中に、気になる単語がいくつか出てきていた。

『ついカツとなっちゃって……』

『許せなかったんだよ。だって京ちゃんは悪くないのに……』

『あれは不可抗力だし——』

『僕はさ、京ちゃんを侮辱する人間がひたすらに許しがたいだけなんだよ』

『京ちゃんの場合は、まだ学校側には伝わってないんでしょう？ 周りに知られたらいろいろと面倒だし、まだ公になってないうちに京ちゃんのことともみ消さなくちゃならなかったんだけど……』

『生徒を人質に取られたら学校側だって成す術なしだろうからね』

『ただの個人的な怨恨に突き動かされての行為じゃないんだよこれは。至極合理的な手段なんだ。僕の恨みも晴らせるし、京ちゃんの罪も晴れる』

『正確には、なすりつける形になるんだろうけど、それはまあ誤差の範囲』

以下は佐上の言葉を抜粋したものだ。

これだけを聞く限りでは、やっぱり漠然としたものしか想像できない。ただ、この会話によって立証できたことが1つある。

鶴嶋は過去に重罪を犯し、それについて佐上は常人以上によく知っている。そして佐上は鶴嶋の罪を他人になすりつけることで逃れさせようとしている。つまり鶴嶋と佐上の間には、他の人にはない繋がりがあるということだ。切っても切れなくらいの、一生付きまとう繋がりが……。

それだけでも収穫か。

しかし……、あの臆病な感が否めない佐上が、まさかあんなに物騒な話を平気な顔して言つてのけるとは。人間って恐ろしい。

……………と、おい。

ちよつと…待てよ？

『京ちゃんを侮辱する人間』？

『個人的な怨恨』？

——『ついカツとなっちゃって』？

「待てよ……そんな、そんなこと……佐上だぞ？ あいつが……あいつが、そんなことできるはず……」

「なーにブツブツつぶやいてんだ、みつくんよ」

無意識に言葉に出していたらしく、後ろからグイツと首に腕を回された。

言うまでもなく、高田の仕業だった。僕が1人でいると狙ってくるんだよなこいつは。もしかしたら昨日のことを少なからず反省してるかなどうなのかな、とうつすら期待していたりしたのだけど、完膚なきまでに全否定された。再認識。こいつは良い意味でも悪い意味でも、過去を振り返ることをしない。

ついでに高田は、これまた言うまでもなく友達が多い。頃合いを見て僕のところへ来るらしい。迷惑といえば迷惑だが、ありがたいと言えはありがたかった。しかし、今日は無論前者だ。

「昨日のこと、憶えてるだろ」

「…つーと、佐上たちのことになんのか？」

「ああ。……ちょっと、恐ろしいことに気づいてしまったね、どうしたもんかと今さっき思い悩んでいたところだったんだ」

「恐ろしいことって何だよ」

「いや、これは恐ろしい。今や佐上は完全に僕の中でブラックリストに登録されている人物だ、普通じゃ考えられないような凶行に及んだとしてもおかしくはない……むしろ、あの言い分からなにか行動を起こしていない方が僕としては恐ろしい……」

「おーい、出くーん？ 出湊くーん。聞いてるかなー。突発的に聴力下がったかのかなこの子ー」

「高田」

「はいはい、何よさつきから好き勝手だなお前は」

「携帯持つてるか？」

「持つてるけど。って、あ、おい、何言わせてんだよ、先生に聞かれたら即没収……」

「貸してくれ」

「マジで何なんだホント……、分かったから、場所移させてくれよ。ここ廊下だぜ？ そんでもって8時5分だぜ？ そろそろ一般の生徒が来る時間帯だぜ？ 俺の携帯を永久凍土させる気か？」

「どこでも構わない。とにかく一刻も早くあいつと連絡を取りたいんだ」

「あいつって誰」

「すぐ分かる」

僕と高田は教室前の廊下を全速力で駆け戻り、階段を下りて視聴覚室に向かった。この教室だけは、常時鍵がかかっていない。

僕ら3年生の教室は3階にある。2階は1年生の教室と一般的な特別教室。1階は職員室や保健室など。一部生徒立ち入り禁止区域があるので全容は分からない。

視聴覚室は2階の奥にあった。視聴覚なんていっても、実際に視聴力検査するのは保健室なので、この教室に存在価値は存在しないということになる（余談だが、中等部の頃から思っていた疑問の

1つに、“なぜ年に1回の視聴力検査をするためだけに1つの教室を割いてしまうのか”というのがある。これは未だ解決されていない。考えてみてほしい、そして出来れば教室の割り振りを決定する校内の上層部の人間になったつもりで考えてみてほしい、視聴覚室など必要か？ 必要だろう。全て保健室で事足りるじゃないか。現に今まで視聴覚室には総合や学級活動の授業で何度か行ったことがあるが、いずれも校外学習のビデオを観たりプレゼンテーションによる発表の際などにしか使わなかった。全く別の用途に使われてしまっているのだ。以下のことから、視聴覚室は即刻廃止、せめて改名をすべきだと僕は思う）。

「ここなら誰も来ないと思う」

「うはー……視聴覚室なんて久しぶりに来たよ」

「じゃあ、そろそろ携帯を貸してくれないか」

「いいけど、何に使うんだ？ 勝手に人のプライバシー覗き見たりするなよ」

「……ロックかけてないのか？」

「わずらわしくなってるさ。メール来るたびに端末暗証番号押さなくちゃなんないのも面倒だし」

「お前にプライバシーを語る資格はない」

「ズバツと言うなお前も」

高田から携帯を拝借すると、11桁の数字を素早く入力して発信ボタンを押した。

鳴り止まないコール音が不安を増幅させる。

唐突にコール音が止まり、口を開きかけたところで、留守電サービスに接続する無機質なアナウンスが聞こえた。

パワーボタンを押して待ち受けに戻すと、僕は携帯を高田に返した。

「だめだ……つながらない」

「だから誰に」

「つながらないということは手元に携帯がないということで、手元

に携帯がない高校生なんてのはなかなか珍しいことから考えると、つまりあいつは手元に携帯がないというわけか」

「何言ってるのか理解不能になってんぞおい」

「高田」

「何だよ。てか人の話1ミクロンも聞いてねえだろ」

「僕の予感の外れてなかったよ……出来れば外れていてほしかった予感だったのに、何てことだ……」

僕はしばらく頭を抱えた後、視聴覚室の扉を開けて廊下を走り、階段を駆け上った。すでにチャイムは鳴ってしまっていたので遅刻はまぬがれないが、それよりもまず第一に確認しておきたいことがある。もしかしたら、本当にわずかな可能性だがもしかしたら、外れているかもしれない。

「教室に行こう」

「ったく、お前冗談抜きでなんか精神病にでもかかったのか？こんなに慌ただしいやつじゃなかった気がするけど……って、お、ちよつ、待てよ出！ お前ホントにインドア派かよ、すげえ脚力だな！！ 置いてくなよ、おいっ！！」

みなさんご存知だと思いますが、みつくん、超おバカな勘違いをしております。

視聴覚室は、視聴力検査をするための教室ではありません！ 視覚と聴覚を使った授業を行うための教室です（合ってるかこの説明）！

アルマジロはもちろんご存知ですよ。ええ、ご存知でしたとも。先週友達に教わったもんね。これで私も視聴覚室のことを説明できますよ。よっしゃ！

えー、というわけで、今回は都合上、若干短めです。というのは、もうこの際隠してもしょうがないから暴露しちゃいますけど、次回は語り手が変わるんですね。はい。ホントはそんなつもりなかったんですけど、そしてこれ以降そういう事態は起こらないよう気をつけるつもりですけど、今回は許して下さい。不可抗力なんです！

すごくどうでもいいけど、寛人の携帯には銀で縁取られたガラス製の青いスピードマークのストラップが付いてます。うーむ、どうでもいい。

思考タイム。

もう一度、最初から最後までよくよく思い出してみるんだ。どこかに欠陥があるに違いない。きっと何か、重要な何かを忘れてしまっている。

……分からない。

全く分からない。

もう、何度頭をフル回転させたか分からない。記憶力は悪い方ではないけれど、それだってこの世に生を受けてから今現在まで全ての記憶を司っているわけではもちろんない。そんな人間は存在しない。だから、僕が思い出せたのも、11日の夕方、7時から始まる塾に間に合うようにクラブを早退して帰路を急いでいた午後6時の時点までだった。

そこまでは思い出せる。11日の夕方までの記憶は残っているのだ。

なのに、それからの記憶が全くと断ち切られていいほど記憶に残っていないとはどういうことだろう。

分からない。

分からないと、不安になる。

自分のことなら尚更だ。

——そして、ここがどこかも、僕には分からない。

それを思い出そうとして、ずっと記憶を掘り返していた。しかし手がかりはなく、部分的に記憶を抹消されたかのごとく、異常なまでに僕は、あれから何が起こったのかを憶えていなかった。

いや……もしかしたら、元々、憶えてさえいなかったのかかもしれない。

この場所に見覚えはない。それは確かだ。同時に、それだけにしか確信を持てないということでもある。

光が届かないため一概には言えないが、手触りのみで判断する限り、床はおそらくフローリング。ということは、ここは室内？　そういうばさつきから風を感じない。どことなくひっそりとした、じめじめした印象を受ける。広さが分からないので壁の有無、あるいは材質は分からない。この空間内に人がいるのかどうかすらも、分からなかった。

分からないことだらけだ。

分からないと……不安になる。

と、その刹那、きしむ様な物音がした。静かな空間内で妙に響き渡るその音と共に、一筋の閃光が目飛び込んできた。

ドア。これで、この空間が室内であることは間違いない。

きしむ音はほんの3秒ほどだったけれど、随分と長く感じられた。音が止んだ。扉は半分ほど開いていた。差し込む光に目が慣れない。

「……………」

扉が開いたということは、それは誰かが扉を開けたということで、そこに誰もいないはずはない。

なのに、扉の向こうにいるであろう人物は、終始無言だった。

「……………」

無言。文字通り右も左も何も分からないこの状況で、それほど苦しいものはない。

声を聞く。相手が人間であることを理解する。それによって、いくらかの安心を得ることが出来る。

何も言葉を発さない、扉の向こうの人物は、一体何者なのか。それが分からない限り、警戒を解くことは出来ない。

安心なんてもつての外だ。

「……参ったね……。まあ、期待はしてなかったけど、そこまで無言だと相手さんも戸惑っちゃうじゃないか」

新たな声。

といっても、正確には扉を開けた人物の声を聞いたわけではない

ので分からないけれど。

新たに現れた人物は、扉からすり抜けるようにして部屋の中に入ってくる。逆光で表情は分からない。しかし、言葉を話すということは人間だ。

それだけ分かればいい。今は、細かいことを気にしていられる状態じゃない。

「あれ。……もしかして、僕が誰だか分からない？ そんなはずはないよね。まさか……そんなはずは、ないよねえ」

分からない。

声を聞いてもなお、この人物が誰なのか、分からない。

思考が麻痺しているのかもしれないし、突然の事態に頭が追いつけていないのかもしれない。

「本当に分からないみたいだね。困ったな……確かに、クラスでは目立たないよう努力はしてたつもりだけどさ……功を奏したとは言えないな。君に忘れられるようじゃ、むしろ逆効果だ。あれだけじやインパクトに欠けてたみたいだね。もっと派手に演出するっていう手もあったにはあったけど、そうすると後々困っちゃうし、京ちゃんとの関係性も疑われそうだ。それだけは阻止しなくちゃならなかったもんだから、ああいう微妙な言い方しか出来なかったんだよね。あーあ、それも今では全く意味を持たないよ……」

1人で勝手に話を展開する目の前の人物。
クラス？

この人物は、3年1組のクラスメイト？

「そうやってだんまりを決め込むのって悪い手じゃないけどさ、調べじゃないんだから、黙秘権なんて通用しないよ。いつまでも黙っていればいいと思ってもらっちゃ困るよ。何も言わないことは意思表示じゃない、ただの逃避だ」

……分かってしまった。

分かりたくない事実だった。

こればかりは分からなくても一向に構わなかったのに、全く、

人生というのは本当に上手くいかない。

上手くいかないのが、人生なのか。

そんなことはどうでもいい。

今となつては、どうにでもなる。

「これは、君が京ちゃんに言つた台詞だよ——鏡崎くん」

「……………」

「あーら。まあだだんまりを続けるつもり。根性あるね。むしろ1周回つて根性なしつてところかな」

「……………」

「分からない。うん、よく分かるよその気持ち。分からないよね。何が何だか、どうなつてゐるのか、全くなんにも分からないんだよね。でもさあ。このシチュエーション、客観的に見てみなよ」

「……………」

「僕が君で、君が京ちゃん。ほら、これって、あの日の朝とそっくりだと思わない？」

「……………」

「……………どう？　あの時の京ちゃんの気分、無料体験サービス」

「……………」

「ああ。念のために言っておくけど、ここには僕と君以外には、莉子しかいないから安心してね。そして莉子は絶対に喋らない。もちろん僕も他言しない。君はそもそもここから出られない。完璧だね。やつと、僕の計画も順調に進んできたよ」

「……………」

「感心するほど黙つてゐるねえ……………どうしたら口を割るんだろ。ま、別に僕には関係ないか。一方的に喋るのって気持ちいいね、鏡崎くん」

「……………」

「京ちゃんはさあ……………君がこういう風に、一方的に喋つてゐる間さあ……………どんなこと思つてたんだろうね」

「……………」

「何も言うことも出来なくってさあ……ただ、ずっと、君のお喋りが終わるまでずーっと黙ってることしか出来なくってさあ……」

「……」

「どんな気持ちだったんだろうね」

「……」

「ねえ。……聞いてんの？」

「……くだらない」

「聞くに堪えない。」

「この人間の喋る雑音は、どうにも聞くに堪えない。」

「……何だって？」

「おつと……つい言葉に出てしまった。ん？ “くだらない” って言っただよ、“くだらない” って。僕が12点リーダを施してる時、ずっと心の中で“くだらない” って言ってたんだけど、あんまりにもくだらなすぎて、これは言葉に出さなくちゃ分らないくだらなさだと思っていたら、言葉に出てしまったよ。僕は自分に正直で、自分に嘘をつけないんだ。くだらない話を聞くと、ついくだらないって言うてしまう。困ったもんだね。君と真逆の悩みを抱えているんだよ、佐上くん」

「くだらない……」

「そう。よく言えました。意味は理解できるかな？ 言っまでもないか、今まで君、ずっとくだらないこと口走ってたんだもんねえ。」

「僕よりも理解してる。むしろ教えてほしいね」

「……くだらない……って……言っただか」

「その通り。くだらないの一言に尽きるよ。何、つまりは敵討ちつてやつなのかな？ 君の愚かな不登校児の知り合いが正鵠を射た言葉を言われて落ち込んでから、逆恨みも甚だしく僕に向かつて果たし状ってか？ くっただらねえ。付き合ってられないよ、僕は忙しいんだ。こんなくだらない茶番に付き合ってる暇はないんだよ。返してくれるとありがたいな」

「——莉子」

ふいに。

冷たい声が部屋に響いた。

それが、佐上くんの声であることに一瞬気づかなかったほどだ。扉から佐上くんが消え、代わりに別の人物……おそらく扉を開けた人物が、部屋に入ってきた。

「彼女は喋らないから、僕が説明するよ。柳川莉子……やながわりこ3年1組の生徒であって、僕の彼女だよ。ね、莉子」

それに対して、柳川さんは、わずかに頷いた。

そこに、個人の意思は感じられない。

「莉子。何も分からない鏡崎くんは、状況を説明してあげてね」
そう言って、佐上くんは扉をゆっくりと閉めていく。

柳川さんは扉を振り返ってわずかに頷くと、機械のようにこちらに向き直った。

きしむ音と共に、扉は閉まっていく。

同時に細くなっていく光。

唐突に、別の光が、またも目に差し込んできた。

その光は、扉の向こうの光ではない。

扉の向こうの光の反射光だ。

光を反射したものは――。

柳川さんが高く振り上げた、鋭く光る出刃包丁だった。

「さて……これから先は、僕の独断で動くわけにはいかないな。京ちゃんに連絡しよう」

扉の向こうに立ち。

僕――佐上惇は、携帯を取り出した。

京ちゃんは、いつも必ず2コール目で出てくれる。

『なんだ』

「京ちゃん？ 僕だよ。ちょっと話したいことがあるんだけど、今

から会えないかな？」

『……学校には行っていないのか？』

「あー……そういう事情については、会って話したいな。どう？」
『構わない』

「じゃ、いつもの場所で」

短い会話を終わると、僕は外へ出た。

老舗・梅崎和菓子店を取り壊した後放置された空き地。

そこが、僕と京ちゃんが秘密裏に接触するための場所だった。

僕が着く頃には、京ちゃんは大抵先に来ている。

「やあ、京ちゃん」

「話は何だ」

「ちょ……いきなり本題？ 時間はあるんでしょ、もうちょっと段取りを踏んで言いたいんだけど」

「早く済ませてくれ」

「京ちゃんのこと……まだ、周りの人にはばれてない？」

京ちゃんのこと。

京ちゃんが、不可抗力で巻き込まれてしまった——事件。

「……ああ」

「そっか。よかった。僕ね、とってもいい方法を考えたんだ」

「方法？」

「そう。京ちゃんのあらぬ罪を晴らすための、とってもいい方法」
考えただけじゃなく、もう半ば実行してるけどね。

「濡れ衣を着せればいいんだよ」

「……濡れ衣を着せる？ 誰にだ」

「それは後のお楽しみ♪ ……ねえ、京ちゃん」

「何だ」

「僕、昨日、京ちゃんがいきなり帰るとは思わなかったから、びっくりしちゃったよ」

「それは……悪かった」

「いや、謝るようなことじゃないんだけどね。うん、謝るようなことじゃないよ。決して、謝るようなことじゃない」

「……」
「あの時さ……京ちゃんに、ひどいこと言っただ人がいたでしょ？」

「……」
「去年、クラスが同じだったから、名前は知ってるよね？ 鏡崎亮介」

「……ああ。でもそれは」

「その時、本当は何も言うつもりなかったんだ。でもこれは本心。」

でも、彼が京ちゃんを、公の前で犯人扱いしたから。

「京ちゃんに、京ちゃんのことなんて何も知らないくせに、あんな酷いことをすけずけと……それが許せなかったから、ついカツとなっちゃって……」

そこで京ちゃんは何かを察したのか、ため息について僕に言った。
「あれは不自然すぎるだろ……勘のいいやつは察しがついたかも知れねえ」

「ごめん……でも……でも許せなかったんだよ。だって京ちゃんは悪くないのに……」

「おい」

「あ………、……ごめん、僕も悪かったよ」

「……いや……」
「でも、これだけは言わせて。京ちゃんは悪くない。何も悪くないんだよ。だってあれは不可抗力だし——」

「そうはいっても……手を下したのは、他でもないこの俺だ。俺に非がないわけがねえ」

「そんなことない！！ 京ちゃんは……京ちゃんは絶対に悪くないんだよ！」

「……佐上……」

「………。京ちゃん」

「……？」

「僕のこと、許してね？」
「は？」

最初にそれだけ前置きしておいた。

それから先は、僕の独壇場。

京ちゃんが僕を見捨てないように、プロテクト。

これも全部、京ちゃんのため。

「さつき、濡れ衣を着せるって話、したでしょ？」

「……ああ」

「その方法を、教えるよ」

「……」

京ちゃんは下を向いてうつむいてしまった。

どうしたんだろう。

今から、自分の罪が晴れる方法を説明するって言うのに。

「実は僕、既に計画を実行してるんだ」

「計画……その、方法のことか」

「うん。京ちゃんの罪を晴らすための、計画。それに、鏡崎亮介……」

……彼が、大きく関与してるんだ」

「……あいつが？」

「うん。これも実はなんだけど、彼は僕のサイドにいるんだ」

「サイド？」

「そ。正確に言えば、僕のテリトリー」

「……待て。それは、つまり……あの場所か？」

「うん。僕の両親が勤める、動物病院だよ」

僕の父親は獣医だ。

母親は、父親が開業した動物病院の婦長として働いている。

そこには、関係者以外立ち入り厳禁の部屋がいくつかある。入るためには、院長……つまり、僕の父親が持っている鍵を使って開けるしか方法がない。

そして、その鍵のうち1つを、僕が持っている。

その部屋は医療に関するさまざまな資料が保管された部屋で、現在にはほとんど立ち入ることがない。

「ちょ……お前、まさか……!!」

勘のいい京ちゃんは、僕がみなまで言うことなく、大抵のことを察したようだった。

その通り。そこに、彼を幽閉した。

「……お前……そんなことして、ただで済むと思ってるのか」
「……済まないだろうね。きっとただでは済まないよ。でも構わない。はなっからただで済ます気はないしね」

「だからっってお前……」

「僕はさ、京ちゃんを侮辱する人間がひたすらに許しがたいだけなんだよ。大丈夫、ただの個人的な怨恨じゃないから。言ってみれば、そうだね……これはある種の取引だよ。京ちゃんの話は、まだ学校側には伝わってないでしょ？ 周りに知られたらいろいろと面倒だし、まだ公になっていないうちに京ちゃんの話はもみ消さなくちゃならなかったんだけど……。ごめんね、僕の手違いで、あまり円滑には進まなくなっちゃった。だから強行に出るよ。さすがに生徒を人質に取られたら学校側だって成す術なしだろうからね。そこまで鬼になれないでしょ」

「人質？ おい、佐上、それは……」

「うん。そういうことだよ。言っただでしょ、ただの個人的な怨恨に突き動かされての行為じゃないんだよこれは。至極合理的な手段なんだ。僕の恨みも晴らせるし、京ちゃんの罪も晴れる。正確には、なすりつける形になるんだろうけど、それはまあ誤差の範囲。僕は京ちゃんの罪を失くすためなら何だってしちゃうからね、これくらいは朝飯前だよ」

「……それを、まとめるとどうなる？」

「鏡崎亮介を人質に取り、学校側の教師の1人に京ちゃんのあらぬ罪をなすりつける。ってまとめると、分かりやすいかな？」

「……そんな……こと……。お前、それ本気で——」

京ちゃんが言いかけた、その時。

破壊音にも近いくしゃみの音が、向こうの低木の陰から聞こえてきた。

誰かいる。そう思ったときには、京ちゃんが動いていた。

「そこにいんのは誰だ！」

しかし、京ちゃんが駆け寄るよりも早く、低木の陰にいた何者かは驚異的な速度で向かいの道路に姿を消していた。

「……、……？」

京ちゃんは首をかしげて戻ってきた。

「誰かがいたのは確かだよな……あの短時間で、道路の曲がり角まで行くことが出来ると思うか？」

「物理的に、無理があると思うけど……空耳かな？」

「あれがか？」

「……………」

そんなはずはない。

あんな空耳が聞こえてしまったら、僕はそろそろ人生の末期に突入してしまっていることになる。僕はまだ育ち盛りだ。多分。だって14歳だし。

「あいつら、多分うちの学校の生徒だな」

「え。それホント？」

「ああ。かすかに、うちの学校の指定カバンが見えた」

それは……まずい。

すぐくまずい事態になる。

もし、逃げた誰かが、この会話を聞いていたら。

そして、その内容を他言したら……。

「…顔までは、分からないんだよね」

「反対方向に逃げたわけだからな」

「早めに、口封じをしておいた方がいいね……」

新たな策を練る必要がある。

「……………佐上」

京ちゃんが静かに言った。

何かを悟るような、また、何かを諭^{さと}すような口調で言った。

「お前は、もうこれ以上動くな」

「え？ 動くなって……どういうこと？」

「そのままだ。これ以上動いたら、お前も警察沙汰になる。…あいつを攫^{さら}った時点でもうアウトだが、さらに罪を重ねるとなると、とりかえしがつかなくなる。そもそも、あいつの家族やなんかにはばれていないのか？」

「その点は大丈夫。彼の携帯から親御さんにメールを送っておいたから。しばらくの間、家に戻らなくても納得がいくような内容をね」
親友の家にしばらく泊まる。送ったメールにはそう記した。

怪しまれてもおかしくないようなレッドゾーンギリギリの口実だったけれど、彼の親御さんはわりと放任主義のようで、搜索するようなそぶりは見られない。

「僕の側は心配いらないよ。京ちゃんの罪を晴らすためなら、どんなことだってしてみせるから」

「……お前は……どうして、そこまでする」

「ん？」

「赤の他人の俺に……自分とは何の関わりもない、なんのメリットもないのに、どうしてそこまでして俺の罪を晴らそうと……」

「関わりはあるよ」

ニツと笑って、僕は京ちゃんに振り向いた。

よくぞ聞いてくれました。

「僕と京ちゃんは、友達……だからね。友達を助けたいと思うのは、当たり前じゃない？」

「…佐上……」

「死なばもろとも——だよ」

最後にもう一度笑いかけると、僕は京ちゃんに背を向けて、動物病院へ歩いていった。

向こうの様子が気になる。

思考タイム。

何なんだこれ。

一体どういう状況なんだ。

どうして。

どうしてクラスメイトの柳川さんがここにいる？

どうして佐上くんに従う？

どうして……僕に出刃包丁を向けている？

分からないを通り越して、もはや理解不能だ。

こんな事態は、僕の常識の範疇外。理解できうるはずもない。

常識。日常。

……かけ離れている。

どうしようもないくらいの差異が、そこには生じてしまっている。

「……………ストップ」

ゆらゆらと、不規則なようできて規則的に僕に迫ってくる柳川さんを、片手で制す。

「…待ってくれ。落ち着こう。まずその物騒な刃物を床に置いて、深呼吸しよう。とにかく落ち着け。落ち着けば人は冷静になれる」

「……………」

「いや、あの、マジで、冗談抜きで恐ろしいので、第一にその挙動不審な動作をやめよう。出刃包丁は肉や魚をさばくために用いられる調理器具であって人様に向けるような代物ではないんだよ」

「……………」

「うわ、喋らない相手がここまで恐怖をにじませるものだとは思わなかったよ。一言でいいから何か喋ってくれとありがたいんだけど。それか、僕みたいになんか点リーダーの背景に心の中で何か呟いているとかそういうのでも構わないから何か意思表示をしてくれ。頼むから」

「……………」

無駄だな……。

直感でそう思った。

彼女に言葉は通じない。

ならばどうするか？

……どうしようもないじゃないか！ 言葉が通じない相手にどうやってコンタクトをとるといふんだ！ どう考えても不可能じゃないか！

しかし、世の中にはムツゴロウさんという人物が存在する。言葉の通じない動物と対等に接し、意思の疎通を滞りなくやってのける、そんな正しく創造神のような人物がいるのだ。

だったら不可能とは言い切れないのではないか？

「……………」

黙ってみた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

相手も黙った。

これでは単純に会話がなくなってしまうだけだ。

「……………」

そうこうしている間に、柳川さんは僕の眼前にまで迫っていた。光の届かない室内に、出刃包丁が鈍く輝く。

とてもくだらない時間を過ごした気分になった。

仕方がない。

僕はここで、柳川さんによって殺される運命にあったらしい。非日常。

こんな死に方は、非日常以外の何者でもない。

死ぬ、か……。

早いものだ。僕はまだこの世界を14年余りしか生きていないというのに。

なんて無様。

なんて道化。

なんて滑稽だ。

不思議と、死ぬことに恐怖は感じない。むっさい中年男に殺されるとなるとまた別の意味での恐怖が生まれるかもしれないが、相手はクラスメイト。無言の彼女は、僕を殺すその瞬間も、きつと終始無言だろう。

脈絡もなく、なぜか去年の秋にイトコから貸してもらった漫画を思い出した。

確か……“怨み屋本舗”という漫画だった。内容はよく憶えていないけれど、柳川さんはあの漫画の主人公に性格が似ているかもしれない。

明確な意味ではないけれど、きつともっと別の、本質的な部分で、彼女は酷似している。

「……………」

……………あれ？

閉じていた眼をうつすらと開けてみる。

柳川さんは、僕を見下ろして、出刃包丁の切っ先を僕の鼻先に向けていた。

「……………」

……………」

殺すつもりは……ない？

あれ、あの雰囲気でいくと、100%お陀仏パターンだと思っていたのだけれど。

とりあえず、今この瞬間に短い生涯を終えることはなさそうだと。

唐突に、彼女は出刃包丁を下ろし、適当な方向に放り投げた。

カランカラン、と金属質な音が遠くで響く。

「あー……ったく、マジたるいわー……」

酷く気だるげな口調で、柳川さんはそう言うのと、後ろ髪をかきあげた。

……あの。

柳川さん、ですよ？

「えーっと？ アンタ、名前なんてーの？」

「え、あ……鏡、崎です」

なぜか敬語になってしまった。

「ふうん。ああ、名乗るのはあたしが先か。あたしの名は柳川^{やながわり}莉恵^{えか}。莉恵と一緒にしないでよね。あたしはあの子とは違うんだから」

別人。

の、ようだった。

にわかには信じがたいが、これは二重人格ということになるのか？
もう1つの人格が、この莉恵夏という人物。

「分かった？ 鏡」

名字が分断されていた。

間に句読点を入れたのがまずかったらしい。

「あ。あたしのことは、佐上とかいうやつには黙っといてねー。御内密にしてるのよ、ばれたらいろいろと面倒だし。あいつの前では、莉恵を出してる。アンタも上手く演技すんのよ」

「あ。はい」

「莉恵と一緒にのクラスってことは……中学生か。いいねえ、若くて……。あたしはもう高校3年生だから、莉恵がうらやましくてしょうがないわよ」

「あの」

「ん？」

「あなたと柳川さんは、……二重人格、という認識でよろしいですか？」

「よろしくないわね。全くもってよろしくないわよ。二重人格？

そんな俗語で片付けないでちょうだい。あたしは莉子の姉よ。去年の冬に、アイハラに殺された、莉子の姉。それがあたし」

…姉、か。

ということとは、えっと……。

二重人格じゃ、ないのか。

「莉子の中に、あたしの人格が紛れ込んだじゃったって感じねー。ま、強制的に引き剥がすとなると莉子の側がヤバイっばいし。乗っ取ったりはしないわよ。あたしだって自分の妹はかわいいもの」

「……じゃあ、何で柳……、…莉子さんを、助けようとしないうんですか？」

「あーん？ 助ける？」

「今、莉子さんは、佐上くんによって犯罪に手を染めてしまってるんですよ？ 姉ならばどうにかするべきじゃないんですか？」

「………どうにか、つつてもねえ………」

とたんに、莉恵夏さんはうつむいてしまった。

「今の莉子には、“意思”がないんだものね………」

「“意思”………ですか」

「あの子、あたしが死んだのがよっぽどショックだったみたいでさ。それ以降、ゼーんぜん喋らなくなっちゃったのよ。アンタも、莉子が喋ってるの見たことないでしょ」

そういえば……。

彼女はクラスの中でも、佐上くん以上に目立たない人物で、誰かと話しているのを聞いたことがなかった。

それには、こんな理由があったのか。

「“意思”がないのに自己主張なんて出来るわけがないじゃない。佐上つーのの前にあたしが出たら厄介なことになるし……だから、どうしようもないのよ」

「はあ………」

「今だって、気まぐれに出てきちゃっただけなのよ？ あたしから

は出てこれないから、きつと莉子の方からあたしを呼んだのね」
なんだかごちゃごちゃしてきた。

じゃあ、佐上くんが言っていた、柳川さんが自分の彼女だって言うのも、……本人は認めてないってわけか。

あれ、でも、あの時たしかに頷いていたような。

うーん、分らない……。

「あの、じゃあ莉恵夏さ——」

「シッ！」

片手で僕の言葉を制した時には、莉恵夏さんは柳川さんに戻っていた。

例の、きしむ様な物音がして、一筋の光が幅を増しながら部屋の中に差し込んでくる。

入って来たのは佐上くん。

莉恵夏さんはそれを素早く察知して、柳川さんに戻ったようだ。

佐上くんは部屋を見渡し、柳川さんを見つけると彼女のそばに立った。

柳川さんは、さっきまでの態度が嘘のように無言。

「……………莉子に何をした」

佐上くんは低い声で僕に訴えた。

……………ん？

何をした？ 今、そう言ったのか？

「包丁を奪い取って莉子に斬りかかったのか！！」

な……………話が分からない。

どこからそんな根も葉も茎も花弁もない突拍子のない話題になったんだ？

「あ……………」

そうだ、ついさっき、莉恵夏さんが包丁をわきに放ったのを忘れていた。

柳川さんの手元には、出刃包丁はない。

……………って、それだけでそんな被害妄想さながらの勘違いをするか

普通？

「可哀想に……こんなに血が出てるじゃないか。待ってて、今救急箱持ってくるから」

言うだけ言っつて、佐上くんは部屋から出て行ってしまった。

血が出てるって……。

莉恵夏さん、どうやら出刃包丁を投げる時に手を切ったらしい。

らしくもないミスだ。

ていうか、ドジだ。

そこら辺は上手くキメてほしかった。

「……困ったな……。このシチュエーションは、あまりにも旗色が悪い」

思考タイムとか言ってる場合じゃなくなってきた。まだ考える内容はたくさんあるのに。

そもそも、第一の疑問として、なぜ僕がここににいるのか。

佐上くんはどうして僕をここへ連れて来たのか。

先刻の話からすると、僕はどうやらここから出られないらしい。

それはなぜ？

分からないことだらけだ。

分からないことは。

不安に——…なる。

うつわ長え

まさかここまで長くなるとは思いませんでした。前回の3倍近く
のボリュームやん。どうするこれ。どうするよ。

さらに、一気にabnormalになってしまった展開。

いやあ、莉子が出刃包丁持った時は、さすがに“残酷な描写あり”
にチェック入れる覚悟しましたよ。そこまで残酷にはならないだ
ろうけど。現に亮介無事だったし。

てか、淳のキャラがだんだん変態方向へ向かっていく……キモい
……書いててキモい……作者目線から見てもキモい……それに比べ
て京平はなんて清らかなんでしょう。実はピュアってタイプですよ
ねこの子。何で犯罪なんか犯しちゃったんだろ。残念でなりません。
そして謝罪。

語り手が変わるだけではなく、語り手が“コロコロ”変わる話に
なってしまいましたごめんなさい。もうやりません。誓います。

寛人も言ってたけど、みつくと亮介って結局のところかなり似
てるんですね。かた苦しい感じにならないように、亮介サイドで
は『うだが』とか使わないように気をつけたくらいで（といっても、
文章のリズムを乱さないためにやむを得ないこともありましたが）
、それ以外はほとんどみつくと一緒にあったことに驚きを感じる今
日この頃。

えー、次回ですが、さすがにみつくんサイドに戻ります。楽しか
ったけど。語り手チェンジ楽しかったけど。涙のお別れ。

結論から言うと、思った通りだった。

昨日、出席をとっている御影さんに聞いたところ、今日も来ていないと答えた。

それもそのはずだ。

あいつは現在、操先生と同様の“行方不明”というポジションにいるのだから。

かくして、翌日4月14日、休日。

僕は自分がどうすべきかを考えていた。

日常。それは僕が最も毛嫌いするものではなかったか？ 日常からの脱出を、ずっと願っていたはずではなかったか？

今、まさに僕は“非日常”を目の当たりにしている状況下にある。先日まで普段通りに学校へ来ていた人物が、ある日突然行方不明に。現在も行方の特定は出来ておらず、搜索活動が続けられている。先日まで普段通りに学校へ来ていた人物が、ある日突然来なくなつた。彼は前日にクラスメイトといざこざを起こしており、同時にいざこざを起こした相手も欠席した。それ以降、両者共に登校してこない。一方は連絡が取れず、もう一方はいるはずのない場所で、いざこざの関係者と接触していた。そして会話の内容がまた関わり深い。

こんなことは、日常には起こらない。

非日常を肌で体験している、この奇妙な高揚感。

どうしたもんかね……。

何をすればいいのかが分からなくなつた時なんてのは、大抵の場合“何もしない”という選択肢がベストだったりするものだ。するべきことが分からない、ならば何もしなければいい。選ばないを選択する。考え様によつては、これほど簡単な選択肢は存在しないだ

ろう。何かを選ぶ以上、その選択肢の中には必ず“選ばない”というのがついてくるはずだ。選びたくないなら選ばなければいい。それだって立派な取捨選択だ。選ばないことは逃亡ではない、1つの手段として考えてしまっても一向に差し支えはないのだという話だ。しかし今回ばかりはそうはいかない。“何もしない”を選んだ場合、どうなるかが漠然とはいえ想像できることが要因だ。鏡崎は行方不明。そのことは学校関係者も、まして家族すらも知らない事実。そんな行方不明者を放置したらどうなる？ 状況はプラス方向には向かないだろう、そんなことは考えるまでもなく火を見るより明らかだ。このように、選択するまでもなく、“何もしなければ状況は悪化していく一方”という場合は、道徳的に考えて“選ばない”を選択することは出来ない。選ばないことは、冷たく言い換えてしまえば“問題を放置あるいは放棄する”という意味なのだ。僕が抱えている問題はこのタイプ。僕は“選ばない”を選択するほどの薄情さは持ち合わせていない。

かといって、なら何か選択するべきであることは明白なのだけれど、それはそれで無理難題だ。選択肢が分からない。まるで目隠しをして神経衰弱をするような、真実ただの当てずっぽうに頼るしかない、そういうことを言っている。無限にある可能性。有限なる選択肢。“選ばない”は選べない。一体どうすればいいのか。分からないなら選ばなければいい、しかしそれは選んではならない禁断の一手。だが選ぶにしても選択肢が分からない、故に選ぶことは不可能だ。八方塞がり、四面楚歌、そんな言葉が頭の中をぐるぐると回る。どうすればいい。どうすることもできないなんて、最悪じゃないか。

こんな時、僕はどうしていたっけ。考えても考えても考えても考えても、思考しても思考しても思考しても思考しても、悩んでも悩んでも悩んでも悩んでも、どうにもこうにもにっちもさっちも解決案が思い浮かばなかった時は、僕はどうしていたのだろう。

「みーくん。朝から朝食も食べずに、何1人でボーっとしてんの。」

珍しいね、みつくんが何もせずにいるなんて」

と、僕は我に返った。組んだ腕を僕の頭上に乗せた姉がいつの間にかやってきていた。

また勝手に人の部屋に、といつもなら注意するところであつたが、今の僕にはそんな気力もなく、されるがままに感情を抹消した表情で黙っていた。

「何？ 悩みでもあるのみつくん？ その表情は、もしや恋のお悩みかな？ そういう時期に突入しましたかみつくん？」

この人間はまた『お母さん、大変！！ みつくんが発情期に陥っちゃたよ！！ 病院に行つて診てもらわなきゃ！！』なんてぬかしたりするのだろうか、とぼんやり考えていたが、そんなことはなかった。それよりも僕は、無表情を貫いていたはずなのになぜ表情から僕の心情が読み取れたのかが不思議だつた。いや、この場合、僕が抱えている悩みは別に色恋沙汰ではないのだから、姉の推測は外れているということになるけれど。

ていうかそれこそ当てずっぽうだ。

「悩みがあるなら言つてねー？ お母さんも言つてたじゃん、私たち家族なんだからさ。もつと頼りにしてくれてもいいんだからね？」
「……………」

迂闊ながら、わずかに感動してしまった。

感動は人間のかた苦しい部分を揺るがす。

なので、僕は言うつもりもないことをつい口走ってしまった。

「悩みは、…あるんだけどね。それなりに」

言つた後激しい後悔に見舞われたのは言うまでもない。

こんな言い方じゃ、“構ってくれ”と言っているようなものだ。
「なーんだ、やっぱりあるんだあ。うんうん。分かるよ、みつくん
だつて男の子だもんね。悩みの1つや2つや3つ、あつても全然おかしくないよ。多感なお年頃だもんねえ、中学3年生か。懐かしいな、2年前の今頃は私もみつくんみたいにいるーんな悩みを抱えてたもんだよ。どんなに小さなことでもいちいち気に障つて、すこー

く情緒不安定だった時期っていうのかな？ 経験しているだけに共感できるね。そういう意味では私はみつくんの家族であり姉であり先輩なのである、なんちゃって。で、悩みというのは？」

前振りが大分長かったことには目を瞑り、引っ込みがつかなくなった僕は半ば自暴自棄になりながら今の悩みを打ち明けた。

僕が話している間、姉は少なくとも表面上は親身になって聞いてくれていた、と思う。

やっぱり家族か。

僕が言わずとしていることを、何とはなしに感じているようだった。

「ふうん。そんなことが……そりゃ、情操教育上よろしくないね」

「非日常では……ある。今まで、こういうことは経験したことないし」

「これから受験もあるって言うのにねー。みつくん、今回の事件のトラウマで受験に影響するようなことがあったら、学校に抗議しちゃってもいいと思うよ。そりゃもうガツンと、どう責任とってくれるんですか、って」

「ごめん姉さん。僕は受験するつもりはないよ。このまま校内の進級テスト受けて、高等部上がるつもり」

「えー。そうなのー？ みつくんも星鈴高校来なよー。いいところだよあそこ。それに飽きないし。こないだなんか、杉がクツキーに宣戦布告して、クラス対抗の学年レクリエーションすることになったちゃってさ、私たち完全に被害者なんですけどみたいな。結局、杉は負けちゃうし。リベンジするとか言ってるけど、さすがに次からは個人でやってほしいもんだよ」

僕が学区によって松嶺大付属中に入學したように、姉も中学生時代を松嶺大付属中で過ごした。それから、わけあって高校受験をしなければ郊外の星鈴高校というところに進学した。理由は聞かされていない。そのまま進めば受験をすることなく高等部に上がれるというのに、わざわざ受験してまで行こうとした高校である以上、それ

には確固たる事情があるのだろうが、姉も母も僕に語ろうとしなかった。それは僕の父も同様で、姉が星鈴高校に受かった日は、父と晩酌を交わした。無論、僕はジンジャーエールで済ませたわけだけれど。

「話がそれだね。で、何だっけ、その……鏡崎くん？　って人が行方不明で、そのことを知ってしまったみつくんは、自分は何かすべきなのではないかと根拠のない使命感に見舞われて苦悶しているってわけ？」

「その言い方だと僕がヒーロー気取りしてるみたいで誤解を生むから撤回してほしいんだけど、まあ全容はそんな感じだと思ってくれば概ね間違いはないよ」

「何かすべきなのではないか、か……。なんかその言い回しって、酷く客観的というか、主観的ではないよね。あれだよ、政治家同士の極秘の会談とか、悪気なしに覗いちゃった感じ。漫画的に表すと『どうしよう、どうにかしなきゃ。でも、僕に何ができるんだろう……』みたいな。でもだからってさ、みつくん1人がどうしたところで、それはどうにもならないんだよ。政治家だよ？　世間的には一介の中学生でしかないみつくんが、政治家相手にはむかえる？

はむかったところで、それを具体的な形にして影響を及ぼすことなんて、出来るわけじゃないじゃん。そういうことなんだよ、みつくん。危ない場面を覗いちゃったからって、それがイコール、みつくん1人の責任になることはないんだよ。見てしまった以上、自分で何とかしなければなんて、そんな罪悪感、背負うことないんだって。悪気はないんですよ？　偶然知っちゃっただけなんですよ？　ならそこにみつくんの意思はないじゃん。不可抗力だよ。だからみつくんはそんなことで悩む必要なんかないの。どうしてもそれを自分で解決“したい”って、“したい”だよ？　自分の意思でそれを望むなら、自分より行動力を持った人間、頼りに出来る仲間に相談するべきなんじゃないのかな。えーっと、つまりね。みつくんが、その、行方不明の鏡崎くんを捜し出したいと言うのなら、まず信頼でき

る仲間にそのことを話すべきなんじゃないかなってこと」

……………。

おお。

姉が真面目なことを話すのを、僕は始めて聞いた気がする。さすが、まがりなりにも僕の家族であり姉であり先輩だ。人生経験が違う。キャリアが違うのだ。

「分かったよ。よく分かった」

僕は本心をそのまま言葉にした。

「姉さんの意見は、参考にさせてもらおう」

「ちよ、そこ参考なの？ 採用しようよ。私、けっこう深いこと言っただけだな」

「うん。それは僕も思った。普段の姉さんからは欠片も感じないくらい、筋の通ったすばらしい意見だったよ。正直、ここまで求めてなかった」

そもそも、相談したことすら、手違いのようなものだったのに。言ってみるものだ。

「ありがとう、姉さん。姉さんに相談して、よかったよ」

「ん。それが聞ければ、私としては合格ライン」

姉は僕の頭上から腕を離して、わきに立った。

「ふっふっふ。私だって一応、みっくんの姉15年やってきたんだからね。それを忘れてもらっちゃ困るよ」

「……すごいな、姉さんは」

「ん？ それ以上ほめても、何も出ないよ」

「姉さんは、しっかりしてるんだね。妥協せずに、全てを自分の力で解決できる行動力を持つてる。だから姉さんは、自分で選んだ道を、臆おくすることなく突き進むことが出来るんだ」

これも本音。

今まではそんな認識なかったけれど、今の話を聞いて、僕は心底、姉を尊敬したくなった。

その行動力は、これからの人生、きっと重宝されることだろう。

「なーに言ってるの今更。自分のことくらい自分でコントロールできずに、これからの人生どうやってやりくりしてくってのよ。言っとくけど、世の中はそんなに甘くないんだよ？　ワガママが許されるのは未成年のうちだけなんだから」

「僕のワガママが許されるのも、残すところ5年を切ったわけか…」

「カッコいいようにいて、餓鬼っぽいよそれ」

姉さんはクスクスと笑うと、「じゃあね。上手くやんなよ」と言っ
て部屋から出て行った。

全く……。

これほど、姉の存在に感謝したことはない。自分のことを何より分かってくれる姉の意見。身近な様でいて気づかない、自分のことを包み隠さず客観視してくれる存在。

彼女の意見も聞かずに、僕は一匹狼を気取って、何を1人で悩んでいたんだろう。3人寄れば文殊の知恵というではないか。それは2人であつたところで大した違いはない。本質は同じだ。

さて。

やることは——決まった。

後は、それを行動に移すのみ。

僕は携帯を取り出した。

今回は、主にみつくんの心情の変化っていうのを軸に書きました。前回はちよつとabnormal過ぎただけに、今回は現実感をコンセプトにしてみました。どうでしょう、なかなか難しい表現がいろいろ出てきた気がします。これはアルマジロが思っていることを、ほぼそのまんまみつくんに言わせてるようなものです。

さて、今回の裏テーマ、“みつちゃんこと出美淳、本編初登場の瞬間”。まあ一応、- commonplace opening - で登場はしてたんですね。このままだと、springではとうとう出る幕がなくなっちゃうような気がしたんで。それでもって主人公の姉という、かなり重要なポジションにいるみつちゃん、初端からけつこう重要な役割を担ってもらいました。これによってみつちゃんの、どこか抜けてるようなイメージを変えられたら嬉しいです。キメる時はキメる娘なのよ。

「……………なるほどなるほど、そういう事情があつて俺を呼んだわけね。ふむふむ……………ん、納得」

PSPをスリープモードにし、大原夏輝は僕に向かって笑いかけた。

「そういうことならお安い御用だ。着いていつてやろうじゃねえか。俺とみっくんの仲だもんな」

「思いつきりPSPやってただろ。聞いてたのか人の話」

「もっちゃん」

と言いつつも、大原はPSPのスリープモードを早くも解除してまたプレイし始める。

いや、聞いてないだろ。

こやつに同行を頼むのは間違いだったか……………。

「にしても、みっくんとこの姉ちゃんって、なかなか味のあること言うんだな。俺ちよつと惚れちゃったかも」

「深みにはまらないうちに忠告しておく、姉さんだけはやめた方がいい」

「ひつでえな……………ひいき目に見るとか、そういう感性はないわけ？」

「姉さんを語るのにひいきなんて必要ないよ。あの人はあれがベストの状態だからね」

「そういうことにしとくか」

会話をしながら、手元では別の動作をやつてのける大原。

よくよく考えてみると、それって実はけっこう難しかったりする。よく聞く“右手で三角、左手で四角を描く”という動作と同じくらい難しい。僕にはできなかった。他に、“右手でドアをノック、左手でドアをさする”というのがあったが、そちらは何とかできなくもなかった。長続きはしなかったけれど。

さて、なぜ僕と大原が共に時間を過ごしているかという説明をし

ようとすると、どうしても少々時を遡^{さかのぼ}らなければならない。

それと同時に、無論あの会話も、それに含めなければならないだろう。思い返すとまだ身震いするが、まさかあんなタイミングで彼女が言及しなければ、僕は大原を連れてくることはなかっただろうから。

時は少々遡^{さかのぼ}つて、4月15日、休日。

昨日の朝に姉から言われたことを軸に、僕はある計画を立てた。

それには、僕の他にあと2人、協力者が必要だった。1人は高田に任せるとして……もう1人は、どうしよう？

なんてことを考えながら、軽く気分転換をするために梅崎図書館へやってきたのが今日の午前11時。

なんたる偶然。

意外な人物と鉢合わせした。

「……………おはよつす」

「こんにちは」

投げかけられた挨拶に事務的に応え、自分の指定席へと戻ってしまつた彼女は、名を茉莉沢由真^{まりさわゆま}という。

この人物の説明は……なんていうか、ひたすらに冷たい性格だ。冷酷とか薄情とか、そういう意味ではなく、もつと単純な意味で、彼女ほど冷たい生徒は松嶺大付属中には存在しない。他人とあまり関わることをしないために他人からもあまり関わりをもたれず、自分から積極的に動こうとしないために他人からも積極的に動かれな^い、と言え^ば、なんとなくの漠然としたイメージは浮かんできると思う。言うまでもなく、僕も茉莉沢については未だにノーデータ。名前以外のパーソナルデータをほとんど把握していない。

まあ、他人と関わりたがらないとはいっても、うちのクラスには万物平等のフェミニストが少なくないため、それなりには人間関係を^持っているようだ。うちのクラスでは……三須なんかとは、比較的喋^{はな}っている姿を目撃する。

「思ってもみないサプライズだ、こりゃ……」

今更ながら彼女がいた場所を見てみると、そこはホラー系統の本が並んでいた。

山田悠介とか、読んでたりするのかな。僕らの年代だと、ホラーと言えば山田悠介なのだけれど、なんだか茉莉沢は他人とはいろいろと違いそうな気もする。

ともあれ、予想外の茉莉沢との遭遇に、すっかり面食らってしまった。僕はクールダウンのために図書館へ来たはずなのに、逆にヒートアップしてどうする。図書館は興奮する場所ではない。静寂を保ってこそその梅崎図書館でございます。気を取り直して、僕も自分の席を確保して本棚へ飛び込んだ。

お目当ての本はモダンな現代小説。何気ない日常の1コマを文字にしてまとめました、みたいな、そういう平和なストーリー。中高生というのは現代小説にも多く扱われる年代層であり、未成年だけでも子供じゃない、そんな概念を持たせてくれる。僕は主人公と自分を重ね合わせ、本の中で展開されていく物語に入り込むのが好きだった。昔ほど本を読んではいけないけれど、やっぱり読書は僕にとって欠かすことの出来ないものらしい。本の虫、とはよく言うけれど、小学生時代の僕は、まさにそれだった。本と言う本を見境なく読み漁り、視力低下を危惧した時もあった……。あの頃は、自分のやりたいことをやりたいがままにやることが出来た。今はそういうわけにはいかない。社会という名の檻の中に住まわされた僕たち。小さい頃は鉄格子の隙間から出入りができていたのに、成長してからは出られなくなってしまった、巨大な檻。成長。成長……。そう考えると、成長っていうのもあんまりいい点ばかりってわけでもないな。

好き放題できるのは今のうち。大人になったら、自分の希望なんて二の次になってしまうだろう。悲しい世の中だ。そしてその悲しい世の中によって今が構成されているのも事実なのだ。僕の近所に住む朽輔さんは、そう言って苦笑いしていた。あの人はまだ高校

2年生なのに、姉に負けなくらい深いことをたまに呟く。僕の周りは詩人が多いんだな。いや、どちらかという思想家に近い、のか？

「いよつす、みつくん」

僕が本棚を前に背表紙を睨みつけていると、場にそぐわない楽天的な声が横から聞こえた。

「……………」

「元気してるみたいだな。図書館で会うなんて、何、俺たち、運命の赤い糸で結ばれてたりしちゃったりする系？」

「……………」

「おいおいおい、シカトはくない？ あ、あれですか、図書館ではお静かになってやつですか。残念、俺は図書館で静かに本を読むような神経は持ち合わせていないんだな」

「……………」

「——なあ。俺そろそろ限界。みつくんは声を聞けば誰だか分かるって、高田ってのが言ってたんだけどな。ガセ？ 俺まさかのガセ吹き込まれちゃった感じ？」

「分かってるよ、うるさいな。君の名前は大原夏輝、3年1組11番。これで文句ないか？」

「なっ…………。うあ…………ショックだ…………なんだそのやつつけ感…………俺、出オチ設定だったのか…………はあ…………落ち込みMAX…………」

そんなわけで、本日2人目のクラスメイト、大原夏輝の登場である。

ていうか待て。図書館で静かに本を読むような神経は持ち合わせていないって、お前、それ、図書館における当然のマナーじゃないか。神経からタブー喰らうなんて、もはやご愁傷様としかかける言葉が見つからない。実は今この瞬間も、大原にとってには苦痛なのかもしれない。いや、僕が気に病むことでもないか、あっちが勝手にやって来て勝手に話しかけただけのことだ。そこに僕の意味はない。おお、使えるな、このフレーズ。

つくづく姉には下げた頭が上がない。

と、向こうのテーブルでガタンと大きな物音がした。

小さな子供が椅子でも倒したのだろうかと覗いてみると、先ほど遭遇した茉莉沢が立ち上がっていて、その反動で彼女が座っていた椅子が後ろに倒れたらしい。こちらに向けたその顔は、氷のように冷たく、また、怒りで燃えているようにも見えた。

嫌な予感。

すごく嫌な予感。

「ちょ、お、大原」

「あーあ……どうせ俺は出オチですよ……セカンドシーズンには登場人物から名前消えてるよ……いいさ……俺の目的は別にあるし……この町にいるって聞いたのに、悠木瞳……あいつ騙しやがったな……」

まだブツブツ言ってるのかよ。

いい加減立ち直ることを知れ。

「ねえ」

突然声をかけられて振り向くと、そこには茉莉沢が立っていた。

ん？

あれ、何でそんなご立腹なんでしょうか。顔が怒ってるんですけど。怒りオーラが半端ないんですけど。

「あなた……大原、だっけ？」

用があるのは大原らしい。

僕はそそくさと舞台裏へ逃げる。出来るだけ茉莉沢の正面にはいたくない。

「あなた一体何者？ 私あの日からずっと思ってたんだけど、あなた一体何者なの？ 怪しい。すごく怪しい。このタイミングで転校とかすっごく怪しい。何かあったとしか思えない。むしろ何かあったと周囲に言いふらしているようにしか思えない。怪しい。私にとってあなたはすごく怪しい。そろそろ正体を明かしてくれない？

正直言うと、私はあなたを怪しんでる。操先生の失踪と絶対に何か

浅からぬ縁があると確信してる。あなたは怪しすぎる。今のうちに化けの皮を剥いてももらわないと後になって困る」

……凍りついた。

緊急事態発生。

大原夏輝が凍りつきました。

誰か解氷剤持って来い！！

って、雪だるま状態にはなっていないのか……。

「……………えっと、……………怪しいものではありません、っていう言い訳は通じる？」

「ナッシング。それはイコール、私は怪しいですと自白したようなもの」

「俺は怪しくないって。普通も普通、普通すぎて参っちゃうほどに平々凡々通常通りなんだけど」

「そんなはずはない」

面食らう大原に、相変わらず冷たい表情で、抑揚なく淡々と言葉を羅列させる茉莉沢。

「私が疑った人間が平々凡々なはずはない」

「……………」

根拠なくねえか？

「……………ヘルプミー、みつくん」

「アームソーリー、バットアイキャント」

「……………ファック」

酷い一言を言われた。

落ち込みMAX。

「あなたをマークさせてもらう。操先生がいない間、私はとても不満がたまってる」

「へ？ ……そうなんすか」

「あの非常勤講師は見るたびに虫唾が走る。死んでしまえば世のため人のため私のため」

残忍すぎる。

御影さんに心から合掌。

そんなに悪い人じゃないのに……。

「さようなら」

言うだけ言くと茉莉沢は立ち去っていく。

意味が分からない。

こんなキヤラだったのか、茉莉沢って……。

三須のようなフェミニストに、私はなりたい。

「……」

「あ、そうだ大原」

彼女が言った言葉で思い出した。僕の目的のひとつに、スカウトというのがあったじゃないか。

大原なんてどうだろう。こやつなら高田とも難なくやっていけそうだし、これを機にクラスに馴染めたらいいなとか思っちゃったりして、うわ、僕ってなんていいやつなんだろ。マジ最高。

そういうわけで現在に至る。

「で、みつくんは何をしたいわけ？ それだけはまだ具体的に聞いてなかったよな」

「ああ、それはね」

もったいぶったつもりはなかったけれど、若干間を空けて、僕は宣言した。

「今から大原に、国家権力を動かしてほしいんだ」

今回、空白・改行を除くと、ピッタリ4200文字だったりします。短いです。いつもは5000〜6000文字くらいなんですけど。

やっと由真を登場させられた……由真の登場シーンは絶対図書館しかないと思っていたので、達成感に満ち溢れてます。実は隠れお気に入りキャラ。あの性格も、きつと由真の“顔”の1つなんだろうな。

本当はもつと長くなる予定だったんですけど……これ以上長くなると止まらなくなっちゃうかもしれないと思い至り、早々と区切りました。これから夏輝がどんな方法で国家権力を動かしていくのか、私もとても楽しみです(↑考えてねえのかよ)(はい。すみません)。

最後に。次の更新は、多分土日くらいかも。まあ、この物語、見てくれている人なんてきつと全然いないと思いますんで、こっちも自由に変更させてもらうんですけど。仕事じゃないんで。趣味なんで。

苦しい思いなんてのは、何にしたって縁遠い存在であってほしいものだ。

僕は人死にに慣れているわけでは決してない。まさかこんなことになるなんて思ってもいなかったただけあって、シヨックもさながらに放心状態を突きぬけ絶望を超越した、完全なる“虚無”を体感したのは、つい数ヶ月前のことだ。あの時に僕は、大事な……大事な、何よりも大切な友達を失った。

あの人物のことは、どうあっても簡単に許せるもんじゃない。許すつもりなんてさらさらない、3代先まで呪ってやる。殺せるもんなら殺してやりたい。いつそ不死身になってくれれば、気が済むまで惨殺できるのに。そう思ったことだって1回や2回ではない。1桁や2桁ではない。

心の中の、自分の一番凶悪な部分が、表面上を突き破って出てきた感覚。

殺してやる。

次に会ったら、絶対に殺してやる。

……なんてことを思ったところで、僕に殺人なんてできない。いや、殺すこと自体は簡単だ。背後からナイフで一突き。これで人間は生命活動を終える。これだけで、たったこれだけの労力で、人を殺すことができる。

あいつが死ぬ時は、僕が人殺しになった時だ。

あいつが殺されるのは、僕が殺した時だ。

ずっと、そう心に決めてきた。

——だからって、死んでしまった友達のことを、忘れてしまったわけでは、もちろんない。

死。

友達の死。

身近な人物の、死。

死体。

友達の死体。

身近な人物の、死体。

もう二度と、友達の死体なんて、見ることはないだろう。

そう、思っていたのに……。

その日は、唐突に訪れた。

4月19日。

大原に事情を話してから4日がたち、同時に、珍しく一人で登校してきた日。

高田が泣いていた日。

机。

僕の机。

僕の机の隣には、高田の机がある。

高田は、僕の隣の机の上に突っ伏していた。

顔を隠すようにして。

細かく震えて。

何かに耐えているかのように。

何かに耐え切れないかのように。

突っ伏していた。

その日、僕はいつも通り、登校してきた。

つまり、午前8時2分に教室の引き戸を開けたわけだ。

この時間帯、クラスメイトはちらほら程度しか集まっていない。

数えると、5人。朝が早い朝井を除くと、残り4人は8時10分頃に登校してくる類の生徒で、気まぐれか何かで早く着いてしまったのだらう、手持ち無沙汰な様子が伺える。

「おはよう、みつくん」

「相変わらず早い朝井は。もはや速いな」

「活字でしかニュアンスの違いが分からないよ。でもearlyとfastの違いだと解釈すると、そうだね、確かに私は早いかも」

「僕はいつもこのくらいの時間がちょうどいいんだ。ラッシュ時に登校しようとする、無駄な体力を浪費するからね」

「いい心がけだね。あれ、今日は高田くんはいないの？」

「別に、いつも一緒に登校してるわけじゃないしな。この時間に来てないってのは珍しいけど、あいつのことだからどうせ寝坊でもしたんじゃないかな？」

「どうせそんな感じだろうね」

軽く毒が含まれたところで会話を済ませ、僕は例のごとく自分の席に着き、カバンを置いて一段落。昨日は若干夜更かしをしてしまったから、今朝は眠気が未だに取れずに登校中何度も寝そうになった。フラミンゴよろしく片足で眠れるような能力が僕にも欲しい。いや、要らないか。片足立ちはバランスが悪い。そんな不安定な姿勢で寝るくらいならちよつとの時間我慢してベッドで寝ろという話だ。

机に両肘をついて、まどろみタイム。無心になって時の流れをぼんやりと感じてみる。徐々に教室が騒がしくなってきた。時計を見ると8時27分。時の流れ恐るべし。軽く寝たりとかしてないよな？ 人前でうたた寝なんて僕のアイデンティティが許さない。寝る時はベッドの上だけ。それ以外は、基本的に認めていない。床で寝るなんて論外だ。体の節々が痛くなる。睡眠の意味がまるでない、むしろ逆効果にしかないじゃないか。

ふと隣の席に目をやる。そろそろ朝読開始のチャイムが鳴るというのに、高田はまだ来ていなかった。はあ、さてはあいつ、今日はガチ寝坊してきたな。最悪まだ夢の中か？ そろそろ起きないといろいろとまずいぞー。

やがて御影さんがやってきて、僕らはそれなりにタイミングを合

わせて立ち上がり、挨拶をする。

と、閉められていた引き戸が勢いよく開けられた。
入ってきたのは高田。

椅子を引くどさくさで、大半の生徒は彼の登場に気がつかなかったようだ。高田は下を向いた顔を上げないまま、ふらついた足取りで自分の席にたどり着くと、カバンをほぼ落とすようにして置き、座った。その後、全面的に机に顔を伏せてしまい、健康観察が始まった。それでも顔を上げることはしない。ピクリとも動かない。

縁起でもないが、死んだように、と形容できるほど、身じろぎもしなかった。

……一体何があつたんだ？ ギリで間に合つたから遅刻で落ち込んでいるわけじゃなさそうだけれど……。

朝のホームルームを終え、御影さんが教室から出て行く。僕は1時限目の国語の準備をしてから、高田に話しかけた。

「おはよつす、高田」

返事はなかった。

『……………』すらも感じない、完全なる無視だった。
無視？

僕、なんか高田に悪いことしたっけ？

「おーい？」

「……」

「ん？ 今、なんか言つたか？」

「……、……………」

何かを呟いているらしいことは分かった。言葉の区切りをかすかに感じる。何を言っているかは分からないけれど。

「……………、……………」

「？」

長文を喋った。

まるでうわ言のように、呆けてしまったかのように、抑揚がない。
注意深く耳を澄ませる。

「……音が……が、ん　に……んな……」
もう少し。

大分聞き取れてきた。

「——蓮音が……」

蓮音？

今、蓮音って言ったか？

「高田、蓮音がどうか……」

僕が問う前に。

高田は、おそらく無意識的に、衝撃の一言を漏らした。

「蓮音が………殺された……」

はすねかおりな
蓮音香奈。

鏡崎と同様に、1年の頃からクラスが離れたことがない、数少ない人物の1人。

そういえば、始業式の翌日、高田に相談されたことがあった。

「蓮音………って、いるじゃん。あの人」

「ああ、いるな。確かに存在してる。それがどうかした？」

「あの人さ、もしかして、俺のこと嫌い？」

「さあね。好きではないんじゃない？　まだ関わりないし」

「いや、……関わりって言うか、その……俺、なんか、蓮音に……」

嫌われてる、つばいんだよな」

「そりやどうして」

「……確証はねえんだけど……ほら、お前もない？　そういうの。」

実際に口で言われたわけじゃなくても、態度とかで分かっちゃうっ

つか。そんな感じ」

「単なる推測かよ。なら、最悪高田の思い違いってオチもあるんじゃないか？」

「そうだといいけどさ……」

「気になるんなら、聞いてみようか？　蓮音とは、少なくとも色恋沙汰の質問をしても引かれない程度の付き合いはあるから」

『いや！！ それは、ちょっと、いいや。遠慮しとく』

『いいのか？』

『大丈夫大丈夫。俺の勘違いかもしれないだし』

その時は何だか歯切れ悪く終わってしまったけれど、それから数日たつてみると、確かに蓮音は高田を嫌っているのが分かってきた。具体的に思い出そうとすると漠然としか浮かばないけど、高田曰く『態度だけで分かっちゃまう』類のそれは、何度か見受けられた。

しかし、既に僕は、蓮音の本心に気づいていた。

これは……逆だな。

つまり、俗に言うツンデレというやつだ。自分の思いに相反した態度をとってしまうあれだ。きっと蓮音は、高田を嫌っている表面上の感情の裏に、真逆の思いを抱いているに違いない。鈍感な高田は、それに気づくことなくストレートに受け取ってしまったのだらう。

それはすなわち……。

『高田』

本人に伝えていいものかどうか迷ったけれど、僕は親切心というよりはむしろ遊び心で、打ち明けることにした。

『蓮音は多分、お前のこと好きなんじゃないかと思うよ』

『ツツツ！?!?』

パックの牛乳を飲んでいたところ、脈絡もなく言ってしまったので、高田は牛乳パックを握りつぶしてしまったらしい。

小さな噴射音がして、パックが落ちた。

『時と場合とシチュエーションを考慮しろよ』

恨みがましい目でにらまれた。

顔中牛乳まみれだった。

笑ってはいけない昼休みの屋上ジャストナウ。

『牛乳を粗末にするなよ、ホルスタインに謝れ』

『この牛乳パスチャライズドなんだけど』

『乳牛代表はホルスタインだ』

『で、何だよいきなり……蓮音が俺のこと好き？ そんなこと、いつどこで誰が何を何故どのように』

『5W1Hはこの際関係ない。僕個人の考えだよ』

『はあ？』

『考えてみたらすぐに分かると思うんだけどな……当事者は意外と気づかないもんなのかな……そうでもないと思うんだけど』

『主語を明確にしてくれないか？ 全く話が見えない』

『つまり、蓮音はツンデレだったってことだ』

『どっからそう飛ぶんだよ！？』

『すなわち、高田を嫌っているようなそぶりのあれこれは、好きだつてことを隠すための行動だったってことだ』

『悪い、もうちょい詳しく』

『物分り悪いなお前。だから…蓮音は自分が高田のことを好きだつてことを周りあるいは本人にばれるのが嫌だったから、気づかれないうように逆の嫌っているそぶりを見せていたってことだ』

『……………』

『納得？』

『マジで？』

『マジで』

『……………どうしよう、俺』

『おめでたって言うべきなのか、僕としては』

『蓮音のこと全っ然好きじゃない』

『なぬっ！？』

『いやガチで。だって俺、表面上は嫌われてたってわけだろ？ そちの印象の方が圧倒的だし……それなら、変に湾曲させずにそう言ってくれりゃ、分かりやすかったのにな』

『……なんてやつだ。お前そこまで鈍感だったのか？ いっそ死ね。蓮音を筆頭に全国のツンデレファンの前で自害しろ』

『お前も含んでんの？』

『いや、僕はどっちかっていうとツンデレに対してはアンチなんだ』

けどね。ツンデレって、強気な女子が多いだろ？　僕は強気な女子はあまり好きじゃないんだよ」

これは本心。

僕は恋愛に関してはピュアラブを貫いている。

…経験がない以上、どうしても言えるけれど。

「だから、とりあえずお前の気持ちはわきに置いて、蓮音のこ
と、考えてみても悪くないんじゃないか？　あいつ、クラスの中で
はわりと上玉だと思うけど」

「上鑑玉？」

「違う上玉だ。間に文字入れてごまかさない」

「考えてみるって言われてもな……」

「正直、棒に振るにはもったいないよ。これを機に、お前もその鈍
感さ加減を治せ」

そこでチャイムが鳴って、僕と高田は教室に戻った。

これが、二日前、17日の話。

今日はその二日後。

……時と場合とシチュエーションを、考慮していなかった。

こんなタイミングであんなこと、何で言っちゃったんだろう。

少なからず、意識するに決まってるじゃないか。

「……僕はなんてバカなんだろう、馬にも鹿にも申し訳ない」

僕は白昼夢から覚めたような思いで、長い間閉じていた眼を久し
ぶりに開いた。

現在、午後2時10分前。教室では英語の授業をやっている時間
帯。

しかしそこに僕はいない。理由は至って単純明快、僕が教室にい
ないからだ。

3文字で言えば、サボリ。

サボリと言え、屋上。

というわけで、僕は屋上で寝転んでいたわけだ。

蓮音が死んだ。

いや……殺された。

非日常、か……。

僕の周りには、何ら目立った変化はない。

蓮音がいない。

それだけだ。

何も——変わらない。

「残酷と見るか平和と見るか……微妙なところだな」

どちらかというと、前者に傾いている。

残酷。そう、残酷だ。

世の中は残酷だ。

蓮音が死んだ。

だから？

彼女が死んだから、何ですか？

それが何か、世の中の進行に支障をきたしますか？

「きれいな事も甚だしいや、何が平和だ。何が日常だ。そんな言葉がある時点で、対義語である戦争や異常が現実起こっている証拠じゃないか」

昔、朽輔さんが言っていた言葉だ。

本当に、深いよなあの人……。

「こんな世の中は、ダメだ。こんな世の中は、ダメだよ。壊した方が世の中のためだ。………全く、その通りだよな」

僕は何をやっているんだろう。

こんなところで、授業をサボって、屋上で寝転んで。

世の中を無意味に批判して。

何やってんだよ。

鏡崎と操先生は行方不明。

蓮音は死亡。

高田は放心状態。

問題は、たくさんあるだろ？

それら全てを見ないふりなんて、あまりにもおこがましすぎるっ

てもんじゃないか？

分かつてる。

分かつてはいるんだ。

でも、分かつていればそれを行動に移すことが出来るなんて、そんなことは絶対にない。

僕は本能の赴くままに行動することが出来ないのだろう。

斑状組織じゃなくて、等粒状組織。

火山岩じゃなくて、深成岩。

言ってしまえば、グズ。ノロマ。

昔は、もつと行動力あつた気がするのにな……。

「なんて、言つたところで事態は何も進展しないな。むしろ現実から目をそらしているようでは後退だ。……いい加減、腹割るしかない」

寝転んだ状態から、まず上半身を起こす。それから足に力を入れて立ち上がろうとした、その時――。

屋上の扉が、かすかに揺れた。

キィ、という音が遠巻きに聞こえる。

本日、一日ほぼ無風。春も佳境を過ぎた今日この頃、風がないといささか過ごしにくい。

そんな中で、扉が開く。

ということは、扉の向こう側に扉を開けた張本人がいるということとで、現在時刻が午後２時ジャストであることから考えると、その人物も授業をサボってここへ来たということになる。

…誰だろう。

立ち上がった僕は、ゆっくりと、自然な風を装って、扉へと向かつていった。時間的には、休み時間まであと２０分かかるのだが、そうも言っていられない。

本能の赴くままに行動することは出来ないけれど、好奇心の赴くままに行動することは出来る。それが僕だ。

ノブに手をかけ、そつと手前に引く。

そこにいたのは、思いがけない人物だった。

「よお。――やつぱ、サボリといえは屋上だよな」
あらせかつなり

荒瀬勝成は挨拶代わりに軽く手を上げて、内に何かを秘めた妙に深刻な表情で僕を見た。

忠告。

蓮音香奈について。

“かな”じゃないよ！ “かおりな”だよ！

ルビ振ってあるから大丈夫だとは思うんですけど……いるんですよ、読み方がわずらわしいからって、勝手に一般的な読みに変えちゃう人。っつーことで1つ、よろしくお願いします。以上。

ところで。

平和の対義語は戦争、とか、本文で書きちゃったんですけど、もしかしたら違うかもしれないらしいんですよ。念のためインターネットで調べてみたら、『じゃない』っていうのはあつたけど、『だ』っていうのはなかったんです。一般的には“戦争”になってるらしいんですけど、それを否定する人もいて、でもその人は『じゃあ戦争じゃなかったら何なんだ』って話になると、それも分からないみたいで。否定してるだけで、真実は知らないってことですね。だから、もう戦争でいんじゃないかなノリで書きちゃいました。間違っても気にしないでください。

最後に出てくる勝成、本当は地味にspring 2でチラッと出たりしてます。

「と、まあそういうわけで僕は今から君を殺害することにしたわけだ。あー、質問は受け付けないからそのつもりで。僕の話を目に聞いてくれてたんなら質問なんてあるはずがないものね。それともあれかな？ 君らしくもなく“恐怖”とか感じちゃってたりするのかな？ ん？ どのようなかな？ 詳しいことは分からないけどさ、つまり僕は君を今から殺すってこと。うん、それさえ分かってくれば僕としては許容範囲だよ。それさえ分かっている？ それは残念。仕方ないね、僕が君を殺す理由を今一度繰り返して言っておくでしょう。そもそも、人を殺すのは簡単なんだよ。いや……人間は、人間を殺すのが一番簡単、容易だって事をまず頭の中に入れておいて欲しいな。だってそうだろう？ 僕は人間だ。君も人間だ。僕は自分がどういう状態になれば死ぬかを知っている。ならそれは君にだって通じる殺害方法というやつになる。単純な数学の証明問題だと考えてくれればいいよ。Aが僕、Bが君。Aに危害を加えて、Aが死んだ状態をA-とする。A=Bの時、Bに危害を加え、死んだ状態がB-であることを証明しなさい。答えは簡単だ。AとBは構造が同じなんだから、Aに加えた危害がBに通じないはずはない。よってBはAを殺す際と同じ方法で殺害することが可能である！ そういうわけさ。あ、勘違いしないでね？ 僕はさすがに自傷行為なんてやったことはないよ。自傷行為の筆頭として挙げられるのはリストカットだけど、あれはやったあとに手首に痕が残るってことで僕はいまいちお勧めしてないんだ。ていうかまあ、勧めるも何もリストカットなんて勧めた時点で自殺幫助で捕まるんじゃないかな僕？ それだけはやだなあ、僕はまだ何も目的を果たしていないのに、捕まるなんて持つての外だ。ん？ 不思議そうな顔をしているような気がするね。僕の錯覚？ それはそれで結構。もしかして説明していなかったかな？ した気がするけどな。僕が君をここに連

れてきた理由。ああそうだ、詳しくは言つてなかったんだっけね。えーっと……簡単に言っちゃうとね、京ちゃんの罪を他者になすりつけるためだよ。おっと、安心してね。君になすりつけようとしてるわけではないから。正確に言くと、君を使って学校関係者を呼び出して、そいつに罪を被せようと思ってる。京ちゃんの罪が晴れたところで、大人になすりつけなくちゃ真実味に欠けるからね。その点君は5日前の態度からは想像もつかない程にその枠からは外れた位置にいるんだ。残念だよ……本当に残念だ。君がもっと醜悪そうな雰囲気の人間だったら、君に濡れ衣を着せることだって出来ただろうに。言つとくけど、僕は半分回りくどい手段を使っているんだよ？ 君を誘拐したことだって、その目的の最終形態は“餌”^{えさ}であり、餌でしかなく、餌以上でも餌以下でもない。もったいないよね。単なる餌を調達するために警察沙汰を覚悟して誘拐及び拉致監禁だよ。ホント、僕だって完全無欠のオールマイティじゃないんだから、今の時点でかなりの無茶をしてるってことは一応君も理解しておいてね？ いちいち餌を用意してから魚を釣るより、手で直接つかんだ方が早いんだよ。でもそれはあまりにもリスクが大きすぎるからね。ちようど君には京ちゃんを侮辱したという重罪が課せられてるところだし、僕も君には少なからず怨恨の感情を抱いているから、グッドタイミングってことで餌に君が選ばれたってわけさ。おめどう。さて、ここまでが5日前に話した内容だったと思うけど、思い出してくれたかな？ 逆によく忘れられたよね。下手したら君も何だかんだで死ぬかもしれないよ？ 流れ弾っていうか、どさくさっていうか？ 僕ってキレると後先考えないところがあるから、もし万が一この計画が国家権力にばれでもして危機的状況に陥っちゃったりなんかしたら、死なばもろとも方式で僕は君を殺しちゃうかもしれない。あくまで“かもしれない”だから確証はないけどね。それでもとりあえず危惧くらいはしておいた方がいざという時身のためかな。これは忠告だよ。殺される側の君への、殺す側の僕からの忠告。素直に聞いとくのが得策だ。死ぬ準備が出来てる人間なん

ていないんだから、あらかじめやれる範囲のことはやっておきなよ。……って、あはは、無理なんだっけ。そりゃそうだ、出られないもんね。だったら仕方ないな、頭の中で辞世の句でも考えてたら？死ぬ時は多分一瞬で死ぬと思うから、今からでも考えてみるといいかもね。といつても、誤解を招くと困るからこれも言っておくけど、必ずしも死ぬとは限らないだよ？この計画が露見さえしなければ、僕は君を殺す必要はおろか、1人も死者を出さずに丸く収めることが出来る！僕としてもそれを望むし、君に至っては……聞くまでもないよね？うんうん、分かったよ。よく分かった。君の心の声は筒抜けだよ。少しはプライバシーって者を意識した方がいいんじゃない？ただ漏れたよ。無防備すぎ。いや、僕が敏感すぎるのかな？どっちでもいいや。君が今思っていることはつまりこうだ——『さつき君を殺害するっていったのに、話が矛盾している』と。見上げた度胸だ、こんな状況でも冷静にそんなこと考えられるなんて感服する。そうだね、確かに僕は初め、今から君を殺害することにする、と言ったよ。言いましたよ。言いましたとさ。それについて否定する気はない、だって本当のことだからね。男に二言はないとは最近聞かなくなった言葉だけど、僕はその信者だからね、前言撤回なんてことはしない。僕は今から君を殺すよ……本当は殺したくないけどさ。だって、君を殺したら、僕は完全に犯罪者だ。それも誘拐及び拉致監禁による殺害。聞くだけで重罪っぽい匂いがプンプンするよ。もしかしたら死罪かな？死罪かなあ。それは困るな。僕はまだ14年半くらいしか生きてないんだよ。そんな短期間で人生を終えるなんて、神様にとっても元が取れない。僕らは結局のところ、神様によって生かされてる迷える子羊なんだからね。でも殺さなくちゃならないよ。何故かって？おいおい、君は冗談抜きで僕の話を微塵も聞かないつもりなのか？それとも無意識的な拒絶反応でも起こしてる？ついさつき言ったばかりじゃないか——もし万が一この計画が国家権力にばれでもして危機的状况に陥っちゃったりなんかしたら、死なばもろとも方式で

僕は君を殺しちゃうかもしれない、ってさ。この計画が露見さえしなければ、僕は君を殺す必要はおるか、1人も死者を出さずに丸く収めることが出来る！　とも言ったよ。はい、君お得意の思考タイムと洒落込もう。この2つから、一体どういう事態が推測される？　制限時間は3秒。1。2。3。はい終了。答えは君の口から直接聞きたいな。答えはもう出てるんだろ？　ならば教えて欲しいなあ。さあ、答えをどうぞ、鏡崎くん」

「……………犯罪はばれないようにやって欲しいね……………」

「ある意味満点。その通り、僕としたことが、なんと君を誘拐及び拉致監禁したことが国家権力にばれてしまったんだ！　さあどうする、鏡崎くん？　僕に大人しく殺されるかい？　それとも、君の慈悲深き心をこぞという時に本領発揮してくれるのかな？」

「僕も死にたくはないからね。……………」

「今回だけだよ」

「それは最高にありがたいお言葉だ。僕はきつと今この瞬間こそ君に感謝することはないだろう。未来永劫忘れないよ」

「自分が死罪になるかもしれないって瀬戸際に、随分と楽しそうだよね君も……………僕がイラついてるの、まさか知らないとか言わないよね」

「ん？　もっちゃん！　あれかな、実はプライドに忠実な鏡崎くんとしては、“餌”呼ばわりが癪に障ったかな？　そうだと思って強調しといたよ。あ、ごめんそんな目でにらまないで。僕、君にそんな目で見られたらどうしたらいいか分からない」

「……………佐上くん。一言いいかな」

「何だい？」

「いつまでも調子乗ってグダグダ抜かしてやがると、マジでブチ殺すぞメエ」

「心の底からごめんなさいお詫びします謝ります申し訳ございません以後気をつけますからどうかお許しを」

やってしまいました……………。

いや、正確には語り手は変わってないんですよ？ てか、語り手云々をなくすために会話文オンリーにしたんですから。ね？ 大丈夫だよ？ セーフだよこれ。

うん、ありがとう。許してくれるって信じてたから、ちょっと語るね（↑強引な話題の転換）。

途中で読むのめんどくなっただ人、挙手！！

……だよー。うん。淳喋りすぎだと思っただ今回。これでもけっこう努力はしたんですよ、リズムよく読み進めていけるように頑張ってた構成したんですよ！

根気よく読んでくれたあなたに大感謝。

そして、今回、おそらく二度とお目にかかることはないであろう、超レアなシーンを付け加えました（罪滅ぼしじゃないからね！）。

亮介のマジギレ。

これはもう、レア度保持とかそういうの抜きで、これ以降、そんなシチュエーションないと思う……亮介をここまで怒らせるキャラなんて、淳以外にいないと思うし……そういう意味で、一度きり。

次回はちゃんとみっくん視点ですから！

ていうか、今回地の文がないんだから語り手も何もないんだけど！（しつげえな）

「莉子……………知らないか？」

突然やってきて、突然、そんなことを言われた。

相手はクラスメイトの荒瀬勝成。

「知らないか……………ってのは、その……………つまり、行方が分からなくなってる、……………ってこと？」

僕は慎重に言葉を選んだ。

ぶつちやけ、この人物がこんな時間に屋上へ来た時点で、警戒していた。荒瀬は学級委員長を務めるほど（僕と違って）真面目で勤勉な生徒であり、授業をサボるなんてことは天地がひっくり返った拍子に地球の軌道が狂ってしまい太陽に衝突してthe end^{エンド} of earth^{アース}なんてことはあっても有り得ない。

そして、今名前が出た莉子——柳川莉子との関係性を少しばかり考察してみれば、おのずと答えは出てくる。

「……………柳川のことか、心配なんだ」

「心配？」

「僕にそれを聞くって事は、そういうことじゃないか？ ただでさえ今は授業中だ。さしずめ、クラスメイト全員に聞いて回ってたんだろ。にもかかわらず、誰も柳川の行方を知らない」

それでわざわざ授業をサボってまで僕に聞きに来たってわけだ。

それもそのはず、荒瀬は柳川の幼馴染なのだ。ある事情があつて全く喋らなくなってしまった柳川を、常日頃から心配している。理由を知っているだけに更生させるわけにもいかないし、かといっていつまでもこの状態のままではいられない、いや、社会において許されないであろうことは荒瀬も分かっていた。だからこそ困惑し、混沌し、憤っていた。

僕にもかつて親友がいたが、あいつが何か思い悩んでいた時は、いつも相談に乗ってやっていた。前に高田が言っていたように、目

の前で人が苦しんでいる時に何も出来ない自分なんて嫌だった。それは積極的とか活動的とか、そういうのとはまた違う。他人の思いやる気持ちに準ずるものには違いなければ、だからといって僕は単なる思いやり、同情程度で相談に乗っていたわけではない。内情を知ったからには、そのために自分が出れることはないか。なかったとしても手助けくらいはしてやりたい、という風に、ただ聞いて励まして終わりではなくて、それに基づいて行動できるようなヴァイタリティーこそ、相談した相手が本当に望んでいるものだ。聞くだけなら誰にでも出来る。文章問題のようなもので、用紙に書かれた文章を読むことならば誰にだって可能なことだ。読んだ上で、出題された問題を解いていくことに意義がある。それを持ち合わせているのが荒瀬勝成という人間なのだ。

相当、人間としての器が出来上がっているように思う。まだ義務教育も終わっていないのに、大した精神だ。

「で、僕に聞きに来た」

「……………。つってもまあ…………別に、心配してる…………ってわけじゃないけどな」

「ん？」

「つていうのは、俺自身は莉子の居場所は大体予想できてるんだ。伊達に10年以上付き合い続けてきたわけじゃない、その程度確認するまでもなく分かる」

「なら何で僕に？」

そう言う。

荒瀬は、先ほどまでのどこか焦ったような様子を一变させた。

会話をしているながら、僕とは目を合わせようとしなかった荒瀬が、至極冷静な目で僕を見つめてくる。

屋上の扉を開けた直後の、あの目だ。

「正直に言う……………」

音楽用語で例えるならば、リタルダントにメゾピアノでデクレッシェンドをかけたその物言いは、なぜか身を震わせた。

一文字一文字を言うごとに温度を下げていく目線が怖い。

「俺が聞きたいのは、お前が莉子の行方を“知っているか”じゃない」

「……………」

言葉を発することが出来なかった。

気圧された、とても言うのだろうか。

「お前が莉子の行方を“知っていないか”が知りたかったんだよ……もしかしたら、何らかの偶然でクラスメイトに莉子の行方を知られてしまっているかもしれないと思うと、不安になってな。1組の生徒全員に聞いて回ってる。御影先生にもな。さっきの言い分からすると、お前も莉子の行方は知らないみたいだから、じゃあもう大丈夫か。———と、いかん、あと3人忘れてた」

独り言じみた荒瀬の呟きを呆然と聞く。いや……聞き流す。

「佐上惇と鶴嶋京平……鏡崎亮介。この3人は、数日前から欠席だったっけな。家にまで押しかけるわけにもいかないし……登校してくるのを待つか。ま、あいつらが莉子に関わつてるとも思えないし、気にするだけ無体な話だ。ああ、なんか悪かったな、感傷に浸ってたところ邪魔して」

勝手に会話を結ぶと、その足で方向転換して校舎内に戻ろうとする荒瀬。

僕は一瞬迷ったけれど、結局何の言葉もかけないままに、それを見送った。

何だっただんだろう、今は。

荒瀬らしくないといえば、僕が今まで見てきた彼の中で一番彼らしくなかった。もはや別人のようだった。

普通……では、ないんだろう。

非日常。

本当に、何なんだろうな……。

僕の周りには、非日常拡散ウイルスでも蔓延しているのか？

「あ……あいつ、数え間違えてんじゃない」

僕はふと、その事実気づいた。

荒瀬ともあろう者が、こんなに単純な足し算を間違えるなんて。

「4人目……蓮音香奈には、聞きたくても聞けないだろ」

呆けたようにぼやくと、先刻寝転んでいたタイルの上に再度寝そべる。

目の前を冷たい風が通り過ぎていった。

放課後。

清掃や帰りのホームルームなどの面倒事全てが終わったあとに、僕は教室に戻った。

既に大多数の生徒は部活動をしに各々の活動場所へ散ってしまっている。帰宅部の連中も早々と教室を出て行ったらしく、そこには1人の生徒しかいなかった。

すなわち。

「……………」

高田寛人は、朝の状態のまま顔を伏せていた。

一切の身動きをしないその様子は、数千年の樹齢をもつ巨木を思わせた。

もしかしたらこいつ、もう何年も何十年も何百年も前から、ここですくすく机に突っ伏していたんじゃないのか。

錯覚だとは分かっている、そう思わずにはいられない。

「高田」

控えめに声をかけてみる。

当たり前だが返事はなかった。

「…もう、みんな帰ったぞ?」

何を言えばいいのか分からず、とりあえず周辺の情報を再確認させてみた。

返事は期待していない。

えーと、こいつは何部だったかな。

……あれ?

気づかなかった。

高田って何部だ？

「部活……行かなくていいのか？」

今更といえど今更だ。

僕は。

僕は、今まで高田の何を見て、分かったような顔をしていたのだろつ。

結局、何も知らないのは僕の方だ。

そんな僕が、高田を落ち込ませるに一役買ったこの僕が、こいつを慰めることなんか、到底無理な話だった。

高田は、僕を恨むだろうか？

僕が言った余計な一言のせいで、蓮音に関わってしまったことを、恨むだろうか？

そんなことはない。高田は人を恨むようなやつじゃない。

……何を分かりきったことを。

何も知らない人間のことを、僕はどこまで過信できたのだろう。

本当のことなんて、全く知り得ない。

高田という存在を認識したのはほんの二週間前なのに。

この二週間で、僕は高田の何を理解した？

二週間程度で、赤の他人の何が分かる？

つまりはそういうことだ。

いつも快活で明るい、まさしく右脳発達型タイプの高田。

僕が友達だと思ってきた高田。

それは本当の高田だったのか？

僕に見せたことのない素顔があるのではないか？

本当は——僕のことを忌み嫌っていたのではないか？

僕のことを、恨んでいたのではないか？

「……………」

「……………」

所詮、人間なんてそんなもんなんだろう。

少し関わったくらいで、相手の全てを知ったような気になると、痛い目を見る。

裏では何を考えているか、分かったもんじゃない。

考えもしなかった。

友達に嫌われることが怖い自分がいたなんて。

「……………」

感傷に浸っていた僕は、声が発せられたことに気づかなかった。完全に五感が麻痺していた。

考え事にふけっているような場面ではないはずなのに。

「……………」

ふと。

僕は後ろを振り返った。

ついさっき敷居をまたいだ、教室の後ろ側の引き戸を。

いた。

人がいた。

大原夏輝がいた。

「ベリーグッドだったよ、寛っち」

ん？

……………」

あれ、なんか。

…構図、おかしくない？

「やあみつくん。どうだったかな？ 大原夏輝のスペシャルショー

トサスペンスは」

「……………」

「いやー、お疲れー寛っち！ あのタイミングで教室入るのって相当キツかったでしょ？」

「そうでもないぜ？ ま、放課後にシュミレーションとかはしてみただけ、コツさえつかめればわりと楽だった。一番苦労したのは、蓮音を説得することだったけどな」

「ホント、迷惑かけてごめんなー。でも、こうでもしなくちゃみっくんは騙されてくれないと思って」

「あいつ、地味に皆勤賞狙ってたっばい。最終的に納得してくれたけど、やっぱり罪悪感が残るな……ま、終わり良ければ全て良し、だ」
「それにさっきのみっくんの表情。見モノだったねーありや。写真に収めたかったよ」

「後半笑いこらえんのマジ苦労したわ。かなり腹筋きたえられたな。逆に申し訳なくなっちまって。だってあんな純粹に自責してんだぜ？俺は見てられなかったよ」

「まーまー。そこはあれだ、寛うちもちいいとはイラついてたんだろ？あ・の・こ・と！」

「……そりや、……まあ、な」

「軽ーい恨み返しのもりで。これでチャラにしてやれって」
「ん、そうしてやろう」

話が分からない。

話が分からない。

話が分からない！

何だこの二人。いつからこんなに仲良くなってたんだ？スペシヤルシヨートサスペンスって何？蓮音を説得ってどういうこと？僕を騙せない？何に？

「ちょ、2人とも——」

口を挟もうとした、その時。

「やつぱ嫌！あんた達のくだらない茶番劇で皆勤賞逃すなんてもつたいなすぎ！！登校させてもらいましたから！！！！」

閉まっていた引き戸がすさまじい音をたてて開き。

蓮音香奈が僕達に向けて怒鳴った。

あつはははははは！！！！

というわけで、香奈殺人事件は夏輝プロデューサーのフィクション、作り話でしたー！！ やっべ笑いがとまらねえ！

…はい。落ち着きます。

次回は、なぜ夏輝がこんな茶番劇を演じたのかを、みつくに拷問されながら言わされると思うので、あくまで温かい目で見てあげてください。もちろん悪気があったわけじゃないんで。

4月19日、夕刻。

2人の人物が、荒縄で御神木ごしんぎに縛り付けられていた。

「あ、目え覚めた？」

「……なんで俺まで巻き添え喰らってんだ……？」

「さあね……共犯扱いされたのかも。なんか、いろいろ悪い、ホント」

「縄抜けとか、できねえ？」

「俺平成生まれ」

「ったく……！」

「ざけんなよあいつ……！」

「僕がどれだけ心配したと思ってんだ……！」

「いや……思ってたさえないか。少しでも同情してたら、あんな茶番考えつくはずがねえ……！」

「ああ……イライラする……！」

「みつくん……どうしたの？ さっきから憤怒のオーラがみつくんの周囲に蔓延してるよ……？」

「姉さん……！ これから一週間、僕のことを“みつくん”とは呼ばなつて家族全員に伝えて……！」

「へっ？ ちょ、……まず……冗談抜きで反抗期だよ」

「伝えろって言うてるんだ……！ 姉さん……！」

「ひっ……うー、分かったよー。み……マイブラザー」

「みつくんじゃなかったらマイブラザーになるらしい。」

「母は僕のことをマイサンと呼ぶのだろうか。それだけはやめて欲しい。」

「ていうか名前で呼べよ。」

「あーもう……何なんだよ……！ 僕か……？ 僕が悪いのか……！ 僕

が大原にあんなこと言ったのがそもその間違いだったのか！！
いい加減にしろよ！！ 他人を何だと思ってるやがんだ！！」

ありったけの思いを、腹のそこに溜まりに溜まった鬱憤を、怒鳴り散らすことで発散する。

ム力つく。

ム力つくム力つくム力つく！！！！

目に映るものの全てが忌々しい。何もかも破壊できたら、どれだけいいものか。

『今から大原に、国家権力を動かしてほしいんだ』

始まりはこの一言。

僕が言った、この一言だった。

……らしい。

『だからってねえ…… 人死に関連で嘘つくなんて人間としてどうかと思うよ僕としては』

『ひどい言い分だな……。教室でも言ったけど、みつくんを騙すにはあんくらいの演出がなくちゃいけなかったんだよ。並大抵の猿芝居で騙せるような相手じゃないだろあんた。そのために2人も雇ったんだぜ？ 高くつくぜー役者2人は』

御神木に縛り付けられても、どこことなく軽薄な口調は相変わらずだ。

『金取る気はねえよ……』

『分つかんねーよそんなの？ 寛っちはよくても蓮音の方が損害賠償請求してくるかもしれない』

『それは俺が説得しとくから』

『で？』

縄の両端をきつく結び付ける。荒縄なので、手のひらがこすれて痛い。

この縄は松嶺大付属中の体育倉庫から拝借したものだ。大原がトンズラしようと企んでいたので捕獲用に使わせてもらった。

場所を移して、隣町の竹割神社——滅多に人が寄り付かない
廃れた神社に、僕は大原と高田を連行した。この場合高田にはそれ
ほどの罪はないが……道連れだ。

ここで僕は尋問することにした。

『国家権力を動かす』ことが、どのような配線回路によって蓮音
香奈殺人事件（偽）とつながったのかな？』
『ん？』

僕の問いに、大原は「今更何を」みたいな表情をする。

『まさか、知らないのか？ 午後から、教室に警察とかメツチャ来
てたじゃんか』

『あー……それって、英語の授業中？』

『そうだけど』

『サボってた』

『……』

『サボタージュ』

『……言っちゃお』

『荒瀬もサボってた』

『……』

『で、警察がなんだって？』

『だから……』

面倒な説明は省きたかったようだが、生憎その場に居合わせてい
なかったので、説明事項が増えたらしい。

……いや、それくらいの手間、やぶさかじゃないだろ。

もしかしてこいつ、あらかじめ内容固めておいたことしか話せな
いのか？

『国家権力を動かしたんだよ』

『えらく話が飛ぶな』

……。みつくんは、俺に“国家権力を動かしてほしい”って言っ
たよな？』
『うん』

『国家権力って、警察のことを意味してるん、だろ？』

『……そう解釈したんだ。……あ。……あー。あああ、そういうこと』

『な、なんか勝手に理解されちゃったんだけど……え、何？ 説明必要？』

『第三者のために言っとけ』

『んーと……。俺の目的は、警察が動くような事件を起こして、警察の注意を、……』

『？』

『そういやみつくん、なんで国家権力を動かしてほしいんだっけ？』

『言ってなかったか？』

『聞かされてないよ』

『禁則事項だ。^{アルファ}αとでもしといてくれ』

『じゃあ、えと……。警察の注意を、その、α？ からそらすことにあつたんだ』

『ふむふむ』

『でも、だからといって実際に殺人やら何やらを犯すわけにはもちろんいかない。だから嘘をついた』

『ふむふむ。最低だな』

『……ッ……！！（怒） 蓮音を被害者にしたのは、俺のうっかりっていうか……不可抗力だったんだよ』

『なんかよく出てくるその言葉……。不可抗力って？』

『その前に、俺の計画を話しくよ。俺の計画を成功させるには、役者が必要だった。最低2人、できれば3人。1人は“被害者が殺害された現場に居合わせてしまった人物”。これをAしよう。Aには殺人が起こったことを一番最初に知ってしまう人物、第一発見者と言う役回り。続いてもう1人は“Aの役割+Aをさりげなくサポートする人物”。これをBしようか。BにはAが殺害現場に居合わせた直後の、殺された状態の被害者を見たっていう設定で、さらにAの演技が円滑に進むように手助けする役回り。A1人だけが

証人だと信憑性に欠けるし、時間差を上手く利用することによってリアルさを演出できるからな。最後に“できれば”のもう1人——
——Cには、そのまんま“殺されてしまう人物”つまり被害者の役回りを考えてた。こっちは、まあぶっちゃけ、いなくても上手くやればごまかしが効くんだ。最悪、鶴嶋みたいに滅多に登校してこない人物にやつてもらえばいいわけだから。そして筋書きは…。

？Aが少し遅れて登校してくる。

？Aがクラスの皆にCが殺されていたことを告げる。

？騒然とする教室。

？Bが登校してくる。

？Bが殺害されたCを目撃したことを告げる。

？AとBが先生に、警察に連絡するよう勧める。

？警察が来る。

？Aが事情聴取を受ける。その際にBも同席する。

？Aが適当にでまかせを言って、Bもそれに同調し、その場をやり過ごす。

？頃合いを見計らって、Bが“Cは殺されていたのではなく、ぜん息で過呼吸状態に陥っていた”と打ち明けて、全てはAとBの見間違いであったということにする。

っていうシナリオだったんだよ。それが……」

『ふむふむ。箇条書きにしたのはいいアイデアだったな。にしても、それ、具体的に述べられてみると相当に無理があるよな』

『言ってくれんなよ……俺だって必死だったんだ。で、蓮音がCになつたいきさつだけど』

『本題はそれだったな』

『俺はそのシナリオを先にみつくに教えておこうと思って——
——っていうのは、みつくにB役をやってほしくてさ——文章にしてプリントアウトしたものを用意してたんだ。それを落としちやって……。蓮音に拾われて、「コレ何？」って……』

『……………ふむふむ』

『しょうがないから内容を話すと、蓮音、面白がっちゃって、「あたしにC役ゆずってくれない？」ってしつこくてさ……』

『で、蓮音がCになったわけだ』

『それだけならまだ修正が効くんだけど、なんか蓮音が仕切り始めてさ。「どうせなら出くんに秘密で、ドッキリ仕掛けちゃおうよ」って話になっちゃって』

『……ああー』

『それからもう、計画狂いまくり。「めんどっちい」って理由でBだって廃止にされちゃったし……それで、「出くんを騙すなら、A役は出くんの身近にいる人が適任よね」って言い出して、それで寛っちがAに選ばれたんだ』

『名演技だったよ。僕もあれには騙された』

『てか、ぶっちゃけ寛っちにタネ明かしたのは昼休みで、それまでは真面目に蓮音が殺されたって思い込んでもらってたから』

『なっ……お前、悪魔かよ……』

『全てはみつくくんを騙すためだよ。終わり良ければ全て良しくて、寛っちも言ってたじゃん？』

『……で』

『それからご存知の通り。見事みつくくんは騙されてくれて、警察もまだ殺人事件が起こったと思って捜査してるし、結果としては大成功だね』

『……ほっほおー。そういうわけ、ね……』

長い説明が終わった。

高田がほとんどマリオネット扱いだったことは初耳だったけれど、それ以外は大体僕の予想通りだった。

大成功、ね……。

よく、そんなおめでたいことが言えたもんだ。

『ね？ 結果的に、みつくくんが俺に言った“国家権力を動かしてほしい”っていう条件はクリアできたことになるだろ？ これでみつくくんも、心置きなく、そのαって作業に専念できると思うぜ？』

『その前に、言わなくちゃいけないことがあるんじゃないのか？』

『ん？』

『懺悔』

『……ごめ、漢字ムズくて分かんないかなーみたいな』

『ざ・ん・げ……！』

怒鳴った。

誰もいない竹割神社、御神木前で。

昼下がりに。

……このシチュエーションで叫んだら、普通ならば殺人が起ころのが昼ドラ的運びなんだけども……。

『まず、お前の話があまりに退屈でうたた寝してる高田に土下座して謝ること。次に、蓮音にも……まあ、一応謝つとくこと。最後に……』

……』

『？ 他に誰がいる？』

『この僕に、盛大に謝罪すること……！』

僕の怒りはまだ収まっていない。

収まっていないけれど……まあ、まあまあまあ、落第寸前であ第点だ。

ひとまず、本当にひとまず、警察をわき道にそらさせることには成功した。

やっと、物語を進められる。

最後の仕事を、始めますか。

最近、短いなあ…。

学校がとにかく大変で、部活もいろいろと忙しいし、更新がとて
も不定期になっちゃってます。しかもだんだん短くなってます。ま
ずいなこれ。GW頑張らないとな。

今回は多分、もう少し長くなる、と思います。

はあ…疲れた…。

「どういうことかな大原くん??？」

4月21日。

休日。

某交差点にて。

僕は呆然と、目の前の光景を見つめるしかなかった。

この状態は……予想外だ。

予想していてもよかった結果だったかもしれないのに。

全く、やっぱり僕は甘い。

人間、知り合って間もない関わり浅い人物を、無闇に過信するもんじゃない。

「うつわぁー……こりやすっげえな。何人いるんだ？ 少なくとも30人は見受けられるぜ」

「警察はいないんじゃないかなかったっけ？」

「……僕に聞くな」

あの野郎。

つくづく、僕の期待を裏切ってくれる。

決めた。ゴールデンウィークは悠木さんにシバいてもらおう。

「聞ってるかな大原くん？ なんで進行方向に警察がうじゃうじゃいるのかな大原くん？ 400字以内で説明しないと山口組があなたの家に押しかけてきますよ大原くん？」

『古いチェンメをネタにすんな。あれガセだろ。俺の友達に調べたやついるもん』

「んなことは問題じゃないんだよ。どうして！ 殺人事件起こして退かしたはずの警察が、僕らの目の前で交通整備してるんだって話をしてるんだ！」

電話口に直で怒鳴り散らす。

あちら側は雑音が半端ないことになっているだろう。

「つたくなあ……僕を騙した上に収穫なしかよ…踏んだり蹴ったり、泣き面に蜂だな」

「出、お前誰と電話してんだ？」

しばらくおびただしい数の警察官を眺めていた高田が、僕の携帯に着目する。

「この状況を作り出した張本人だよ。またの名を大原夏輝」

「…あいつ、警察は動かしたんじゃないかったのか？」

「見ての通り、大失敗らしいよ。……なんでだかは知らないけどね。おかげで計画αが早速行き詰まったよ」

これから僕がやろうとしていることに警察が関わると、厄介なことになってしまう。

だから警察の注意を引くように頼んだつてのに、大原のやつ……。時間制限はないとはいえ、これ以上“あいつ”に好き勝手されると、こっちにもとばつちりが来る。それは避けたいし、何より――

。 ゴールデンウィークを補習にされちゃたまらない！！

「聞いているかな大原くん？」

「なんスか」

「もうちょつと派手にやった方がよかったのかもね」

「派手に…って？」

「校舎破壊するとか。爆弾仕掛けとか。そういう、もっと大規模な」

「俺を刑務所送りにする気か！！」

「いや、まず悠木さんにシバいてもらおうと検討中だ」

「……………マジ？」

「というのは冗談だったけれど、君の反応がウケたので本採用」

「なっ、ちょ、待ってそれだけはま」

ピ。

通話を強制的に終了させて、僕は立ちはだかる国家権力をもう一度見すえた。

さて。

面倒なことになったぞ……。

「ん？ んんん？ 君たち、中学生？」

今後の対策について思案していた最中、突然目の前に刑事らしき男性が現れた。

僕が周囲に気を配っていなかったただけで、数秒前から僕達の前にいたらしい。

「…はい、そうですけど」

「悪いんだけどね、今ちよつと、捜査してるんで。立ち入り禁止になってるんだけど……」

「？ 普通に通れましたが？」

「はい？ …え？ ゲート前に2人ずつ配置した警備員に、止められなかった？」

「いませんでしたよ。なあ、高田？」

僕は隣に話を振る。

…誰もいない。

ニツチを突いたお約束。

もう隣——朝井に同意を求めた。

「いなかったよな、朝井？」

「誰もいませんでしたよ」

「…おかしいな。そんなはずは……」

「で、刑事さん。なんの捜査してるんです？」

さりげなく朝井が刑事に聞いた。

「今日、通報があつてね。こちら辺に誰かが拉致されてるって…で、今、近くの家に家宅捜索してるんだ」

簡単に言っちゃっていいのだろうか。

わりとゆるいな、捜査一課。

というよりも朝井のテクがハイレベルなのか？

「誰からです？」

「それが分からなくてね…。どうも、公衆電話からかけたみたいな

んだよ」

「詳しい内容を……」

と、さらに言及しようとしたその時……。

カツカツカツカツカツカツカツカツ。

鋭いハイヒールの靴音が高スピードで迫ってきた。

真っ黒のスーツを着た女の人が、冷たい表情でまっすぐにこちらへ向かってくる。……あの人も刑事なのだろうか？

この人と違って、随分と貫禄が…。

つまり、怖い。

「佐野氏」

「ヒツ……！？」

およそ目の前の男性からは発せられることはないだろうと確信していた声に、およそ目の前の男性からは目にすることはないだろうと確信していた動作——首をすくませるといふ月並みな反応が、僕の目に映った。

何ていうか、マジでこの町大丈夫かなと思った。

やってきた女の人は、そのままとてもなめらかな動きで男性のネクタイの結び目に近いあたりを思いっきり引つ張る。客観的に言うとか、ヤンキー（この場合はレディース）が下校途中の中学生にイチヤモンつけて襟首をつかんでいる様なビジュアルになってしまっていた。

何ていうか、国家権力わざわざ動かすまでもなかったかもな、と思っただ。

いろんな意味で。

「あなた今何を言おうとしましたか？」

「いや、あのですねー、この方達が事件について聞いてきたんですよ」

「聞かれたからって調査内容を一般市民にバラすような真似が許されると思っっているのですか？」

「思ってますん」

思ってたなかったらしい。

普通に言っちゃう流れだったよねさつき。

刑事達の応酬に立ち会えるほどの能力は持ち合わせていないので、暇になった僕は朝井と雑談をした。

「朝井、何でそんなに事件について知りたがったんだ？」

「何となく。何の事件が起こったのかなーって」

「気楽だな…」

「私が直接被害者なり目撃者なりになったわけじゃないからね」

「所詮は人事ってやつ？」

「俗に言う野次馬」

前々から思っていたけれど、朝井ってけっこうエグい性格してるよな…。

栄田が言ってた意味がようやく分かった。たしかに朝井はギャツブが激しい。

手持ち無沙汰になった僕らは、高田を捜すことにした。

……というのは表面的な理由で、本当は『迷子になったつばい友達を捜す』ことを口実にして調査中の現場をうまく切り抜けようと企んでいたりする。

いなくなつた以上、ダシに使わせてもらうぜ。

「大体あなた、配属2年目の分際で捜査一課に加わっているなんておこがましいですね。調子に乗らないでください」

「個人的な僻みですよねソレ完全に。上層部からの命令^{うへ}なんだから仕方ないでしょ」

「これは私個人としての見解ですが、あなたには事務処理が相応しいと常々思います」

「勝手に思ってた下さいよ。あなただって私の上司ではあっても吉津さんの上司ではないんですから」

「あの人の名前を出さないでください。耳に悪性腫瘍ができたらくすするんですか」

「摘出手術するしかないでしょ。ていうかメデイカルに酷すぎる言

い分ですね。そういうことから錦戸さんにあらぬ疑惑をもたれるんですよ」

「？ 何のことです？」

「塚本さんと吉津さんが付き合」

「今私あなたと錦戸氏に猛烈に殺意を抱いているのですが行動で表してもよろしいですか」

「よろしくないですね。それ遠回しに『殺すぞ』って言うてるようなもんですよ」

2人の刑事が相変わらず言い争いをしている中、僕と朝井はさりげなく横を通っていった。

立ち入り禁止
『KEEP OUT』のロゴが入ったデンジャラスカラーのテ

プをまたいで、家宅捜索をしている警察にばれない様に道路を小走り。しばらく進んでいくうちに――。

突き当たり。

白い壁。

周囲を見渡すと、見知らぬ住宅地。

……………。

「……みつくん」

「ごめんなさい」

「謝ってる暇があったらここがどこか教えてよ」

「全く見当がつかない」

「だろうね。私達、迷子になったっぽいんだから、居場所が分かっていたらおかしいよ」

「言ってることが矛盾してるっていう指摘は野暮か？」

「野暮だね」

なんてこった、何て言うまでもない。

何てことない、ただの迷子だ。

今の僕には、携帯電話というICチップ搭載型集積回路電子機器が備わっている。何を怖がる必要もない。いざとなれば、いくらでも手段はあるのだ。助けを呼ぶなり、GPSで現在位置を測定する

なり。

「とはいえ、迷子になった時は迂闊に動かない方がいい。もしかしたら、見慣れた住宅地に未知の視点から訪れただけかもしれないしね。灯台もと暗しっていつて、見慣れたもののほど見慣れた形で定着してしまっていて、少し別の視点から見ただけで別物のように錯覚してしまうものなんだ」

「小理屈はいいから」

「ごめんなさい」

小理屈で一括りにされてしまった。

シヨッキング。

「あ」

シヨッキングついでに思い出したことが1つ。

「そういえばあいつ、携帯持ってたよな？」

「“あいつ”っていうのが高田くんを示唆する代名詞だとするならば、そうだね」

「なら、あいつに電話すればこの状況は簡単に乗り切れる」

「何故に？」

「前に言ってたんだけど、高田って、中等部の頃まではここら辺に住んでたらしいんだ。この辺りの地理には詳しいはず」

「いいタイミングで思い出したね」

「記憶力も実力のうち」

「“力”が接尾語に付く以上そうなんだろうね」

「じゃ、ちよつとTELEしてくるわ」

「いつてら」

というわけで。

眼前にそびえる白い壁の全容を知らないままに、僕は高田に電話をしてしまった。

この白い壁を挟んだちょうど向こう側に、高田はいたというのに。

「……………」

絶句。

その一言だった。

この光景を見て、彼に何が言えたことだろう。

何も……言えない。

こんな。

こんなこと。

現実には、起こっていいはずがない。

彼が生きてきた日常の中に、こんな光景は、本来あつてはならぬ
種類のものだった。

「……………」

戦慄。

例えるならば、その2文字。

——気分が悪い。

酷く気分が悪い。

見るに堪えない。

目を、そらしたいはずなのに……。

「あれ？」

聞こえてしまった。

そして、見てしまった。

「困るなあ、勝手に裏口から侵入されちゃ。人目につかないうちに、
処理しようと思ってたのに……」

「……………」お

震える。

駄目だ。

ここは——駄目だ。

ここにいてはいけない。

危険。

無意識的に本能的に、考えるまでもなく脊髄反射のごとく、その

言葉が脳裏に浮かんた。

「……お、ま……え、…な、何で」

「仕方ないね。見られてしまった以上、下手に隠し立てするのも無意味だし、ついでだから君にも教えちゃうとしよう。僕、実はこんな人間でーす。あははっ」

笑み。

目の前の人物は、笑っているのか？

こんな光景の中。

「1人で来たの？ 連れはいない？ 迷い込んだじゃっただけなのか？ 全く、君も不運だね。こんなところに、こんなタイミングで来さえしなければ、今日も変わらず平凡に過ごせていただろうにね……。残念。そっか、裏口があつたね。ちゃんと鍵をかけておくべきだったな。と……ん、おかしいな。おかしいことが1つあるよ」

「……………」

「君、ここにいてってことは、位置的に裏口から入り込んだってことだね？ それなら——裏口の有様を、目にしていないはずはないよね？」

裏口の有様。

もちろん、見た。

見たくもなかったけれど、見えてしまった。

裏口の扉には、ある物が立て掛けてあつた。

それがなんだつたのかなんて、思い出したくもない。

あの時点で、彼はもう、耐えきれない状態にまで追い込まれてしまっていたのだ。

にもかかわらず、この中へ入ったのは、何故だったのか。

それは彼にしか分からない。

そして、彼にさえ分からなかった。

「ドアのところに立て掛けられてたチェーンソーが、見えなかったはずないよね？ まさか、それを承知でここに入ってきた、なんて

こと、まさかまさかないよね？ 君がそこまで残酷な人間だとは思わなかったよ……」

軽快な電子メロディーが、暗い室内に突如響いた。

場違いなほどに軽快なそれは、彼の携帯の着信音だった。

「…電話、みたいだね。タイミング的にはまあまあよかったかもしれない。このまま僕が君に一方的に語りかける形になると、どうにもワンパターンが過ぎるからね。電話の相手に感謝するべきだよ。僕も今はちよつと現実から逃避したい気分なんだ。ついにやつちやつたよ、京ちゃん……でも仕方なかったんだ。まさか莉子が、あんなことするとは思わなかったんだもの。莉子は本当に僕のことを心から愛してくれているんだね。それは嬉しいんだけど、嬉しいんだけども、あれはちよつとばかりやり過ぎだ。彼とはたった今和解したところだったってのに……。こちらは逆に随分とバッドタイミングだったな。これからどうやって警察を追い払うっていうんだか。さすがに無理難題だよ。——ん？ 何してるんだ？ 急がないと留守電サービスに接続されてしまうよ？ 待たせれば待たせるほど、相手は君のことを心配するかもしれない。早く出た方がいいんじゃないかな？」

彼は、震える手で。

携帯を手に取り、耳に当てた。

「……………もしもし……？」

「あ、やつとつながった。もっしもし、僕だけど。高田、今どこにいる？ ……………ん？ あれ、聞こえてないのか？ おーい、高田ー？ ……え、何だった？ 悪い、ワンモアプリーズ。……はあ！？ ちょ、ま、待てよ高田。お、落ち着け。そんなこと、いきなり暴露されたこっちの身にも——」

切れた。

……………。

切れちゃった。

「言うまでもないけど、ここがどこかは聞けてないね？」

「残念なことに。だけど、高田がどこにいるのかは分かった」

「知ったところで意味はないと思うけど、一応聞いておくよ」

「この壁の向こう側」

僕は正面の白い壁をペチペチと叩いた。

「正確には、さがみ動物病院 の南西裏口。どうやら、僕達はこの動物病院のちょうど左下、端っこに突き当たっちゃったらしい」

GW初日はこんな具合でいかがでしょう。

少しばかり長くなってしまいましたが、今回は物語が一気に進みました。いよいよクライマックスに近づいていきます。

…のわりに、まだ曖昧な部分も多いのが、アルマジロのいけない所（曖昧模糊大好き）。

そして宣言。

前言撤回します。

語り手チェンジを公式に認めます。ごめん誓ったのにホントごめん。でもこの物語、みっくん視点オンリーじゃ無理があるの。だから許して。

うん、ありがとう。許してくれるって信じてた（↑横暴傲慢御都合主義）。

次回も長くなるかも。

結局。

日常だの非日常だの、自分の世界を分かりきったように枠にはめた言い方をしてみたところで、それは単なる主観的なものでしかなく、別の人間からしてみれば全くの見当違いも甚だしい失態だったということだ。

日常なんてものは、この世界に存在しないのだ。
常に変化し続けるのが世界。

その証拠に、今まで生きてきた中で、一度だって全く同じ瞬間を過ごしたことなどありはしないだろう。

あったとしたら、それは錯覚以外の何物でもない。

錯覚だったのだ。

僕らが日常だと思ってきた今までの日々は……所詮、錯覚でしかなかったのだ。

「何の説明もなしにいきなり何をしようとしてるの？」

背後から抗議の声が聞こえてくる。朝井のものだ。

そりゃそうだろう、突拍子もなく右手首を驚掴みにされて一方的に駆け出されては、彼女からしてみれば訳が分からないと言いたくなるのも無理はない。

僕は高田から聞いた内容という内容を余すところなくありのままに全て話した。走りながらだったので聞き取りづらい箇所もあっただろうけれど、そこら辺はご了承頂くことにした。

「……………謎……………ってほどでもなかったけれど、…これで、私が一つ疑問だったことが解決されたね」

朝井は至極冷静に、淡々と言った。

しかし、声が震えているので、心の内ではとても動揺していることが分かる。

そりゃそうだろう。

僕も朝井の言わんとするところは大体予想がついている。

「さっきの刑事が言ってた言葉……『ゲート前に2人ずつ配置された警備員』。そんなことになってたら、そりゃいるはずもないよ」

「……笑ってた、らしい」

「ん？」

「あいつは——佐上惇は、首を吊って死んでいる警備員を見て、満面の笑みを浮かべていたんだってさ」

「……………」

またも朝井は沈黙した。

言葉もない、というやつだろう。

自分の身近に……それも、同じクラスで過ごしていた同級生の中に、そんな人物がいたことが、信じられないのかもしれない。

まあ、同情してやれなくもない。僕と朝井は3年間クラスが離れることがなかったわけだから、状況は僕も同じだ。佐上といえば、クラスの中でも、いや学年全体規模で考えても、小心者で臆病な性格だったのだ。そんな彼が、死体を見て笑うなんて誰が想像できよう。

しかし、あんな状況で嘘をつけるような余裕が高田にあるはずもなく、おそらく真実なのだろう。

「……で」

しばらく絶句していた朝井が僕を見た。

「みつくんはどこに向かって走ってるわけ？」

「ゲート前」

話しながら走るといふ行為が思った以上に体力のいる所業だったことに気づき、やむなく単語で返した。それだけで納得してくれ

ばベストだったけれど、さすがに「それはけっこう」で済ますわけにはいかなかった様で、朝井はなおも言及した。

「いや、ゲート前と言われましてもね。私達今迷子なんですよ？ 闇雲に動いちゃって平気なの？」

「居場所なら割れてるよ。さっきも言った、《さがみ動物病院》の左斜め下の頂点にあたる場所」

というか、言ってしまうえば今までの僕達は、厳密に言えば迷子ではなかったりする。行き止まってしまったのなら、Ｕターンして来た道を戻ればある程度遡ることはできるのだから。

そういうわけで今、僕と朝井（またまた厳密に言えば僕と僕に半ば引きずられた状態の朝井）は来た道を戻っている真つ最中だった。あれからさほど時間が経っていなかったことも幸いして、なんとか先刻まで刑事２人が言い争いをしていた現場にまで戻ることができた。あれこれ考えるよりも、まずは一番に思いついた案を行動に移してみれば意外と何とかなっちゃう典型だ。

刑事達はいなかった。あのあと女刑事の方がどういう行動に出たのか一抹の興味があつたけれど、今それを優先すべきではないことくらいは僕にだって判断できる。立ち止まることなく通過して、初めに通ったゲートへと向かった。

ゲートは、梅崎市を横に一刀両断する形で流れる梅野川に垂直な形で始まる道路の突き当たりだ。そこにももちろん警備員はいない。僕はようやく立ち止まった。

「街中を全力疾走することになるとは思わなかったよ」

「あ、わり」

肩で息をする朝井に恨みがましい目でにらまれた。あわてて手首から手を離す。

さて、ここから高田はどういう風に進んでいったのかな……。

「わり、じゃない」

パシッ。

離れた手を、朝井が強引につかんだ。

目は依然として厳しい。たしかこいつ、明るい系のキャラじゃなかったっけと思いを巡らしてみるが、いかんせんそんなことに意味はない。この小説の作者はついさっき前言撤回をしたばかりなのだ、信用できない。

朝井がなぜ起こっているのかが分からない僕は、一体どうすればいいのだろう。

とりあえず、謝るか？

「…ごめん」

「私がなぜ起こっているか分からなくて、どうすればいいのか思いつかなかったからとりあえず謝ったでしょ」

「ご名答、その通りなんだけど」

「あのさあ……みつくんって、もっと思慮深い人だと思ってた。考えもなしに行動するなんて有り得ない、常に理論が最優先って感じだと思ってた」

「そりゃ左遷」

「意味分かんないこと言わないで」

一蹴された。

くそっ、僕の唯一のギャグだというのに。

元ネタは悠木さんの二番煎じだけ。

「そうやって、話をはぐらかすのも上手いよね。私が言えることじゃないかもしれないけど、最近のみつくんは変だよ」

「変？」

「ていうか……おかしいよ。今、私達がどういう状況にいるか分かっているの？ 担任の先生が行方不明になったんだよ？ 鏡崎くんも原因不明で欠席してるし、御影さんだって……。こんなの、普通じゃないよ。私、怖い。今まで自分が過ごしてきたこの町に、この世界に、何か……普段とは違う何かが、紛れ込んでいるような気がして、怖い。平和な日々が脅かされそうで、怖い。私達、なんか悪いことしたの？ こんな、こんな仕打ちを受けるようなこと、何かした？ 怖いよ……私の周りが、町が、世界が……私の身近なものが

おかしくなっていく様を見るのが、私はすごく怖いんだよ」

それは。

心の内を吐き出すように、胸につつかえた感情を無理矢理嘔吐したかのように、放たれた。

ああ、やつぱり……朝井も、そうだったんだ。

彼女も、あの日の僕と同じような精神状態なんだ。

日常が壊れていく不安。

非日常に巻き込まれる恐怖。

そんなあれこれを抱えていた、あの時の僕を救ってくれたのは、姉だった。

「それなのにみつくんは……みつくんは、どうしても感じないの？ どうして動揺しないの？ 苦悩しないの、苦悶しないの、苦心しないの？ みつくんもおかしいよ……高田くんも御影さんも、みんなみなおかしいよ……こんな状況で……なんで、平静でいられるの？ 苦しくないの？ 自分の世界が壊れていくのが怖くないの？ 私とみつくん、何が違うの？ 一体何の差異が、私とみつくんにこんなにも格差を与えるの……？ 分からないよ……」

「朝井」

さて。

こうなってしまったのも、√7%くらいは、僕の責任だ。

僕に少しでも責任がある以上、利子がかかるうちに落とし前つけておかなくては。

……出来るだろうか？

数日前まで、同じような心境だった僕に、朝井を納得させることが出来るのだろうか？

いや。

そんな僕だからこそ、出来るのかもしれない。

——なんて。

所詮は自惚れだ。

「残念なことに、僕は今とても情緒不安定なんだよ。朝井が思っ

る“出湊”とはかけ離れた、どうしようもないダメダメダメダメダメ
ダメ野郎だ。いや、ダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメ
ダメダメダメダメ野郎だ”

「……………」

「僕も思うよ——ああ、過去形だ、思ったよ。今、僕の周りで
何が起こっているんだろう、って。何だか、朝井の言い方だと、ま
るで僕が血も涙も胃液もすい液も腸液もない冷酷男みたいに聞こえ
てしまうから、そこだけは訂正しておく。

僕は、脆い^{もろ}。

どうしようもなく脆い。吹けば飛ぶような脆さだ。思慮深いなん
てもつたいたいを通り越して的外れだよ。ダーツで言うなら的の支
柱の根本辺りだ。逆に難しいよ、そんな目で僕を見るなんてさ……
あ、勘違いするなよ、僕は別にお前を安心させようとして、へりく
だって話してるわけじゃない。ありのままを赤裸々に言ってるだけ
だ。おかしい……ね。そうだな、僕はたしかにおかしいのかもしれ
ない。僕にだって朝井と同じように、自分の存在する世界に対する
固定概念みたいなもんはある。それが今となっちゃ、僕と同じくら
い脆く儚く崩れ去ってるよ。現在進行形でな。ところで朝井、現在
進行って、意味は分かるよな？ 今現在も絶えることなく進行して
いる物事の様——そのまんまだ。つまり僕は、現在進行形でお
かしくなっていく世界の中にいる、ってことになるだろ。あー…何
って言うんかね。……………そう。僕は世界に合わせてるんだ。いま
で日常だと感じてきた世界に、合わせていたんだよ。その世界が今、
おかしくなってる。だから僕もそれに便乗しておかしくなっ
てんじゃないか？ 分からないよ、自分が客観的に見てどういう存
在なのかなんて……。でも、それだけは言える。世界が狂っている
んなら、僕だって狂わないわけにはいかない。ぼくは世界に合わせ
て生きている人間だからね、世界に八ブられたらたまらない”

……………何言ってるんだ、僕！！

自分で言ってる理解不能になってきた！ 何を伝えたい、出湊！

何自分で狂ってる宣言しちゃってるんだ!!

……どうしよう。朝井に変質者とか精神異常者とか思われたらどうしよう。

「……………。みつくんは、…遠いね」

「遠い？」

「分かったよ。みつくんが私と違って冷静でいられるわけが」
「今ので分かったのか。」

朝井の洞察力は常軌を逸してる。

「みつくんはみつくんなりに、割り切ってるんだね。狂っちゃったもんは仕方ない、こつちもこつちで勝手にやらせていただきますか、つてことを言いたいんでしょ？」

「僕の長文の苦勞を……まあ、そういうことだ」

「残念なことに、私はみつくんほど吹っ切れないよ。まだ、
“日常”に未練がないでもないから」

「ないんだな」

「ないんだよ。そこ故意に複雑にしてるわけじゃないから確認とる必要もないよ」

「未練……」

朝井の未練。

ぼくたちの世界が完全におかしくなってしまう前に片付けておきたい未練……。

ね。

「のれんの間違いじゃない？」

「うん、シリアスな場面でそんなアホ丸出しの裸子植物みたいなドジはやらかさないから」

「ついでにのれんって、漢字で書くと“暖簾”ってなるそうだな
んかイメージ違うよな」

「究極にどうでもいいよ。アルティメットにインディファレンスだよその情報。あーあ、なんか急激にいろんなことがどうでもよくなつてきちゃったよ……。世界い？ 日常お？ ハッ、知るかってー」

の

「お、おい……朝井？」

僕はまた何か、余計なことを言ったらしい。ていうかまあ普通に考えて“暖簾”の件に問題があつたに違いないんだろうけれど。

朝井は元気になつたらしい。

それならギリギリ、僕としては及第点だ。

朝井はつかんでいた僕の手を、注意を促すように軽く上下に振る。
「何やつてるの？ さつさと高田くんとこに行かなくちゃならないんじゃないかつた？」

「え？ ……あ、…だな。うん」

僕は気持ちを切り替える。

今集中すべきは、物語のクライマックスをどう彩るかだ。

僕にできる最大限の努力をして、最善のフィナーレを迎えさせてやろうじゃないか。

狂っちゃったもんは仕方ない。

こっちもこっちで——勝手に、やらせていただきますか。

その頃——。

「あ、京ちゃん？ 僕だよ僕。え？ うん、そうだよ。ここから動くわけにはいかないもん。大事な“餌”もいるしね。といつても……その“餌”、半分くらい食べられちゃったんだ。あ、いや違うよ。僕がやったんじゃないって。……莉子がちよつと、ね……。でも僕に未練はないよ。だって莉子は、彼を使って僕に最大限の愛情表現をしてくれたんだもの。すつごくハッピーだよ。……え？ ……分かってないなあ、京ちゃんは。愛は人を殺さない。人を殺すような愛は狂愛さ。僕らの愛はそんな殺伐としたものじゃない、花の蕾の様に清らかで純粹なんだ。…笑ったね？ 今京ちゃん笑ったよね

？ ショックだなあ、京ちゃんはそんな人じゃないと信じてたよ。
……あれ？ 京ちゃん？ 聞こえてる、京ちゃん？ ……どうしたのかな。せっかく電話してあげたのに、本来の目的を果たさないままに会話拒否？ 通話料金食うよ？ 携帯の通話料金は高いよー。
パケホー入ってるから大丈夫とか、そんなことはないんだよ。無駄遣いには厳しいのがキャンペーンなんだから。……どうやら本格的に無視する気みたいだね。じゃあいいや、先にネタバレするのも癪だから、こっちで勝手にやっちゃうよ？」

佐上は携帯を通話状態にしたままテーブルに置いた。

「電話してあげて？ 京ちゃん待ってるよー」

「……………」

狂ってる。

こいつ……ヤバイ。

こいつと関わりたくない。

そんなことばかり、ずっと考えていた。

俺の悪運も、これまでか……。

そんなことを、たった今考えた。

目の前の人間は、一体何があったんだろう。どんなことがあって、ここまで堕ちてしまったのだろう。

分からないだけに、底知れぬ不安が消えることはない。

「いいの？ 今なら、僕の負担で辞世の句を後世に残すことができるよ？」

「いいや」

久しぶりに口を開いた。

「いいんだよ、俺はそんなこと」

「……あー、そういう腹ね。君はここから逃げようと。無駄無駄、考えるだけ無意味だよ」

「ん？ 分かってないのか、もしかして」

「は？」

なら、わざわざ代名詞で分かりにくくする必要なかったな…。

辞世の句だの逃げようだの、そんなことはもう、考えない。

俺の精神も……そろそろ、ガタがきた。

「佐上、お前はとんでもないミスをしちまったかもしれないな」

「ミス？ ……君、さっきから何をわけの分からないことを――」

――

「分からないのはお前だけだ」

こいつはヤバい。

狂ってる。

関わり合いにはなりたくない。

そんなことばかり、俺は何を考えていたんだろう。

全く何の進展もない、無いものねだりの願望を。

いつまで理屈こねてるつもりなんだ？

「お前は、鯛で海老を2匹釣っちまったようだ。……ついでに、甘

海老と伊勢海老もな。その海老を追っかけて、鮭が2匹やってきた

ぜ。さあ……どうする？ 釣り人さんよ」

結局。

僕らが日常だと思ってきた今までの日々は……所詮、錯覚でしかなかったのだ。

あーもう、話が進まないいい!!!!

イライラ。書いてるこつちがイライラ。

今回の具体的な動き、みつくと日向(↑朝井)が行き止まりからゲート前に戻っただけだぜ? 振り出しに戻っただけだぜ? みつくんはみつくんでまとまりのない意見を述べてるしよー…ああ、spring完結は一体いつになるんでしょう(悩)。

次回は長くなります。今回はそれほどでもなかったですが。次回はいろいろ覆くつがえされるので。

今回、結構グロテスク入ってるかもです…。
読む時は、一応、心の準備を！

「今、僕達は さがみ動物病院 の南西裏口へと向かっていた。高田から電話があったのは、もう30分近く前のことになる。一体あつちサイドで何が起こっているのか、僕には全く見当がつかなかった。それだけに不安で、ただ一心に走っていた。僕の後ろで走る超プリティーガール日向ちゃんは、何も言わずにただ黙々と駆ける。道順は合っているだろうか。また迷子になったりしたらどうしよう。おそらくもう時間はあまり残っていない。無駄足をとっているひまは僕らにはないのだ。——こんなもんでどう？」

「一箇所以外はOKだ」

「えー」

「えーじゃない」

「B」

「Bでもない！」

「C」

「Cでもない！ DでもないしEでもない！！」

「ちつ。ノリよくTまで行こうと思ってたのに」

「どれだけの行数を無駄にすると思ってたんだよ……それにTって、あともうちょい頑張ってZまで行けよ」

「Tで終わらせるところが深いんじゃない」

「…僕には到底理解できないな…」

「理解できなくて結構。誤解されても困るから」

「ッ……！！」

というわけで。

冒頭の通り、僕らはゲートから さがみ動物病院 の南西裏口へと、カンを頼りに進んでいた。高田の話によると正面入り口は鍵がかかっているらしい。確証はないが、南西裏口なら、少なくとも高田と通話していた30分前現在は開いていたわけだから、かすかに

望みはある。

「これ以上走りたくないんだけどな……」

「間に合う速度で歩いてくれるんなら文句は言わない」

「早歩きって、ある意味走るより体力使うと思わない？」

「同感」

「……うわ、酷ー」

「何とでも言ってくれてかまわない」

「今の、“酷ー”と“非道”をかけてたんだよ」

「あんま変わらないだろ」

なんて会話をしているうちに、さがみ動物病院 に近づいてきた。

だからといって、僕達が行き着く先が南西裏口であるとは限らない。間違った場合に無事引き返せるように、道順はインプットしてあるから問題はないけれど、何度も往復するとなると僕の体力、しいては朝井の体力にも限界がきてしまう。それは避けたかった。

神は僕達に味方した。

「…見えてきたみたいだ」

さがみ動物病院 左下の先端から移動する際に、僕は南西裏口にあたる場所に目印として特徴的な形をした石を投げ込んでおいた。僕らがいた場所は下よりの左下先端部分で、南西裏口があるのは左よりの左下先端部分だったためだ。対頂角に位置していた、ということ分かりやすいかもしれない。

進行方向には、鉄製の扉がたしかにあった。間違いない。
が。

扉の横には、奇妙なものが立て掛けられていた。

昔、祖父の住む雑木林の中で見たことがある……鮫の歯のような鋭い刃、嫌に鮮やかな朱色のボディ、単調なフォルム——。

「…チェーンソー、ってやつか？ あれ」

「ん？」

数秒遅れて、後ろから朝井が追いついた。僕の真後ろから上半身

のみずらして、それを凝視する。
固まった。

「……………」

「な、何。どうしてそこで黙る？ 嫌な思い出でもあるのか？ 指切ったとか…」

「……みつくん、視力は？」

「両目B」

「中途半端だね…もつと良くするか悪くするかしなよ。あーでもみつくんには眼鏡は似合わないな」

「悪くなる前提？」

「Bだつたら見えなくもな……くも、ないかもしれないかな。じゃ、もうちょっと近づいて見てみなよ」

「？」

言われるがままに、チエーンソーと思しき機械に近寄る。

特におかしいところはない気がするけれど。

……いや、待て。

この……刃の部分にこびりついた、赤褐色の汚れは何だ？
飛び散った紅の液体くれないは何だ？

……………この。

刃の先端に引っかかるようにして付着した、茶褐色の物体は……。

「ハイ、自主規制」

いつの間にか、全身が震えていた。

寒くもないのに、怖気おそけが走る。

そんな状態で聞く朝井の声は、異常と言っても過言でないほどに冷淡で平坦で……。

何とか理性を保つことができた。

「うん。みつくんが言わんとするところは言わずともかな、少なくとも私には伝わったからそこら辺にしておいてよ。この小説、R15のタグは付けられてないんだって、一応」

「……………」

「まーつまり……要約すると、この扉の先では“そういうこと”が起こってるってわけ。そしてその中に——高田くんがいるってわけね」

そういうこと。

…それは、今現在聞く限りにおいて、どうしようもなく非現実的で、どうしようもなく非日常で。

救いようのない、現実。

逃れようのない、日常。

変わっていく僕達の環境の中で、特に異彩を放つ言葉だった。

立て掛けられたチェーンソー。

扉。

その先に待つものは……一体、どれだけのものだというのか。

僕がそんなことを思っているなんて露知らずといった表情で、朝井は先を促した。

「さてと……みつくん。立ち止まってないで、早いとこ中に入った方がいいんじゃない？ まさかとは思うけど、怖気づいたりなんて

」

「あれ？」

刹那。

朝井の表情が、再び固まった。

今回は、僕も同様に。

………全く。

こういうことは、事前に伝えておくのが当然だと思う。

いきなりこんなサプライズ………されたこっちの身にもなれっただ。

もう、驚かない。

驚いたりなんてしない。

驚くことに慣れてしまったから。

ハン。どうした？ かかってこいよ。そんな演出をしたところで、僕はもう驚かないぞ。

さあ。

さっさと正体を明かせよ――

「カギカッコ」。

「なーにやってんだ、お前ら？ こんなところで。あー、俺はというと、恥ずかしながら道に迷っちゃったりしたんだよなーカッコ笑い。でもお前らと合流できたんなら結果オーライ。で、ここはどこなんだ？」

高田寛人は。

場の空気を微塵も理解していない底抜けに爽やかなスマイルを浮かべながら、僕達に問いかけた。

「追加。海老、もう1匹」

「ここは寿司屋でも魚市場でも築地でもないんだけどね……」

「さらに追加。テッポウウオ1匹」

聞く耳持たず。

一方的にまくし立てる男に、佐上はため息で返す。
誤算だった。

彼の計画の中でダントツを誇る大誤算だった。

取り返しがつかないどころの話ではない。

見知った顔だったからと、油断していた。

まさかこの男が、こんな人間だったなんて……。

いや、普通ならば考えつかない。

この男は……自分なんかよりもずっと上手く、“本当の自分”を隠してきていたのだ。

同じ境遇の佐上でさえ、見破れないほど巧妙に。

狡猾に。

「ハッ。おいおい。今更驚いちゃってんじゃないよ。突然の来訪者が俺だと知って驚いたか？ 場面が薄暗かったのが災いしたな……運が悪いこつたねえ、ホント」

「……あなたはたしか教師だね？ こんなところで生徒蔑んで楽しい？」

「楽しかねえさ。まったく楽しくなんかない。それもこれも、悪いのはあのウツザツツてえ非常勤講師の野郎だ」

突然、男の口調が怒気を含んだものに変わった。

「あの下種野郎が！！ 誰のおかげで今まで出世してこれたと思つてやがんだ！！ ちよつと英語ができるからつて調子に乗りやがつて、俺はああいう他人に依存して自分の地位を上げようとする奴が大ッ嫌いなんだよ！！」

男は。

みさおよしひと

操善人は、湧き上がってくる怒りを抑えようとせず虚空に怒鳴りつける。

それを聞いている佐上が、どんな表情をしていたのかなど、知りようもないのだろう。

1年余り、自らの担任として親身の指導を施してきた、尊敬に値する教師が、酒に酔つ払つたかのように、大人気なく他人の悪口おとなげを言うその姿を見て。

佐上が、何を思ったのかなど。

「あなたがここににいる時点で、いろいろと新事実が明かされてしまつただけ」

「ああ？ 新事実？」

「あなた、事実上、行方不明、つてことになってるんだよ。8日から」

「……ああ、そうだよ」

操は一転、態度を改め、今度は妙にダウナーな調子でばやいた。

「何もかもが嫌になつたんだよ……平社員みてえにヘコヘコと頭下

げながら肩身の狭い思いして職員室にいるのも、自分の本心を絶対的に表に出すことなく、全くの別人格でいることも……好きでもねえ中年女と同じ釜の飯食うのも……何もかもがよ」

「……………何があつた？」

「ああん？」

「あなたに何があつた、って聞いてるんだよ。肩身の狭い思いだとか、別人格でいるだとか……立場上、後者に限ってその気持ちは僕にも分からなくはないけれど、普通に生きていれば、そこまで自分を偽らなくても生きていけるんじゃないのか？」

「いいよなあ、餓鬼はよお……………」

「？」

「なあーんも考えずに、その日その日をその場しのぎで生きていけりやあ明日がある。大人つてえのはな、そういうわけにやあいかねえんだよ」

「ふうん……。いろいろ事情があるってことだね」

「簡単に片付けろよなあ。…………おめえよお…………」

不意に。

身体が宙に浮いた。

突然、床から足が離れたことに驚く佐上。

「たとえば……………ここでもうして、俺が生徒のお前を殺したとするよ」

「…なッ……………おい…ッ」

操が、佐上の首をつかんで上にやっていた。

まるで何の罪悪感もない、感情のない目で。

「生徒を殺した俺は、理由関係なくお陀仏だ……………たとえば、正当防衛だとしてもな。結局は殺した方が悪いんだ」

操が手から力を抜く。

解放された佐上は、その場で咳き込んだ。

そんな彼を、操は相変わらぬの無表情で見つめる。

「…ッ……………とりあえず、あなたは無罪放免じゃ済まないだろうね……………」

「何のことを言ってるのかさっぱりだなあ、おい」

「とぼけるのも大概にしなよ…あなたは」

「堕ちるところまで堕ちてしまった、墮落しきった担任を、非情な目でにらみ。」

佐上は言った。

「2人の警備員のうちもう1人を……無残にもチェーンソーで八つ裂きにして殺してしまったんだから」

操は。

笑った。

「自虐の笑いではなく、ただ純粹に、面白おかしくてたまらないといった風に。」

笑っていた。

狂ってしまったかのように。

「お前もやってみるか……？ まだ死後硬直、始まってねえだろうからな。チェーンソーなら裏口んとこに戻しといたし、死体ならドア開けりゃあ運命の再開だ」

「遠慮しとくよ。僕は猟奇殺人犯にはなりたくない」

「殺人犯にやあ、なつてんじゃねえか……。警備員共の片割れ。ロップで首絞めて吊るしたの、お前だろ？」

「よく分かったね」

「同じ殺人犯同士、以心伝心でもはたらいてんじゃねえか？」

面白くもない冗談で乾いた笑い声をあげる操。

「同士、ってねえ……。一まとめにするのはやめてくれない？ すごく一緒にされたくないんだけど」

「同じだろ。お前は絞殺、俺は斬殺。殺したことにゃあ変わりねえ」
「およそ笑いのネタとは程遠い会話で笑うことができるこの人物は、一体どこまで壊れてしまっているのだろう。」

ふとそんなことを考えた佐上は、早々と思考を打ち切った。

考えるだけくならない。

「で、もう1つ謎があるんだけど」

「何だよ同類」

「……………。あなたが持ってた携帯……………誰の？」

「知らん」

「……………は？」

「落ちてたもんを勝手に拾ってきただけだ。ぶっちゃけ、さっき電話があつた時、焦ったぜ。さすがにばれると思ったが……………ここら辺、電波悪いだろ」

さがみ動物病院 付近。

病院には、数多の医療器具が所狭しと設置されている。動物病院であつたところで、本質的に違いはない。

しかし、その程度で携帯の電波が悪くなるなんて、いささか大げさ過ぎはしないか？

佐上がそう意見しようとした、その時。

聞き覚えのある着信音が、愉快的メロディーを奏で始めた。

言うまでもなく、操が拾った携帯の着信だった。

「噂をすればなんとやら……………とはよく言うが、近頃思ってたがこのなんとやら」の部分ってほめかさずに言うところなんだ？」

「知らないよ。さっさと出れば」

「んだよ、冷てえやつだな」

「温かく接する理由がない」

「フン」

操はふて腐れたように鼻を鳴らし、携帯を取り出した。

画面を開いて——硬直する。

その様子を、覚めた目で佐上が見つめた。

「……………どうしたの？」

「画面が……………割れてる」

液晶画面には、大きくY字の亀裂が入っていた。

「……………」

「……………」

「じゃあ、さっきの電話は、高田が出たんじゃないってこと？」

「そういうこと。ってか……失礼なやつだな。勝手に人の携帯に出やがって、デリカシーってもんがないのかね」

「携帯にセキュリティロックもかけないお前が言うことかよ……」

「みつくんも抜けてるね。いくら電波が悪かったからって、友達の声を聞き間違えたりする？」

「まだ2週間ちよつとしか付き合いないだろ」

「うわ……。みつくん、それ最低だよ。友達の基準は時間じゃないよ」

「入学直後に幼馴染を裏切った朝井が言えることじゃないな」

「他人の忘れたい過去を無断公言するなんて、デリカシーがないのはみつくんの方じゃない？」

「言い争いが勃発しそうになった僕と朝井の間に、高田が割って入った。」

「ハイハイ、そこら辺にしとけよ。今はそんなことに時間使つてられるほど暇じゃないだろ」

「高田くんを捜すためにどれだけ時間割いたと思ってるの？」

「それは悪かったって」

「なぜか高田もとばつちりを受ける。」

「こいつもこいつで、携帯が見知らぬ誰かに奪われたというのに、落ち着いてるな。」

「で？ どうするのこれから。さがみ動物病院 には、もう用なしでしょ。高田くんも見つかったことだし」

「な、ちょ、待てよ！」

「強引な朝井に、高田は猛反発する。」

「いくらなんでも酷いだろ！ 俺の携帯に出た誰かさんの話だと、

俺の携帯は、その動物病院にいる誰かさんが持つてんだろ？　ってことは、中に入れば俺の携帯を取り戻せるじゃねえか！」

「面倒だなあ。1人で行ってきてよ」

「落としたのは自分なんだから、自分で落とし前つけろよ」

「お前からこういう時ばっか意気投合してんじゃねえよ！　ていうか、よくそんなこと言えんな！」

高田はこれ見よがしに、扉の横に立て掛けられたチェーンソーを指さす。

「チェーンソーに、明らかにアブナイもんが付着してんだろぅが！　！　そんな危険地帯に、俺を1人で行かす気か！！　そこまで冷たい人間だったのかよ！！」

「お前を捜すことによって生じたタイムロスを埋めるつもりで行ってこい」

高田は動く気配を見せない。

どうやら怖がっているようだ。

さっきから横着してばかりで、自分から動こうとしない。

まったく、面倒なやつだな……。

僕は高田の手をつかむと、扉の方へと引っ張っていった。

「ちよ、何すんだよおいっ」

「勇気のないお前に、優しい僕が背中を押してあげよう」

「いいからそういうの！！」

構うもんか。

僕は扉のノブを握り、ひねる。

扉が開いた。

「ほら、さっさと行け」

高田の抗議を見て見ぬふり聞かぬふりして、文字通りドアの向こうに向かって背中を押す。

「冗談きついつて！　マジふざけんのもいい加減に——！！」

高田の声が止まった。

？

僕も背中を押すのをやめて、扉の奥を見た。

「
2人揃って硬直状態に陥ったのを見て、朝井もいぶかしみながら
扉の奥を覗き込んだ。」

「……………」
絶句する。

扉を開けてすぐ。

大きな血溜まりの中、たゆたうように荒々しく分解された警備員の死体が、日の光を浴びてはつきりと目に映し出された。

前書きでも書いたけど…うん、ちょっとグロ入っちゃいました。

えへへ。すみません。怒るなら操先生に怒って。あんな殺し方した操先生が悪いんだよ（責任転嫁はお手の物）。

今回も、いろいろ明らかになった気がします。終わるのはいつになることや…少しずつでも、確実に終わりに近づいているんですよこれでも。遅いけど。読んでイライラするほど展開遅いけど。

今回は全員集合します。わりと出番のなかったあの人や懐かしの（ってほどでもないけど）あの方、さらに2人も登場です。

.....。

..... どうやら.....。

..... なんとか..... 生きていられたらしい.....。

とはいえ、頭にはまだ鈍痛が残っている。

..... あれ.....、右脇腹が痛い。ああ、すごく痛い。今まで鎮痛剤が何かで痛み止めをしていたらしい。..... 効果が切れて、目が覚めたようだ.....。

そつと..... 目を、開けてみる。

場面に変化はなかった。

身体を動かす気力はまだなかった。全身に、痺れるような感覚がある。頭を打たれた時の衝撃が、まだ体内に張り巡らされているみたいだ。

迂闊に動かない方がいいな.....。

そう判断した、その時。

視界に、全ての元凶が映った。

「..... 莉子？ いる？」

僕は、唯一明かりを灯らせている部屋のドアを開けた。

莉子は昨日、錯乱状態に陥っていた。油断していた僕も僕で非があるのは確かだけど、まさかろくに会話もできないような人見知りの莉子にあんな真似ができるなんて、驚いたのはこっちの方だ。

幸い、大事に至ることはなかった。といっても、本来ならば急患で病院に運ばれていてもおかしくない重症だ。致命傷は負っていなかったはず..... だと思う。暗がりの中起こったことなので、僕も全てを把握できたわけじゃない。

第一に、なぜ莉子があんなことをしたのか。

それが分からない以上、本人に話を聞くしかない。

「……………」

莉子は、部屋の隅で小さくなつて震えていた。

自分があの時、何をしてしまったのか——最悪、人殺しとなつてしまつていたかもしれない事实に、莉子は今、直面していた。

……こりゃ、下手に話題を振らない方がいいかもしれない。今だつて錯乱状態が治まつているとは限らない。変に刺激して僕まで二の舞になるようなことがあつては元も子もない。

ここは、そつと安心させるように、そばにいてあげるのが得策か。

「……気は、静まつた？」

「……………」

初めて、莉子がこちらを振り向いた。

莉子の目に、もう涙はなかった。呼吸も落ち着いているし、外見적으로는問題はなさそうだ。

内面がどうなつてしまつたかが、僕としては気になるところだけれど。

それを聞くために、ここに来た。

「……………話を聞いても、いいかな？」

莉子はゆっくりと頷いた。

話を聞くとはいつても、僕は今まで莉子の声を聞いたことがない。形式的には僕が莉子に質問をして、莉子には肯定か否定かで答えてもらう形になる。

普通ならば。

…現在、僕には莉子の心が全く分からない。錯乱状態を起こすほどの精神異常が莉子に起きてしまったことさえ、未だ信じがたいくらいだった。

喋ることができない莉子から、直接話を聞くことは不可能だ。

なので僕は、B5サイズのノートを持ってきた。これに、莉子の心を書き綴つてもらふことにしたのだ。言葉で伝えられないのなら

ば、文章で表現すればいい。現に、僕と莉子が付き合い始めた時も、莉子から手紙で告白してきた。感情表現豊かな莉子なら、今の自分の気持ちを上手く文章に変えてくれるはずだ。

「何であんなことをしたのか……これに、書いてくれる？」

僕は莉子に、ノートと筆記用具を渡した。

莉子はテーブルの上にノートを広げた。ペンを持って、いざ書くとしたその刹那、手を止めて僕を見た。

「……分かったよ。書き終わったら、廊下に置いて」

僕が同じ空間にいては、書きづらだろう。そう判断して、僕は部屋から出て行った。

「長いトイレだったな」

第4診察室。

引き戸を開けるなり、操の声が僕に向けられた。

「僕も暇じゃないんでね。この中にはあなたの他にも2人、客がいる」

「ああ？　そういうことだ、そりゃ？　立ち入り禁止じゃねえのかよ？」

「例外だ」

「例外ねえ……。怪しいな」

「あなたほど怪しい存在じゃないよ。僕の個人的な都合だ。……それを言うなら、あなたはいつまでここににいるつもり？　迷惑だから帰ってもらいたいんだけど」

「教師に向かつてその口はねえだろ」

「今更何を。人殺した時点で教師失格、神職落第だよ」

「——ここから出るつもりはねえ」

「は？」

突然言い放つと、操は脈絡も無く部屋を出て行く。

「ちょ、どこ行くだよ。勝手に……」

「んだよ、ビールの1つもねえのかよここは」

どこへ行ったかと思えば、操は職員以外立ち入り禁止の休憩室をうろついていた。

どうやらアルコールが切れたらしい。さっきから酒臭いと思っていたら、ここに来る前にかくくらっていたのか。

案外、ここに来たのだって酔っ払っての衝動かもしれない。

だとしたら、それこそ迷惑な話だ。

「ないよ。病院にアルコール成分を含むものなんて置いてるはずないじゃないか。ましてここは動物病院だよ」

「チツ、使えねえ」

苛立たしげに舌打ちをして、操はまた勝手に院内をうろつきまわる。

「動き回らないでくれないかな。プライバシー保護とか考えたことがある？」

「公共施設にそんなもんあるか」

「公共じゃないよ、私営の病院なんだから」

「んなことはいいんだよ」

「いい加減、帰れ。こんなところに来られても迷惑なんだよ。出て行かないんなら、警察呼ぶぞ」

「呼べるもんなら呼んでみろよ。捕まる覚悟があるんならな。言ったら、ここから出るつもりはねえって」

「……こいつ……どこまでも最低な人間だ。」

「おいお前。ないんなら買ってこい」

「…何を？」

「聞くまでもねえだろ、ビールだよビール」

「未成年相手によくそんなことが言えるもんだね……」

「今時んなこと守ってるやつなんていねえっての。うちのクラスでもいんだろ、酒だのタバコだのやってるやつ」

「一緒にしないでほしいよ」

「お前こそ何言ってただよ今更。未成年の飲酒喫煙と未成年の人殺し、どっちが重罪だと思ってたんだ？ お前だって人殺した時点で、

「お前が今まで忌み嫌って来たやつら以下の存在なんだぜ」

「……………」

「…そんなこと……分かってる。」

「僕が、人としてやってはいけないことをやったことくらい、そんなこと重々承知してる。」

でも、僕は。

僕は、そんな軽い気持ちで人を殺したわけじゃない。

簡単に人なんか殺せるもんか。

僕は——僕は、京ちゃんのために殺したんだ。

京ちゃんの罪を晴らすために。

全ては京ちゃんのための犠牲だ。

「あなたに、そんなことは言われたくない」

「何だよ、反発か？ まあ俺だつて人のこと言えるほど善良にやあ育つてねえけどよ、お前の場合、時期が早すぎたな。そんな歳で人殺したら、残りの人生ウン十年棒に振ったようなもん——」

言いかけて。

操は動きを止めた。

「……どうした？」

「……聞こえねえのか……………」

「は？ 何が」

操は半ば震えた声で僕に怒鳴りつける。

「てめえ！！ マジで通報しやがったのか！！」

「……！？ ……待てよ……一体何のことだか」

「じゃあ、何でサイレンの音が近づいてくんだよ！！」

—————！！

そんな……ない、一体……誰が……莉子……？ いや、そんなはずはない、莉子が警察に通報なんてできるはず……じゃあ……彼が……？ ……それもない……彼は今重傷を負っているはずだ……第一携帯も持っていないのに通報できるわけがない……。

一体、誰が……！！！！

その頃――。

「全くお前は本当に酷いやつだなカツコ笑い。死体を見ただけでゲート前まで全力疾走することないだろカツコ笑い。人が死んでんだぜカツコ笑い。少しは死を悼むとかそういう感傷に浸りやがれよ力ツコ笑い」

「内面がにじみ出てるぞ、歪^{いびつ}に」

「いつそのこと2人揃って黄泉の国に行ってきたら？ 片道で」

「遠回しに“死ね”って言う有効手段第2弾かこのヤロ」

「3回目のカツコ笑いはマズいと思うな。なんていうか、非人道的とか非道德的とか人としてどうなのとかいやむしろa b n o r m a l d i a l y 的にどうなのとか」

「カツコ笑いなめんな！！（笑）じゃあ活字だと情景描写の一環としか思われないんだよ！ だから『本人もちゃんと云ってるんだよこの部分』ってわざわざ伝わるようにカツコ笑いを」

「あ、ごめん。それ、高田くんのキャラ作りの一環だと思ってた」
「酷え！」

「僕も同感」

「さらに酷え！」

「ていうか警察まだかな？」

「急な話題の転換！！ 要予備軍！！」

僕達が無意味な会話を（いや、まさしく無意味だ）している間にサイレンが聞こえてくる、というシナリオだったのに、やけに遅いな国家権力。

まあ、死体を見たその直後にゲート前まで全力疾走した僕が言えることじゃないかもしれないけれど。だって驚くじゃん。ドア開けていきなりバラバラ死体見たら驚くじゃん普通。逃げたくもなるじゃん。

対照的に、恐怖心を微塵も感じさせない冷静な目で死体を眺めていた朝井は僕の中では化け物だ。あんなもの視界に入っただけで細胞分裂が起こってもおかしくないほどショッキングなはずじゃないか。それが何をまじまじと見つめてやがんだこの女。どうか頭のネジが外れてるんじゃないのか？ ていうかこの人本当に人間？ 死体見て冷静でいられる中3女子って結構アブノーマルじゃございませんか？ うん朝井、お前ちょっと感田先生に解剖してもらえ本格的に。うん。

……以下の文章を会話文調で本人に言ってみたら『人間やめた方がいいんじゃない？』と真顔で言われた僕の失敗談はともかくとして、警察がなかなか来ないのは困る。ここに死体があったということとは、院内にいる人物が殺した可能性が大分高まる。通報したのが僕らだとばれでもしたら……最悪、この警備員とごちゃ混ぜになるかもしれない。ああ、恐ろしい。

「で、通報したはいいいけど……どうするのこれから？」

朝井が場を取り持つように話題提供する。

「問題はそれだ。僕個人の意見を言わせてもらうと、全力で立ち去りたい」

「そりやま、通報したのは他ならぬ出の携帯からだもん……。犯人にばれたら真っ先に殺されんのが出だろうな」

「物騒なこと言うんじゃないやねえよ道連れにしたるかこのトラブルメーカー」

「メーカースト！？」

「でもメーカースト高田の携帯が院内にあるのも事実だし……」

「何だよメーカースト高田って！！ 芸名か！！」

「そこなんだよな。僕はメーカースト高田の携帯なんて心底全く全身全霊どうでもいいんだが……」

「私も、メーカースト高田の携帯なんか烈火の炎で焼かれていても全然気にならないんだけど……」

「俺の携帯の物権全否定？ てか定着しちゃったのメーカースト高田

って」

「お前の意見を聞かなくちゃならないんだろうな、ここは」

「そうだね」

「え、あ、俺？ そ、そりやまー……携帯は、あれだ、個人情報だつてあるし、取り戻せるもんなら取り戻したいけどよ。でもお前らがそこまで俺の携帯に無関心だつてんなら俺もいっちょ腹割つて……」

……つて、いきなり真面目な話題振るなよ！ やりづらいだろ！」

「ああ言えばこう言う、こう言えばああ言う、ああやって言えばこうやって言う、こうやって言えばああやって言う、あのように言えばこのように言う、このように言えばあのように言う」

「バリエーション豊かだなオイ」

「仕方ないな……本人も携帯はいらないって言ってるし、やっぱトングズラするか」

「結局は自分の意見優先か！」

「いや、だつて、事実いらないんだろ？ この先には殺人容疑者だつているんだし、誰だつて危ない橋は渡りたくない。変に誤解されて僕の立場が悪くなるのも嫌だし、警察の事情聴取とかマジだるいし」

「後半不純だぞー理由が」

「みつくん」

唐突に、朝井が僕と高田の応酬を止めた。

「ちよつと黙つて。………やっぱり」

「ん？ ど、どうした？」

「誰か来る。おそらく、殺人容疑者」

言われて、そつと耳を済ませてみると。

——カツ……カツ……カツ……カツ……。

たしかに、足音が聞こえる。

……それも、1人分じゃない。

2人いる。

「……おい……ちよつと待てよ」

高田が、さっきまでと様子を一变させて、青い顔で聞いてきた。足音は一定の速度で、確実に近づいてくる。逃げられない。

「俺の携帯……殺人犯が、持ってるって……こと、かよ……」
「あ？」

現れた。

扉の向こう……暗がりから。

聞き覚えのある声が。

「どういうことだよ、そりゃ……じゃあこの携帯、こいつのもんだつたのかよ……」

「残念だったね。もう警察も呼ばれちゃったっぽいし、捕まるのも時間の問題だよ。画面が割れちゃってるとはいえ、持ち主が分かったんなら、一応返しておくべきだと思うよ」

「つつても、返り血が染み込んでバグっちまってるけどな。さっきの着信だって途中で切れちゃったよ。もっともこれに限っちゃ切ったのはあっちからだけだな」

「そういえばさっきの電話、誰からだったんだ？」

「ああ？ たしか、大原とかいうやつだったけど、出てすぐに切れちゃったよ。イタ電かけ間違えだろ」

どうやら。

今回の事件の黒幕は、僕がよく知る人物達だったらしい。

……何たる必然。

こんなところで発見することになるうとは。

「お久しぶりですね。操先生」

「あ……出か？ その隣にின்のは、ああ、朝井か。てめえら、こんなとこで何やってんだよ。さっさと帰……」

止まった。

彼は、油が切れたロボットののように、ギチギチと音をたてそうな

ぎこちない動きで、僕と朝井を二度見した。

「……見たな……?」

「ああ。謎が解けたよ。じゃあ、通報したのは君達だったのか。全く、とんだ迷惑を引き起こしてくれたよね。おかげで捕まっちゃうじゃないか」

それぞれ反応の違う2人。

操善人。

佐上惇。

この2人が——全ての、元凶だ。

………僕にとっての元凶は、彼女だけだね。

さっきのサイレンの音が気になったけど、一度聞こえてからはずっと音沙汰なしだし、たまたま近くを通りかかっただけなのかな。

それにしても、驚いたよ。

操先生が——御影さんの教え子だったなんてね。

操先生はそろそろ40代も折り返し地点の年齢だ。考えられなくはなかったけれど……。イライラしてるからって、何でもかんでも暴露すぎだよ。こっちはなるべく平静でいたいのに……。

この事件に操先生が関わってるなんて意外だったけれど、おそらく直接の関わりじゃないな。何でここにいたんだろう。

ま、操先生に至っては、本当にくだらない真相だったな。多分、最初は本当に、学校生活が嫌になって失踪したんだろう。けど、臨時でやってきた非常勤講師の御影さんが自分よりも評判がよかったから、嫉妬して……。

ほんっと、くだらない。

……また、右脇腹が痛んできた。こういう痛みだと、気絶できないからつらいな……。死ぬことはないだろうけど、内臓とか傷ついてたら厄介なことになる。刺し傷と推測したのは間違いじゃないみたいだ、さっきから血の匂いが鼻を突く。

だとしたら、やったのは。

目の前にいる彼女だ。

僕の血が滴る包丁を振り回して、涙を流している彼女だ。

どうしたんだろう。

テーブルで、佐上くんからノートを受け取ったかと思ったら、彼が出て行ったとたんに包丁でノートを切り裂いたりなんかして、ページの破片が僕のところへ飛んできたよ。

何で。

どうして、『ごめんなさい』ばかり書いてあるんだ？

誰に謝ってるんだよ。

僕か？

佐上くんか？

……考えるだけ、意味がない。

でも、1つだけ分かったことがあるよ。

僕を包丁で刺したあと、頭を殴ったのは彼女だと思っていたけど、違った。

彼女は人を殴ることなんてできない。

利き手を、包丁で切っているんだから。

僕を殴ったのは、おそらく佐上くんだね。

彼女がやったことを、僕に気づかれないようにするためだったんだろうけど、惜しいな……。

なめないでほしい。

僕じゃなくなつて、今の彼女を見ていれば――。

全てが、彼女の本心じゃないって、すぐに分かるのに。

「あなたの方向音痴には頭が下がりますね」

車の中で、新米刑事——佐野は、隣で黙々と運転をする上司に言った。

だからあれほど自分が運転するといったのに、この人は『新米にパトカーの運転など任せられません』の一点張りで、譲ろうとしな
いんだもんな。

佐野は聞こえよがしにため息をついた。

「知ってました？ 佐野氏がため息をつく毎に、私の運転が粗野にな
っていつてるんですよ」

「何のポイントサービスですか。通報受けてから、大分時間たつて
ますよ。塚本さんだけじゃなく、私まで怒られちゃうんです。しっ
かりして下さいよう……」

「あなたがため息を10分間我慢する毎に、私の運転がため息1回
分還元されます」

「その面倒な制度を撤回して下さい。いくらカーナビがついていな
いからって、時間かかりすぎですよ。いい加減代わってください。
それで全てが解決します」

「さがみ動物病院 南西裏口でしょう？ それなら今向かってる
最中です。余計な口出しは1回につきため息3回分です」

「だから何の制度なんですかそれ」

「オリジナルです」

「でしょうね……」

この人と会話をしても、疲れるだけだ。

そう判断した佐野は、迅速に現場に着くことを諦め、事故が起き
ないように祈っていた。ため息をつくのもダメ、余計な口出しをす
るのもダメ。それで運転が粗野になって事故など起こったりしたら
たまらない。今の自分にできることは、祈ることだけだ。

眼を閉じて両手の平を合わせる。

——無事に現場に着けますように!!

強く祈願して目を開けた、その瞬間——。

佐野は見た。

進行方向の道路の突き当りから、中学生らしき少年と男性が飛び出してくるのを——!!

「塚本さん、前、前前前前前前——!!!!」

キキイイイイイ——!!

耳をつんざくブレーキ音と少年の悲鳴が、歪なハーモニーを奏でる。

「……し、死ぬかと、思、った……」

自分の刑事人生が。

佐野は急停止した車から飛び出すと、少年達のもとへ駆け寄った。少年は眼前に迫った車のボンネットを見つめていた。男性の方は半ば放心状態に陥っている。両者とも怪我はないようだった。

安堵する佐野。同時に、平然とした表情で運転席に座る女刑事に対する怒りが湧き上がってくる。

しかし、今は彼らの方が優先だ。

佐野は少年に駆け寄った。

「だ、大丈夫かい!？」

「……あ、は、ハイ………って……パトカー!？」

少年の反応は、ある意味当然のことだった。

交通整備を取り締まる警察が接触事故（未遂）を起こすなど、とても考えられることではない。

それは佐野だって同感だ。

——どうして、自分よりもずっとキャリアのある塚本が事故を起こすんだ!! だから代われと言ったのに!!

少年と2人で訴えたい気分だった。

「あ、ちよつと、これは、その、何ていうか、タフタイヤがパンク

したみたいで、それでブレーキが……」

と思いつながら必死に弁解する佐野。

何だかんだ言っても、上司は上司。どうしても見捨てる気にはなれなかった。

しかし少年は、佐野の言葉など耳に入っていないように興奮した口調で、予想外の言葉を口にした。

「あの、もしかして、さがみ動物病院 に向かっているんですか！」「へっ？」

「俺達も、ちょうどそこに向かって……急がなくちゃならないんです！！ 乗せていってくれませんか！？」

「はあ——っ！？」

思ってもみない事態だ。

不慮の事故で轢きかけた人物に、乗せてくれと言われるなんて。

しかしこればかりは、塚本に相談しないわけにはいかないだろう。佐野はひとまず少年にウェイトをかけると、パトカーに向かつていった。

窓ガラス越しに、運転席に座ったまま依然として動かない上司に伝える。

「あのー… なんか、乗せろって言われたんですけど」

「はい？ どこですか」

「パトカーに決まってるでしょ」

「……なぜ？」

「さあ、詳しくは分かりませんが……。急いでるみたいです」

「なぜパトカーに一般人を乗せなくてはならないんですか？ 公務執行妨害です」

「乗せてくれるならば、今回の事故未遂はなかったことにしてください」と

佐野は奥の手を使った。

もちろんデマだが、こうでも言わないとこの人は自分の罪を認めることさえしないだろうという佐野の判断だった。

ぶっちゃけ、深層心理は“自分までとばっちりを受けたくない”
という利己的なものだったが。

「さあ、どうしま——」

「何を突っ立っているんです佐野氏」

塚本は、変わらずドライな調子で佐野の言葉をさえぎった。

「さっさと乗せて下さい。急いでいるんでしょう？」

一気に人口密度が増えた社内で、佐野は運転をしながらバックミラー越しに2人を観察していた。

見たところ、特に不審な要素は見当たらない。少年はこの近くの中学生なんだろうし、男性もどこかひよろりとした印象で、何かをやらかしそうな雰囲気はない。

急を要するということで身体検査などはしていないが、いざとなったら助手席に座る塚本が何とかしてくれるだろう。

何とか——。

——いや——！

佐野はハンドルを握る力を強めた。

この人を信用してはならない！！

いざとなった時、この上司が勇敢に立ち向かってくれるとは到底思えない——！

頼れるのは自分だけ。

戦場を駆け巡る特攻隊のような気分で、佐野はもう一度少年達を見た。

「そつえば、お2人とも、名前を聞いていませんでしたね」

さりげなく、必要最低限の情報を探る。

人を簡単に信じることができないのは、刑事という職業柄、悲しい性である。^{さが}

「あ、言われてみれば。えーと、俺は松嶺大学付属中学校の、大原夏輝です。で、こっちの………放心しちゃってますけど、臨時で俺達の担任をやってる、御影晋二先生です」^{しんじ}

「はあ。さがみ動物病院 には、どんな用事が？」

「ええ、ちよつと……友達の携帯に電話したら、なんかヤバそうな人の声がしたから、友達が危険な目に遭ってるんじゃないかと思って。それで先生に連絡して、今向かった最中なんです」

「ヤバそうな人……」

少年の言葉を反復する。

さがみ動物病院 にいる“ヤバそうな人”。

死体。

……。

佐野はこの瞬間、2人を乗せてしまったことを後悔した。

「……大原さんが声を聞いたっていう“ヤバそうな人”に、心当たりがあります」

「え？」

「おそらく、その人物は人を殺害しています。それはもう……残酷なまでに」

今。

佐野と塚本、大原、御影を乗せたパトカーが、さがみ動物病院南西裏口手前の道路に到着した。

そして、同時に。

「あれ……」

1人の少女が、さがみ動物病院 正面入り口に立ちつくした。

「おかしいな……。今日は定休日じゃないはずなのに、やってないなんて」

少女は両腕に抱えていたペットの小犬をなでながら、つぶやいた。そのつぶやきは、院内から聞こえてきた悲鳴によってかき消されることとなる。

えー……。

半ば強引な感は否めませんが、なんとか全員集合させることができました。

万歳三唱！

予想外の人物が続々と現れる、史上最多の人数で繰り広げられた今回、まあ当たり前に長くなっちゃったりもしたんですが、いよいよクライマックスの準備が整いました。まさかこんなに長くなるとは思いませんでした。アルマジロもびっくり。

書いてて楽しかったのは、亮介の地の文オンリーの弾き語りのな部分（出番が偏りすぎこの人）。みつくと日向と高田の三つ巴漫才はあつという間に書き終わっちゃいました。それと刑事コンビの応酬はホント書いてて飽きない（アルマジロもびっくり（2回目））。

次回は長さ控えめにします。甘さ控えめみたいで面白いよね。はいすみません。

ずっと考えた。

平凡。

平凡という、その言葉の意味を。
ずっと考えていた。

平和。

平和という、その言葉の裏を。

僕の周りは今——“平凡”なのだろうか。
新しくできた友達がいて。

馴染みのあるガールフレンドがいて。

よく知らないクラスメイトがいて。

去年から継続の担任がいて。

そこにちよつとばかり斬殺死体があつて。

血塗れの携帯があつて。

ちよつとばかりの裏切り、衝撃、絶望があつて。

これって、“平凡”ですか？

「……来たようだな」

カタンッ。

携帯が、落ちた。

その音で僕は我に返る。

そうだ、僕は今——。

今まで生きてきた平々凡々な人生史上最大の危機に、陥っている
のだった。

目の前に、担任と同級生。

傍らには友達2人。

視線の奥には斬殺死体。

足元に……真っ赤に染まった、携帯。

こんな状況、普通に生きていればそうそうお目にかかることはない。

「時・宴土だ」

「なんでそこ源氏名にしたのかな。普通にジ・エンドって言おうよ」
佐上の突っ込みは、近づいてくるたくさんの足音でかき消された。
来たようだな。

操先生が言ったその言葉の主語はもちろん……警察。

これで、全て終わり。

捕まるべき人が捕まって、僕らはきつと事情聴取を受けるだろう。
夕方頃に返されて、家に帰る。そしてまた、いつも通りの日々。

……そんな簡単に、終わってしまうのか？

「困ったね。まさか本当に警察が来るとは思わなかったから、なんの対策もしてないよ。彼も部屋の中に閉じ込めっぱなしだし……。
あの部屋のドアは頑丈だから、簡単にはこじ開けられない。鍵は僕が持つてるし、いつそのこと飲み込んだじゃおうかな？ 一度やつてみたかったんだ」

もはや何の感慨もない、顔の下半分だけを歪ませて笑う佐上。
これで、全て終わり。

そんなはずは——そんなはずは、ないだろ？

まだ、解決していない問題がたくさん……。

「……………」

思考がうまくまとまらない僕の頭に。

金切り声のような悲鳴が鋭く響いた。

空に反響して、超音波のように耳に響く。

頭に亀裂が入ったような感覚。

悲鳴が聞こえたのは、病院の中からだった。

院内に、他に誰がいるのだろうか？

「ッ！？ 今の……何だ？」

耳を押さえながら、高田がつぶやいた。

その刹那。

「あ、ちよつ……佐上！？」

脊髓反射のごとく、佐上が院内へと駆けて行った。

声をかけた時には、視線の先に佐上はおらず、数秒後階段を上る音が聞こえた。

追いかける気にもならない。

そこへ、曲がり角から警察が駆けつけた。

いや、違う——この人たち、あの時の刑事だ。

その後ろに控えている2人も見覚えが……って。

「……御影さんに……大原……！？」

「はっ？ え、何でみつくくんがここに……？ 朝井さんも……。……ん、その人、もしかして操先生！？ どうしてこんなところに——」

「感動の再開は後にして下さい！！」

刑事さんたちが、立ち止まることなく裏口へと入っていく。

しかし、そこで立ち止まらないわけにはいかないだろう。

入ってすぐのところに、変死体があるのだから。

案の定、足音が途中で止まった。

「………このことですか……」

「……これは——酷い」

「凄まじいですね……。凄惨なんてもんじゃありませんよ」

「前例のない事態ですね」

「そうですね……。まさか、直に見^まえることになるうとは？」

微妙にずれた感想を述べている気がする。

たしかにバラバラだし死んでるし出血大サービスも甚だしいけれ

ど、前例がないってほどじゃないと思う。

……あれ？

気になってみると、刑事さんたちはそもそも警備員の死体を見てさえいなかった。

見ていたのは……。

——え？

ちょ……待ってくれ。

これは……何だ？

何が起こっている？

どうしてここに、彼女が？

どうして——。

「……………」

ずっと、この時を待っていた。

この時だけを信じて、我慢してきた。

やっと、……敵を討つことができる。

この人間が。

この、邪悪に満ちたおぞましき下劣な愚人が。

私の——私の、大切な友達を……。

傷つけた。

苦しめた。

悲しめた。

……許さない。

絶対に……決して、許したりなどしない。

死んでも呪ってやる。

殺しても呪ってやる。

いつまでも——永遠に。

自分の犯した罪の重さを軽んじ、平氣の平左でこの世にのさばり

続ける下種の極みが。
地獄に墜ちろ！！

遠くから……悲鳴が聞こえた。

彼女の声だった。

そうか……きっと、やってしまったのだろう。

あの包丁で。

佐上くんを殺したら、次は誰を襲うつもりなのか……。

流れからしたら、鶴嶋くんかな？

本来は、彼の方を真っ先に始末するべきだったんだろうけれど……
隠蔽に手を貸したのは佐上くんだから、順番からすれば大した違いでもないか。

この一連の事件に関わった全ての人々を消すつもり？

自分の手を汚してまで？

一体、彼女に――。

柳川さんに、何があったというのだろう。

彼女を装って、佐上くんに隙ができるのをずっと待っていたところまでは理解できる。それが絶望を伴った復讐のためであることも
それなら、なぜあんな言葉をノートに書いた？
なぜ。

僕に、ごめんなさいと謝った？

僕を刺したのは、佐上くんへの忠誠心を表すための行為じゃなかったのか？

関係のない僕を巻き込んだことに対する謝罪？

……そんな軽いものじゃない。

それだけなら、わざわざ書いた後にノートを引き裂いたりしないだろう。

一体何なんだ？

言葉を話さない彼女は、今どんな思いでいるんだ？

「……………莉子……………！？」

「……………」

刑事さんたちの目の前で。

柳川が、包丁を両手で握り締めて佐上に斬りかかっていた。
それを。

女刑事さんが、止めた。

彼女の腕をつかみ。

そのまま捻り。

柔道の一本背負いの要領で、地面に叩き伏せた。

彼女の手から包丁が離れる。

同時に、もう一方の刑事さんが、包丁の柄を蹴って部屋の隅に弾く。

女刑事さんは素早く手錠を取り出し、柳川を拘束した。

一瞬の出来事だった。

「……………」

何が……………起こった？

何でここに、柳川がいる？

「……………柳川莉子」

静まり返る現場。

女刑事さんが、淡々とした声で言う。

「殺人未遂及び傷害罪の罪で、逮捕する」

その言葉に、柳川は抵抗をやめてガックリとうなだれた。

柳川は、佐上を殺そうとした？

どうして？

それになぜ院内から出てきた？

他にも、中に人がいるのか？

あまりに多くのことが短時間で起こりすぎて、情報処理が追いつかない。

一方、難を逃れた佐上が、我に返って柳川に詰め寄る。

「……た…助かった……。おい、莉子！！ お前、こんなこととしてただで済むとでも——」

それを、先ほど包丁を弾いた刑事さんが手で制す。

「あなたですよ。佐上惇さん」

「……！！」

「誘拐・監禁に殺人事件の隠蔽……さらには警備員を殺害し、罪のない命をこのような形で無残に奪い……。あなたの方が重罪ですよ。他人のことをどうこう言える立場ではありません」

「……どうして…それを」

佐上が言い終わる前に。

刑事さんは佐上の両手首に手錠をはめた。

「……！！ ……おい！ どうしてあのことを知ってただよ！ 京ちゃんは何も……ッ！」

「塚本さんは先に行っていて下さい。私は錦戸さんに救援を頼みますんで」

「………分かりました」

塚本と呼ばれた女刑事さんは、柳川から離れると、院内へと駆けていった。

それを見送って、残った刑事さんは、佐上を押さえながら器用に携帯を取り出して電話をかけた。

「あ、錦戸さん？ 佐野ですー。はいはい、それは謝りますって。あれ、でも私、上には連絡しておいたと思うんですけど。あー……いいです、どうせ塚本さんが言い忘れたんでしょう。よくあることです。全く、あの人はなんでこう職務を全うしないんでしょうかねー。さっきだってパトカーの運転は私がするって言ってるのに聞かなくて、接触事故起こしかけたんですよ。こんなのが上司だと思つて情けなくて情けなくて。上にチクっちゃってもいいですかコレ？ て

「いつか言うべきですよ。塚本さんにはいい加減、けじめつてもんを持ってもらわなくちゃ困るんですよ。欠勤はするし単独行動はとるし先輩風は吹かすし切れるとすぐ発砲するし、傲慢で強引でその上強欲なんですからあの人は。手のつけようがありません。警視庁随一の問題児ですよ」

「なんか言ってる。」

「塚本刑事の悪口めっちゃ言ってる。」

「あーそうそう、それなんですけどね、はい、ちょっと来てくれませんか？ 偶然、犯罪者2人確保しちゃったんで。はい。——じゃ、頼みますねー」

「ピ。」

「通話を終え、佐野刑事はやれやれと僕らに向き直った。」

「えーと……そういうわけで。もうすぐ警察がたくさん来るんで、それまでこの2人見ておいてもらえます？ そろそろ行かないとあつちもマズいんで」

「えー！？」

「じゃ」

「あつという間に塚本刑事を追いかけていつてしまった。」

「……………」

「なんか、頼まれちゃった。」

「あの、未だに状況が理解できないんですけど。」

「……………とりあえず」

「僕は、この場にいるメンバーを一人一人見回した。」

「高田、朝井、操先生、大原、御影さん。」

「よく分からないので佐上と柳川は除く。」

「まずは現状把握から始めましょうか？」

「……待って！！」

「？」

後ろの曲がり角から叫び声が聞こえて。

振り替える間もなく、僕は再び目にするようになる。

チェーンソーを振り上げて御影さんに襲い掛かる、操先生を。

長さ控えめっというか、普通に短くなっちゃいました。

しかも話の展開がとてつもなく意味不明でした。

でも、この意味不明な文型がスピーディーさをいいカンジに醸し出してゐる、なんて言い訳はともかく。

結構頑張ったと思います、自分。いや、忙しいんですよ。最近。

学校はあるわ塾はあるわ部活はあるわ。大変ですね受験生は。

次回どうしょ。

「―――以上が、あの日の“外”の様子だよ、鏡崎」

「……………。ふうん…………君たち、あの現場に居合わせていたんだね」
「ああ」

僕はパイプ椅子から腰を浮かして、バスケットの中に入ったマンゴーの皮をバタフライナイフでむく。

「……………ここは、突っ込む所か？」
「何が」

「……………いいさ。この場合普通はリング持って来るだろとかどつからバタフライナイフ持ってきたんだよとか実は僕マンゴー苦手なんだよねとかそういうのはひとまず置いておこう」

「一息で言っただな」

5月。

の、5日。

の、昼。

の、梅崎総合病院。

の、307号室。

そこで、僕と鏡崎は話していた。

といつても、鏡崎は現在入院中。手土産にマンゴーを3つ持ってきて、手土産にあの日の様子でも話して聞かせてやろうと思い、訪ねた。

あの日というのは、言うまでもなく4月21日のこと。

いろいろなことがあった、1日。

「怪我の方は大丈夫なのか？」

「そうだね。とりあえず、命に別状はないみたいだよ。あと2週間くらいすれば退院できると思う」

「そっか」

むき終わったマンゴーを、紙皿の上で1口サイズに切り分ける。

「それで……御影さんは？」

「うん。あの人も、大事には至らなかった。どちらかというと軽傷の部類だな。右肩に斬りかからただけだったから」

「だけって……人事みたいに言うね」

「御影さん、避けなかった」

「——ん？」

「避けなかったんだよ。もし操先生が心臓部を狙ってきたとしても……多分、受け止めるつもりでいた」

僕はあの時のことを思い出す。

今となつては、操先生の気持ちも分からなくもない。

自分より下と思っていた人間に抜かされ、嫉妬したことなら、僕にもあるから。

いや……案外、誰にでもあることなんじゃないか。

でも、殺意を抱くほど嫉妬はしない。

きっと……限界だったんだろう。

本人が言っていたように。

さまざまな気疲れが積み重なって耐え切れなくなった。

それで失踪した。

「……うん、それは多分あくまで比喻表現としての一環であろうことを承知で野暮ながら突っ込ませてもらうけれど……。心臓を狙われたら、御影さんは死んでしまうのではないか？」

「御影さんね」

「……………」

「操先生が自分のことをよく思っていないって、薄々感づいてたらしいんだ。僕だったら、そんなの理不尽だって憤慨するだろうけどね、御影さんはそうじゃなかった。自分にその嫉妬をぶつけることで、操先生が少しでも救われるなら……って、そう言ってたよ。結果として自分が死ぬことになったとしても、操先生を恨んだりはないって」

「…素晴らしいね」

「アメーzingだろ？」

「それ、操先生には言わない方がいい。本当に御影さんを殺しかねない」

「？ 何だよ」

「分からないのか？」

「生憎な」

「……そうだね。君はジェラシーなんて感じたことないだろうから、分からなくても無理はないか」

「なんかとてつもなく餓鬼扱いされてる気がするんだけど」

「気のせいじゃないよ」

ジェラシーね……、嫉妬か。

僕も、別に抱いたことがなくもないんだけど。

と、ついさっき思ったところなんだけど。

「つつてもさ。お前こそジェラシー感じたことあんの？ 鏡崎みたいに、他人の評価を気にしないタイプって、他人そのものに興味がないようなもんだから、嫉妬なんてしないだろ」

「見事なまでに偏見を織り交ぜた意見だね。別に、僕は他人の評価を気にしないってわけじゃないよ。あてにしてないだけだ」

「同じじゃないか？」

「違う。他人他人って言うけどね、この世界にはどれだけの人口がいると思ってるんだ？ 個々の完成は十人十色で有象無象で、魑魅魍魎な上に複雑怪奇、そのくせ曖昧模糊ときてる。そんなのをあてにするくらいなら、鏡を見つめている方がまだ新発見があると思うのは僕だけか？ 自分のことは、結局自分にしか分からないんだよ。これは僕の持論でもあるけれど、他人の評価を気にする奴は、自分の評価を下げる奴だ。客観的思考って言うのは、何にしても無駄な感情が含まれてしまうのが難点だからね」

「……………」。お前さ、もしかしくなくても漢字得意だよな、多分」

「え、いや、別に」

「あー…あれか、先天的な才能ですか。いいですねえ」

「……まあ、だからといって一切合切微塵も全く聞く耳持たないわけにはいかない。よくいるだろ、誰かに意見を求めておきながら、自分の中ではひとつの結論に既に達してて、本当は鼻っから参考にする気なんてないって人。みっくんも案外そのクチだよな。僕はそれほどじゃないけど、あくまで一般常識の範疇内に僕の意見が収まっているかどうかの確認として、他人からの評価も視野に入れてるって程度。参考にする気なんかさらさらないよ。本当は聞きたくない。自分の完成が鈍っては困るからね、いろいろと」

「……うん、鏡崎、お前多分一人で生きていけるよ。頑張れロンドンウルフ」

「あと、他人そのものに興味がないわけでもないよ。他人に無関心だったら君とこうして話したりなんかしないだろうし、そもそもこんな事件に巻き込まれることもないだろう。人との関わりを一切断ち切ってしまったれば楽なんだろうけど、生憎僕はそれほどコミュニケーションに疎いわけじゃないんだ。人並みに興味はあるし、人並みに関わってみたいとも、思うよ。もつとも、他人に興味がない人間なんて早々いないけどね。自分が社会という名の同種族の一群の中にいる以上、関心は少なからず抱くはずだし」

「で。とどのつまり、お前は誰かに嫉妬したことがあるのかなのか？」

「あるよ」

「そりゃ誰に」

「……………言わなくちゃならないのか？ 今この場で」

「言えない事情でも？」

「言う事情がない」

「もしかして、今回の事件の関係者？」

「ノーコメント」

「クラスメイトの誰か？」

「ノーコメント」

「刑事さんたち？」

「N・C」

「じゃあ誰だよ……そんなに言いたくないのか？ 嫉妬の1つや2つ、誰にでもあるって。生きてんだからさ」

「じゃあ先にみつくんの方から言ってくれないかな？ そうすれば相乗効果で僕も打ち明けられるかもしれない」

「どうせ僕はジェラシーなんて感じたことないですからね。今まで14年数ヶ月、お気楽に生きてきましたから」

「……根に持つね君も」

「仕方ない。ここは王道、カウントダウンと洒落込もう。俗世間の本能で、カウントが0になればノリで言えちゃうもんだよ、そんなの」

「ちょ、ノリってそんな」

「1」

「いきなり1!？」

「0」

「……………」

「何だよ、0になったんだから言えよ」

「無理があるだろ」

「よし、じゃあ言い当ててやる」

「君、さつきからすごい横暴なことやってるって自覚はある？」

「高田じゃないな」

「…否定文……？」

「消去法だよ。どうなんだ？」

「……………」

「またノーコメント使うつもりか？」

「……………」

「それならそれでちゃんとノーコメ宣言してくれ」

「……………」

「……あ」

そこで僕は気づいた。

僕が病室に入ってきてから、鏡崎は一度も目を開いていないことに。

だから気づかなかった。

かすかに寝息が聞こえていたことに。

……全く。

会話中に勝手に寝る奴があるか。

僕はもう帰る。

「あと2つ……マンゴー、どうするかな。朝井にでもやるかな……あ、たしかあいつもマンゴー好きじゃないとか言ってたような。っ
たくなあ、みんな好き嫌い多すぎだっつ。仕方ない、御影さんのお土産に使い回すとするか」

この時期、マンゴーは結構高い。

何事も無駄にはしたくないし。

というわけで、僕はパイプ椅子から立ち上がった。皮だけが残ったマンゴーを紙皿ごとゴミ箱に捨て、バスケットを抱える。

そのままベッドから回り込むように向こう側へと行く。

引き戸の取っ手をつかもうとした、その時。

独りでに引き戸が開いた。

「……………お見舞い品の使い回しは良くないよ。ていうか良いわけがないよ」

「……………ん？ あれ、あ、いたんだ」

やってきたのは噂をすれば何とやら、朝井だった。

制服姿で、片手で抱えている紙袋が不自然に膨らんでいる。

朝井はどんな手土産を持ってきたのだろう。

「何、朝井もお見舞い？」

「ん……………正確に言つと、ちょっと違うね。でもま、お悔やみ申し上げに来たのは本当だよ」

「うんナチュラルに殺してくれんな。生きてるって。でもタイミン
グが悪かったな、たった今スリーピングタイムに入ったところっばい」

「だから？ 私は用があるんだから、起きてくれないと困るんだけど」

「うわ、ひつでえな……。何の用？ 緊急？」

「別に。大した用じゃないけど、でも用であることに変わりはないからね。どうすれば起きると思う？」

「……………なかなか手強そうだな」

「そう」

「ところでさ、朝井が持つてるその紙袋、何が入ってるんだよ？」

「ああ、これ？ そっか、この子を使えば……………」
「使えば？」

「この子ってことは、生き物？」

その割には動かないけれど。もしかして死骸じゃないだろうな。いや、朝井なら持っていていきかねない。

病院に動物の死骸を持ち込むなんていうタブーもやってのけるやつだ。

「今、かなり失礼なこと考えなかった？」

「え、いやいや。常識にとらわれない自由気ままな精神をお持ちなんだろうなと感心していたところだ」

「じゃ、感心ついでにいい加減消えてね。時間が押してるから」

とても強引に室内から追い出される。入れ替わりに朝井が入って、すぐに引き戸が閉められた。

……………。

いえ、別に興味があるわけじゃないですよ？

朝井がどうやって鏡崎起こすのかなーとか、どんなリアクションとるのかなーとか、そんなこと考えてませんよ？

ただ、ちよつと話し疲れたから引き戸のすぐ横にあるベンチに座っただけですよ？

あー、のど渴いたなー。

翌日、病院に長く勤める掃除のおばちゃんにより、病室から数本

の猫の毛が発見された。

朝井が持ってきたのは、マインと名付けられた黒猫だったようだ。

鏡崎は重度の猫アレルギーだった。

彼に起こった悲劇については、ご想像にお任せするとう。

『後日。』

佐上惇容疑者の供述により判明した事実は、我々の想像を絶するものだった。

事の発端は、先日報道された、蓮音美智子さんが死後1ヶ月たった状態で発見されたあの事件にまで遡る。

警視庁の調べにより、蓮音美智子さんの殺害については佐上惇容疑者のクラスメイト、鶴嶋京平容疑者による過失致死であると思われる。しかし、本人は下り坂を自転車に乗りながら高スピードで下っていた時、角の死角にいた蓮音さんに気づかず、轢いてしまったと供述しているが、遺体には胸部に刺し傷があり、蓮音さんの死因はそれによる刺殺であることが検死の結果判明した。

蓮音さんを刺した人物について、何も証拠がなかった為調査は難航していたのだが、逮捕から3日後、佐上惇容疑者が“蓮音さんを刺したのは自分だ”と自白。彼の自宅から凶器となったサバイバルナイフが発見され、指紋検出によって佐上惇容疑者による犯行であることが立証された。

蓮音美智子さん殺害事件の真犯人は佐上惇容疑者だったのだ。

そして起こったのが、今回の事件。

佐上惇容疑者の供述により、犯行方法が判明した。

クラスメイトの鏡崎亮介氏を誘拐し、彼を人質にとって、鶴嶋京平容疑者にかけられた蓮音美智子さん殺害の疑いを（現時点では事件はまだ露見していなかった）学校関係者の1人になすりつけ、鶴嶋京平容疑者にかけられた容疑を晴らすというのが目的だった。

この時、佐上惇容疑者は“京ちゃん（鶴嶋京平容疑者）が人殺しなんてするはずがない”と信じきっており、蓮音さんが亡くなったのは不慮の事故であると供述していた。しかし、ここで不可解な点が浮かび上がってくる。

そう、“蓮音美智子さん殺害事件の真犯人は佐上惇容疑者であった”という事実と、佐上惇容疑者の供述が噛み合わないのだ。

蓮音さんの死因は、鶴嶋京平容疑者による過失致死と見せかけた佐上惇容疑者による刺殺である。佐上惇容疑者は、本当は自分が殺害したというのに“蓮音さんを殺害したのは鶴嶋京平容疑者である”とした上でそれを否定し、彼の容疑を晴らすために今回の事件まで起こした。つまり、佐上惇容疑者は鶴嶋京平容疑者を蓮音美智子さん殺害事件の犯人に仕立て上げ、鶴嶋京平容疑者にも彼が蓮音さんを殺害したのだと思い込ませたということになる。

全ては佐上惇容疑者の一人芝居で、鶴嶋京平容疑者はそれに巻き込まれた形になる。ならば彼は、むしろ被害者なのではないか？ 今回の事件について佐上惇容疑者は、“ずっと、京ちゃん（鶴嶋京平容疑者）を陥れてやりたかった。ム力ついていた”と供述している。

一方、柳川莉子容疑者が佐上惇容疑者を殺害しようとした事件については、本人が言葉を喋ることができない精神病にかかっているとのことで、全て筆記による事情聴取になった。

本人の供述によると、柳川莉子容疑者は鶴嶋京平容疑者が蓮音美智子さんを轢く現場を目撃したらしく、鶴嶋京平容疑者が蓮音さんを殺害したのだと誤認した。そこで、佐上惇容疑者が企てた今回の事件に介入する形で、鶴嶋京平容疑者を殺害し、その罪を佐上惇容

疑者に着せるつもりでいた。その為、彼女は佐上惇容疑者と交友関係を築き、仮初めの交際をし、佐上惇容疑者に対する忠誠心を示すために鏡崎氏を刺すなどの暴行をした。

しかし、佐上惇容疑者が柳川莉子容疑者に“蓮音さんを殺害したのは彼ではなく自分である”と言ったため、柳川莉子容疑者は真犯人である佐上惇容疑者を殺害しようとした。そこを警視庁一課の塚本刑事と佐野刑事に取り押さえられ、御用となった。

この殺人未遂事件について柳川莉子容疑者は、“ずっと私に優しくしてくれた蓮音さん（蓮音美智子さんの娘）を傷つけたあの人間が、許せなかった。殺すつもりでいた”と供述している。

また、今回の事件で松嶺大学付属中学校の教師、操善人が警備員を斬殺した件について本人は、“大した意味はない。退屈だったからやった”と供述している。

以上が、この事件の全容である。

さまざまな思惑を持った人物達が交錯し合い、そして起きてしまった、今回の殺人及び誘拐、傷害事件。

ただひとつ腑に落ちないことは、それぞれの容疑者達の動機が不十分な点である。

今後は動機の真偽の程を確認すると共に、それぞれの事件の関連性について更に操作する意向である。

警視庁一課 塚本寧璃 （警視庁一課研修員 佐野）

久しぶりの亮介とみっくんの会話。

なんか“ジェラシー”から大分離れていつている気がします、
亮介も疲れてるんです。でも理屈っぽさは健在。

なんとなく、報告書みたいなのを書きたくなったのでチャレンジ
してみました。

あれ、言い回しとか大変だと思います。多分。まあ、書いたの塚本
刑事だからいつか、的なノリで。

次回で終わりかな？

「飛んで火に入る夏の虫って、アレ季節を夏に限定する意味あんのかな？」

「知らねえよ」

という会話をしながら、僕と高田は教室のアルミサッシをまたいだ。

現在時刻、8時3分。

今日も余裕で登校を終えた。

「おはよう、みつくと高田くん」

「よ、久しぶり」

「2週間ぶりだなー」

朝井は相変わらず朝が早い。

簡単な挨拶を済ませて、僕は自分の席に着く。

そして高田は僕の隣に――。

「あ、俺の席ここか」

高田が座ったのは、麻由梨子さんの席。

「ん？」

「あ、みつくん。言い忘れてたけど、席替えしたんだよ。出席番号順から、五十音順に」

「…僕どこ？」

「自分で確かめれば」

うーん、やっぱり朝井って冷たい。

前にも言ったけど、明るい系のキャラじゃなかったっけ？
自分で確かめればと言われたので、僕は自分で確かめる。

黒板にプリントが磁石で留められてあり、そこに席と名前が書かれていた。

□ 相澤 朝井 雨郡 荒瀬 出 内海

柄櫻 縁田 大原 鏡崎 河園 菅藤

黒 熊谷 西藤 栄田 佐上 崎口 佐々野
板 志水 高田 鶴嶋 寺井 東城 野津

蓮音 平内 藤沼 松田 茉莉沢 帝木

三須 光村 目黒 柳川 矢吹 吉川 』

「僕は…… つと、廊下側か。なんかすげえメンツ……」

ぶつちやけ、中の下といったところか。まず問題は僕の後ろにいる内海。隣は……河園。こいつは大人しいから問題なし。しかし、

高田とは結構離れたな……鏡崎がいるのが、唯一の救いか。

つて、あいつも20日まで来れないんだった。

唯一の救いが消えた。

中の下改め、下の下の下。

「どうだった出？ 俺の席は、まあまあいい感じだぜ」

「お前の周り、女子多いな……熊谷に西藤に栄田に、志水と蓮音もそうだ。藤沼も。こりやかなり不公平つてもんじゃないか？」

「何だ何だ、拗ねちゃって。俺はお前がうらやましいよ。だって隣、河園だろ？」

「だから何だよ。それを言うならお前、僕の後ろ、内海だぞ……頼むから席交換してくれよ」

「やだね。こんな極上の席譲るかってんだ」

「さつき“まあまあ”とか言ってたじゃないか……」

「前言撤回！！ いいじゃんかよ後ろが内海でも。何、内海と何かあった？」

「……別に。そんなんじや………ない、のか……？」

「歯切れ悪いなー。いつでも相談に乗ってやるから、元気出せつてそれか河園に元気もらえ。てか河園でエネルギー補給しろ」

「そんなエネルギーだよ。……もういい……」

まさか内海が後ろにいるとは……。

最悪だ。これから一ヶ月、どうすればいい。死ぬか。死ぬしかないのか。もういつそ死んで楽になるか。いや考えてみればくだらない。僕は生きる。

「おっはよーっス」

と、そこへ、光村と吉川がやってきた。

時計を見ると、ちょうど8時10分。そろそろ、一般生徒が登校してくる時間だ。

「えーっと、俺の席、俺の席は……っ。よっしゃ、窓際」

この、朝から割かしテンション高めな人物は、正式名称を光村修哉という。構内有数の健全なチャラボーイに認定された、珍しいといえは珍しい人種。

授業は3割寝て3割勉強し、4割サボリ。といってもボイコットではなくて、ただ単純に“そこにいるだけ”の状態となる。この時の光村は何か考え事をしているらしい。僕はあまり親しくないのが分らないが。

「……まあ、予想はしてたけど、やっぱ最後だよな俺……」

この、朝から割かしテンション低めな人物は、正式名称を吉川大胡という。光村とは結構仲が良く、比較的真面目なので、よく光村に世話を焼いている。

根がお人好しなので、光村に限らずいろいろな人と仲がいい。もちろん授業は10割真面目にこなすが、たまに寝る。おちゃらけな光村とつるんできた影響か、対照的にしっかり者で、学級副委員長を務める人望もある。

「クッ……なんだ大胡、お前のその席は……！ 窓際で一番後ろで、それでもって周りの3席全員女子じゃねえか……！ しかも結構上玉の……！ 不公平だ……！ やり直しを要求する……！ ストライキ起こすぞコラァ……！」

「いや、いきなり切れられても……。俺は修哉の席、うらやましいよ。周り皆、真面目な人が多いし」

「俺、s辞書では“真面目”つまんねえ”って等式が成り立つんだよ……！ それすなわち、俺の席の周りはつまんねえの5乗じゃねえか……！」

「どんな辞書だよ……！」

「なんだよお前ら、また喧嘩してんのかよ。朝からストライキとかどうした？」

タイミングよく、荒瀬が登校してきた。

そういえば荒らせは僕の前の席だ。

「聞けよ荒瀬！！ 大胡の席メツチャハーレムだぜ！！ つかハネムーンだぜ！！ ジューンブライドだぜ！！」

「なんで結婚してんだよ……。どうせ来月には変わるんだから、大したことじゃないだろ」

「それが違うんだな！ 見る、俺の席を！！ 全くもって恵まれてねえ！！」

「失礼だな……。あ、俺の後ろ出なんだ」

光村のお悩み相談を軽くいなし、自分の机にカバンを置く荒瀬。
と、そこで僕はあることを思い出した。

「なあ荒——」

「分かってる」

手で制し、荒瀬は僕に古びた鍵を渡した。

「昼休み、屋上に来てくれ。俺、ちよつと遅れるから」

「話というのは、言うまでもなく莉子のことだ。俺さ、知らなかったんだよ。……あいつが、警察に捕まってたってこと。そりゃ、やったことは法に触れるもんかもしれない。誘拐の幫助だつて暴行だつて、りっぱな犯罪だ。殺人未遂なんて、もつての外だつてことも分かってる。……でもさ……。あいつの目的は、そんな簡単なもんじゃないんだよ。莉子は、佐上のことなんて好きでも何でもないし、あんな暴力的なこととはしなかった。あいつが変わってしまったのは、5ヶ月前——。莉子の姉が、殺された日だ」

そう言つて、荒瀬は一旦区切りをつけた。

「……ああ、なんか、いきなりまくしたてちまって悪かったな。俺から呼び出しておいて、思ったより時間がかつちまってさ……」

「……………いや」

僕はなんと言ったらいいか深刻に分からず、とりあえず否定の言葉述べる。

「そんなことは……ないよ。いい話……だった、んじゃない、…かな？」

「……………大丈夫か？」

逆に心配されてしまった。

そりゃあ、いきなりこんな話を聞かされてもどう反応していいかリアクションに困る。

柳川が逮捕されたのは佐野刑事&塚本刑事から聞いてはいたけれど、現在のところ先月起きた事件は“極秘”扱いになっており、報道されるのはまだしばらく先になるとの話だった。最も、今まで1ヶ月間隠蔽されていた、蓮音美智子さん殺害事件については報道したらしい。その際に佐上が捕まり、鶴嶋が事情聴取を受け、と校内でも一悶着起きた。

「あのさ……………」

ふいに、声の調子を変えて荒瀬が問いかけてきた。

「もし……お前ならだよ。幼馴染みが…犯罪いくつも起こして、捕まったら……どんな気分になる？」

「……………」

返事に詰まった、わけではない。

以前にも何回か聞かれたことがある。この年代は、まだギリギリ“大切な友達”“幼馴染み”という方程式が成り立っているようで、それ関連の話題で“もし幼馴染みが。。したらどうする？”なんて質問は年に1回は交わされる日常的なそれとなっていた。

無論、それに対する妥当な答えも持ち合わせている。

しかし……その答えを言ったところで、僕の中に渦巻くこの疑念は、おさまらない。

「……………何て言ったら、納得するんだ？ 荒瀬は」

彼は、僕の“回答”自体には、興味がないのではないか？

むしろ重要視しているのは質問に対する答えではなく、質問をし

たことによる反応の方なのでは？

この僕の読みは、当たったのだろうか。

果たして荒瀬は、少し表情を険しくして僕を見た。

「……やっぱり、お前には分かるんだな」

「生憎、僕の周りにはもつと面倒な回りくどい言い方をしてくる奴がいるもんでね。逆に、直球過ぎて返答に困る奴だっているけど。」

右脳発達型で難しい言葉を理解できない可哀想な奴もいたな」

「……。場所、変えようぜ」

「ん？」

「……この状態で話す話題じゃないからさ」

そう言われれば、今、僕と荒瀬は屋上の扉付近で正面から向き合
って立って会話している、とてもかた苦しい体制だ。

「そうだな。………あの、荒瀬、場所チェンついでにもう1つい
いか？」

「何だ？」

「お前が持つてるソレ、何が入ってた？」

僕は、荒瀬が肩に背負っている、黒く細長いソフトケースのよう
なものを指差した。

屋上に来た時点で持っていたけれど、いきなり話を始められてし
まって、言い出すタイミングがつかめなかった。

「ああ、コレは……何でもねえよ」

「すごく怪しいな、ビジュアルが。何かヤバイものでも入れてるん
じゃないだろうな……」

「そんなことねえって」

荒瀬は半ば強引に話を打ち切ると、給水タンクに向かって歩き出
した。淡いクリーム色の外壁にもたれる。

僕もついていった。

荒瀬の隣に回り、外壁に背をあずける。身長差がかなり気になる
ところだが、この際それは置いておこう。

「……答えて、くんねえか？ ——俺の質問」

「あ、うん。えー……。……引いたりするなよ？」

「滅多なことじゃ驚かない自信はある」

「殺す。……だろうな」

「……………。……一応、理由も聞いていいか？」

「実の話、僕にも幼馴染みがいたんだよ。口は悪いし態度は悪いし、空前絶後の面倒くさがり、そのくせ厄介事には自ら首を突っ込みたがる、そんなどうしようもない奴だったけど……いたんだ。幼馴染み」

「……そっか」

「まあ、口は悪いし態度は悪いし、空前絶後の面倒くさがり、そのくせ厄介事には自ら首を突っ込みたがる、そんなどうしようもない奴だったけど、僕は確かにそいつのことを大切に思ってた。ヘタな家族やら何やらなんかよりも、ずっと大切に、一番の宝物っていつでも過言じゃないくらいに。それくらい大切に、絶対に失いたくない存在だった……いや、過去のことじゃないから、ここは現在形だな。もし、僕の大切なそいつが、犯罪をいくつも起こして捕まったりするなんことが起きたら、その時は……」

「——殺す」

「……うん。僕にとってそいつは、本当にかげがえのない、大切な大切な存在なんだよ。それが、刑務所に連れて行かれるなんて……そんなこと、耐えられない。まず、そいつと引き離されるってことが僕にとつてすごく耐え難いことなんだ。だから……大切なものを失うくらいなら……自分の手で消す。自分自身で、始末をつける。僕ならきつと、そうする。殺すことで、救ってやる。殺すことで、失わずに済むのなら」

生半可なサプライズじゃ驚かないみたいなのを言っていたけれど、これにはさすがに、引く、か？

しかし、これが僕の本心なんだから、どう反応されたところで甘んじて受けるしかないのだけれど。

「……………なんか、すげえな」

「けなしてるのか？」

「いやいや。うん、やつぱ出は、そういうやつだったんだな」

「……？」

「ああ、独り言を独りごちただけだから気にすんな。お前になら……この話をして、いいかもしれない」

そこで荒瀬は、重たく感じたのか肩に背負ったソフトケースをタイルの上に置いた。

その動作は、今までの会話とは違う話になることを暗に示していた。

僕も若干姿勢を正して臨戦態勢をとる。

「第2次テンペスト」……って、憶えてるか？」

「……忘れるって……言うのかよ。あの事件を」

「……あれからまだ、4ヶ月もたつてない……。特に、第2次はこの学校で起きた出来事だから、まさか忘れるなんてことないよな」

そりゃ……当たり前だ。

あんな事件、忘れられるはずがない。

忘れられたら、どんなにいいかと思うけれど、でも忘れてはいけない。

絶対に、記憶から抹消してはいけない、あの記憶。

あいつも……あの事件で。

あの人……に……。

「言うまでもないが、第2次があるってことは以前に第1次が起こつたってことだ。そっちの方はあまり公にされていないし、学校とは直接関わりがなかったから、もしかしたらお前も知らないかもしれないな」

「……“第1次テンペスト”が起こつていた？ それは……いつだ？」

「11月だ。今から半年前……アイツが第2次を起こす前に、手違いで起こってしまった不慮の事故——その被害者が、柳川の姉、柳川梨恵夏だった」

「……被害者……じゃあ……柳川の姉を……殺したのは……」

「ああ……」

ここから先は、聞きたくなかった。

あの人 についての話は、何も聞きたくない。

聞きたびに…… あの人の“闇”が、自分の中に流れ込んでくるような気がして。

だから、これ以上……。

これ以上、話さないでくれ。

「柳川の姉を殺したのも……それによって、柳川から声を奪ったのも……柳川が逮捕されたのだって……。全ての起源は、アイハラ だ」

荒瀬はそれから、憂いの表情で語り始めた。

僕は、それを黙って聞くことしかできない。

本当は、耳だつてふさぎたい。

「……莉子があの事件に関わった本当の目的は……復讐だ。表側は“友達だった蓮音の親を殺した佐上が許せなかった”ってことになつてるけど、それは違う。莉子は蓮音の母親が殺されるずっと前から……佐上を、ひいては“テンペスト”の関係者を全員、見境なく恨んでる。第1次も第2次も、平等に。敵味方関係なく、関わった全ての人間を異常なまでに恨んでる。佐上は アイハラ の“アテンドメント”だった。莉子が恨むのも当然だ。だから殺そうとしたんだよ……。莉子の動機に、蓮音は関係ないんだ。莉子は蓮音の死を利用して、うまく事情聴取を切り抜けたんだ」

「……マジ……かよ」

「“第1次テンペスト”の被害者は、柳川の姉だけで、報道されるまでには至らなかった。その後起こった“第2次テンペスト”では、多くの学校関係者が殺され、メディアでも大きく取り上げられた。——なあ、この差は何だ？ 死んだ人数か？ 死んだことには変わらないのに、この扱いの違いは何だよ」

「……………」

「だから莉子は、アイハラを恨んだ。恨んで恨んで恨んで憎んで憎んで憎んで……それはもう、壮絶だったよ。人は、あそこまで同種族を恨むことができるんだな。あいつの憎しみは半端じゃない」

「……………」

「莉子の最終目的は、“アイハラを自らの手で殺すこと”と“テンペスト”の関係者全員を闇に葬ること”だ。そのためになら悪魔にだって魂を売るつもりでいる。いや……すでに、あいつの魂は、あいつの中の“悪魔”が食い尽くしてしまっているのかもしれない。莉子の皮をかぶった“悪魔”が、恨みと憎しみに突き動かされて、こんな復讐をしているのかも……」

「……………」

「でも、今莉子は刑務所にいる。復讐しようとしたために、刑務所にいる。刑務所においては、復讐ができない」

そこで。

ふいに荒瀬が給水タンクの外壁から背中を離し、直立して僕を見た。

「お前、さっき言ったよな？ 俺が莉子の話を最初にした時に……

『いい話だった』……って」

「……………」

「お前にとっては、莉子の悲しい過去は『いい話』なんだな。所詮自分とは何の関わりもない他人事、なんて——」

何が起こったのか分からなかった。

気がつくと、荒瀬は僕に掴みかかっていて、胸倉を掴んだ手で強

引に外壁に押さえつけられていた。後頭部と肩と背中に衝撃が走る。

「——まさか思ってたねえよなあ？ 出……」

「ガハッ……………荒瀬……？」

「お前、“第2次テンペスト”が起こるまで、アイハラと随分深く関わってたそうだなあ。“アテナダント”でも“サポーター”でもねえのに……」

「……………！！……お前……………どう、してそれ……………を」

「初めて知った時は驚いたぜ。……………まさか、こんな身近に、最も
アイハラ に近い存在がいたなんてな」

最も……………？

それは、違う。

僕は、あの人 に最も近い存在なんかじゃない。

最も近い存在は、他にいる。

僕なんかじゃ、ないんだ……………！

「荒瀬……………っ！……話を……………」

「何の話だ？ 莉子の姉を殺した アイハラ についてこの場をお
借りして謝罪しますってか？」

唐突に、胸倉を掴んでいた手が離された。

解放された僕は床に崩れ落ち、咳き込む。

カラン、と金属質の音がして、僕は顔を上げた。

荒瀬が、ソフトケースから細長い何かを取り出していた。

手に握っているのは……………金属バット。

「……………おい……………？」

「これを莉子が知ったら、真っ先にお前を殺しに行くだろうな……………」

「……………！？」

「でも、莉子は今刑務所にいるから……………お前を殺せないんだよ……………」

莉子はあるなにも、 アイハラ を恨んでるのに……………」

「お前……………まさか……………」

「今、俺がお前を殺せば……………莉子の恨みを、少しでも晴らすことができる」

逃げようとしても、さっきの衝撃で頭がクラクラして脳がうまく働かない。

荒瀬は、金属バットを両手に持って振りかぶった。

「莉子の姉は、全身を殴打されて殴り殺されたんだってよ……………だっ
たらお前も……………殴り殺してやんなくちゃ、不公平だよ……………！！！」

ゆっくり、ゆっくりと、荒瀬は僕に近づいてくる。

「冗談だろ、おい——」

「悪いな……俺は……クラスメイトを殺す時にまで……ジョークは、混ぜない主義なんだ——」

金属バットが振り下ろされる、その刹那——。

「その辺にしとけば」

「……？」

頭上から、声が聞こえた。

荒瀬の動きに一瞬だけ迷いが生じる。

焦点が微妙に合わないまま振り下ろされたバットを、かろうじてかわす。

ここは屋上。本来なら、頭上から声が聞こえてくるなんてことは有り得ない。

かといって空耳でもなかったらしく、荒瀬はバットを握ったまま、周囲を手当たり次第に睨みつけて威嚇する。

「誰だ！！ どこにいる！！」

「さあね。どこにいるでしょうか。どこにもいないかもね」
適当な返事を返すその声は、女のもの。

荒瀬は無感情で無関心な声に苛立ちを隠さずにぶつける。

「ふざけるな！！ 出てこないと殺すぞ——」

「場所も分からないのに、どうやって殺すの？ 毒ガス？ それとも手当たり次第にそのバットを振り回す？」

「クソッ……どこだよ！！ どこに隠れてやがる——」

「隠れてなんてないけど」

それには、若干の蔑みの笑いが含まれていた。

荒瀬は半狂乱になって屋上を駆けずり回り始める。

「どこだ！ どこだ！ どこにいったよ——」

僕はそれを、ただ呆然と眺めていた。

荒瀬は今、精神が高ぶっていて、注意力に欠けている状態なんだ。

だから、この声がどこから発せられているのか、分からない。
僕にも分からないけれど。

「あなた。反省してないのね。今、自分が何をしようとしたか、分かってやってるの？ あのままだったら、その人死んでたよ」

「どこにいてるって聞いてんだよ！！」

「話を聞こうともしないんだ。ふうん。別にいいけど。ところで、さっきのあなたの行動、偶然写メールに収まっちゃったんだけど」

「！！？」

「あ。そこは驚くんだ。何？ 露見すること承知でやったんじゃないの？ 人殺して捕まらずに済むなんて甘い考えはよしてよね。私達もう14歳。分かる？」

「ナメてんのか！！ さっさと出て来い！！」

「あなたが見つけられないだけでしょ？ ついでに、あと1分したら、この写真、私の携帯からクラス全員に送られることになるけど」

「なっ……やめろ！！」

「ならあなたもその人殺すのやめれば。その金属バット、校舎の外に向かって投げてよ。そしたら、撤回してあげる」

「……クソッ……」

荒瀬はフェンスによじ登り、金属バットを校舎裏に向かって投げ捨てた。

「これでいいのかよ！！ いい加減出てきやがれ！！」

「文章に繋がりが無いのね。そんなに動揺してるの？ ほらm、用が済んだんならさっさと出て行ってくれない？ まだメール画面は消してないから」

「……………ッ！！」

最後に虚空を睨みつけて、荒瀬は屋上から出て行った。

さびた音が勢いをつけて女性の悲鳴のように響き、扉は閉まった。
「……佐上惇は、おそらく柳川莉子が自分を恨んでいることを悟ったんでしょうね。それで、身代わりに鶴嶋京平を犯人に仕立て上げた。なぜわざわざ佐上惇が蓮音美智子を殺害したのかについては不

明だけだ。それで柳川莉子に自分の代わりに鶴嶋京平を殺させようとしたわけ。最後まで不遇だったものね、鶴嶋京平は」

「何……やってんだよ」

僕は。

頭上に声をかけた。

「——茉莉沢」

「あなたは分かって当然ね。私が毎週水曜日の昼食タイムに屋上の給水タンクの上で昼寝をしているのを知っているから」

「汚くないのか？　そこ」

「コンクリートだから大して気にならない。あなたと偶然会った時も、掃除しようと思っていた」

僕と茉莉沢が、屋上で偶然会った日。

20日前、蓮音香奈殺人事件（偽）が起こった日。

荒瀬が僕を訪ねてきた後。

つまり、授業中。

「茉莉沢も、授業サボったりしてするんだな」

「生物の授業よりも給水タンクの上を掃除した方が有意義だと判断したから」

「大分酷いな、生物の授業の存在価値。てか、あの時英語じゃなかったか？」

「英語は終わって次の授業が始まっていた」

「あつそ……そりゃ左遷」

「きちんとすみませんと言いなさい」

「おわっ！！　通じた……」

こうして、僕の忙しい1ヶ月は幕を閉じた。

チャイムが鳴ると同時に教室に戻った僕は、後ろの引き戸から入ったために眼前に内海がいるという最悪のシチュエーションに見舞われた。

明日は、また鏡崎のお見舞いに行こう。

積もる話も、あることだしな。

うわぁー……。

書いててイタイと思ったお話の中でも上位です、これ。

ついでに1位は惇のおしゃべり回(笑)。

いやぁ、びつくりだね！ クラス委員長の勝成くんが、まさかクラスメイトを殺そうとするなんてね！ うん！

！！作者もびつくりだよ！！

さて。次回は……どうしよう。多分、間が空くと思います。

読み切り 5

ズン……！！

突如、地響きのような、大地を揺るがすような、重い音が響いた。

「もしかして、校舎が崩れ始めてるのかも……」

「チツ……まずいな。サポートルームにはまだ大多数の人間がいるはずだ。無事だといいいけど」

放送室前。

なんとか茶凜を救出することに成功した僕と杉由は保健室に向かっていた。

「それにしても……まさか本当にお前だなんて。茶凜、なんで放送室なんかにいたんだ？」

「……分からない」

「分からないって……」

茶凜は放送室のテーブルの下でうずくまっていた。

爆発が起こったのは放送室をはさんだ外の花壇だったようで、いくら燃えてはいたものの直接被害はなかった。

僕が手を差し伸べると彼女は黙ってそれを握り、立ち上がったお礼を言った。

それからすぐに放送室を出て、被害を抑えるためにドアを閉めたところで先程の地響きが聞こえてきたわけだ。

「私、啓くんと学食に行った後、豊島先生に呼ばれてたから職員室に向かったの。そしたらいきなり後ろから……」

「……………」

「さっきの爆発で目が覚めて……放送室にいて、意味が分からないうちに啓くん達が助けに来てくれて……ありがとう。あのままだったら私、無事じゃ済まなかったかも知れない」

「いやあ、お礼なんていいんだよ茶凜ちゃん。困ったときはお互い様だよ」

にこやかに微笑む杉由を徹底スルーして彼女は続けた。

「ねえ啓くん。…さっきの爆発といい…何かあったの？ さっきから人の気配もないし」

「それが…」

僕は事情を簡単に説明した。

「…殺人。また、起こっちゃったよ」

「また？」

「あ、いやいやなんでもない、こつちの話。…で、茶凜を襲った奴についてけど…多分そいつは、名倉さんを殺して、校内で爆発を起こしている犯人なんじゃないかと思うんだけど」

「じゃあ、私もこの事件の関係者ってこと？」

「それは…どうだろう。直接関わった訳じゃないから分からないけど…茶凜が犯人の姿を見たわけでもないんなら」

「見たよ」

「そう、見たんだ…って、ええ！？」

思ってもみない情報。茶凜がまさか犯人を目撃したとは。

「…って言っても、はつきりじゃないよ。何せ後ろから狙われたわけだし…それでもいいなら」

「大丈夫大丈夫。これで犯人が分かるぞ！！で、誰だったんだ？」

「豊島先生」

「そうか豊島…って、ええ！？」

「高井、そのノリ飽きたぞ」

豊島先生というと、茶凜を職員室に呼んだ張本人じゃないか。でも、豊島先生が殺人に関わっている訳はないし…。じゃあ、やっぱり茶凜の一件は殺人事件とは全く別物？

「あ、はつきりじゃないよ。でも、見えた中から、当てはまるのは豊島先生しかいなかったの」

「それは、どういう…」

「オールバックの茶色い髪でしょ。銀縁のメガネでしょ。それと身長かな。あと顔からして。あの人若いでしょ。まだ20代らしいし。」

何よりも白衣…生物の先生だったよね。そんなところかな」

「白衣か…それなら、他に川口先生が該当するけど」

「あの人はあんなに若くない」

「だよな…」

「でもそれじゃあ、豊島先生が犯人ってことになっちまうぜ。そりゃあおかしいだろ？」

「それもそうなんだよなあ…」

「ねえ」

ふいに茶凜が、いつの間にか立ち止まっていた僕達に言う。

「保健室、行かなくていいの？ …誰か探してるんだったよね？」

「あ」

そこで思い出した。

見てみれば、僕達は放送室前から動いていなかった。

茶凜の話に集中していて、爆音も聞こえていなかったらしい。

杉由が脂汗をかきながらつぶやいた。

「…もう、爆発起こってから大分たってるよな」

「もしかしたら、お前が望む通り骨の髄まで焼けてるかもな」

「物騒なこと言うなよー、言い出したの俺だけだよー」

自覚していた。

そして本当に望んでいた。

…剣道部には恨みを抱かれないようにしよう。こいつの頭の中で僕はどうなってしまうことやら。笑顔でグロいこと言うもんな。

「よし！ 行くに越したことはない。火の勢いが弱まってるかもしれないじゃないか」

「そうだな。ま、行かないよりはマシか。死体遺棄とかあとで言われても困るし」

どこまでも酷い奴だ。

死んだ前提の考えかよ。

「でも…煙上がってるよ」

「！…！」

「ほら、お前が渋ってるから！」

「関係なくねえか？」

「とにかく、行くよ！」

保健室へ猛ダッシュ。

黒い煙がもうもうと立ち上る。火は逆に勢いを増していた。ベッドがある場所に向かう。

「相原ー、生きてるかー」

のんきな口調で呼びかける杉由。まとわりつく炎をものともしな
い。

「あ……」

結論。

骨の髄まで焼けるようなことは、なさそうだった。

そこは——そこだけは。

先程僕らがいた、爆発が起きる前の保健室と全く同じだった。

火が燃え移っていない。

どういうことだろう。

「相原……くん？」

彼は先程と同じように、仰向けにベッドに寝転がっていた。
炎に包まれながら。

目を隠すように顔に腕を乗せて。

至極気だるげに。

「何で来るんスか……このまま、焼け死んで終わりたかったのに」
先程と同じ声で。

同じ口調で。

言っていることは、全く違った。

「……？」

「また、…俺の周りで、人が死んじゃったじゃないスか」
人が死んだ。

おそろく、この爆発で。

誰が？

「あの人は、悪くないのに…事件には一切のかかわりもなかったのに」

そこで。

彼がもう片手で握っているものに目がいった。

それは。

ここにはあるはずのない。

「……優志……？」

「……知り合いスか」

「……ここに…優志が来たの？」

「……？ ……ああ、柊さんスね。 ……じゃあ、啓介ってあなたの

ことだったんスか」

「…！ 優志が、僕のこと何か言ってたのか！？」

「…あなたに…会いに来たって…」

会いに来た？

「……それで…優志は、どこに？」

「………」

とたんに黙ってしまう相原。

隣りでは再び顔を青くした杉由が、あるはずのないもの——優志のネクタイの切れ端を見ている。

焦げて褐色になった、ネクタイを。

「…分からないんス」

「分からない？」

「爆発が起こる前…いろいろあつてベッドが濡れてたから、すぐに火が燃え移ることはなかったんス。柊さんは俺のすぐそばにいたから、普通にしていればいなくなるなんてことはまず有り得ません。

…ということは、爆発が起こる前後、柊さんは何らかの行動をしていたと、そういうことになりませんか？」

「何らかの行動…」

「——詳しくは定かじゃありませんけど、どちらにしたらって、柊さんはその行動によって…巻き込まれた」

「ちょっと…待てよ。それってつまり、優志が爆発に…巻き込まれて……」

「生きてる可能性は低い、とだけ言っときます。あの人のことをよく知ってるあなたの方が、そこら辺は判断できるんじゃないスカ？」
爆発に巻き込まれて。

死んだ？

…まさか。優志に限ってそんなこと。

そんなあっけなく、あいつは死ぬようなやつじゃない…と、思いたい。

少なくとも優志は、殺人事件とは一切無関係だ。ここで死ぬ理由がない。

お前は不慮の事故なんかで世界からいなくなるようなタマじゃないだろ？ 優志。

お前が生きてると、僕はそう信じていいのか？

「そうだ、あいつが死ぬわけない」

「……だよ、な。死ぬはずないよな」

同調するように繰り返す杉由。依然として顔は青いままだ。

僕は相原に手を差し出す。

「さ、相原くん。そんなところにいつまでもいないで、とりあえずここから出よう。いつ火が強くなるか分らないからな」

「俺は遠慮します。…なんか、これ以上生きてたら、もっと周りの人が死ぬような気がしますから。またこんな目にあう可能性だって捨てきれないし」

「なーに意味分かんねえこと言ってるんだよ」

いつの間にか出口に移動した杉由が、こちらを振り返りながら言った。

手に何かを巻きつけている。あれは…ロープ？

杉由はロープを巻きつけた手を腕ごと後ろに引いた。ちょうど犬の首輪に付けたリードを引っ張る要領で。

同時に、すぐそばで聞こえる物音。

…相原がベッドから転げ落ちていた。
ちなみに辺りは火の海である。

「……！？」

本人にも何が起こったのか分からないらしく、落ち着きなく目を動かす。

そこで気づいた。

彼の手首にしっかりと結ばれたロープを。

文脈の流れから見ても、このロープは杉由が手に巻きつけているそのものもう片っ端だろう。

「いつの間に…ッ！？　つか、先輩！！　何ですかこれ！！」

「だってお前、あの格好は『縛って下さい』って言ってるようなもんだろ」

「誰がそんな気色悪い願望抱くんですか！！　ちょ、引っ張らないで下さいよ！」

「灼熱の海ヘレッツサーフィン」

「上手いこと言ったみたいないで下さい！！　リアルに燃えますから！！　人間は有機物ですから可燃物ですから！！」

聞く耳持たず、杉由はロープを手に巻きつけたまま保健室を出て行く。

『わ、ちょ、おっと…』　引っ張られながらもうまく火を避ける彼は本物だ。

「俺は犬ですか！！　ロープでリボン結びしてもかわいさゼロなんですけど！！　ほだけないし！！」

「コツは蝶々の上羽根の部分を以下に上手く外すかにかかっている」

「テクニク語ってないでほってください！　あそこから連れ出すだけならもつと他に方法いくらでもあったでしょ！！」

「ある登山家は語る。そこに山があるから自分は山に登るんだと。

俺も語る。そこにロープがあるから自分はお前の右手首にロープを結ぶのだと」

「完全なる気まぐれ以外の何物でもないですよねそれ！！　何で先

輩はいつもいつも、こう、突発的なことばかりやらかすんですか！
付き合わされるこっちの身にもなつて下さい！」

こういうことが頻繁にあるらしかった。

これはもう、いじめの部類に入るのではないだろうか。

しばらく廊下で言い合っていた二人の声もやがて遠ざかり、燃え盛る炎の中保健室に一人取り残された僕。

……どうするべきか。

「あれ？　そういえば茶凜は？」

「ごめん。ずっとここにいた」

突然ドアの影から人影が現れた。

そうだった…茶凜は極度の人見知りだった。にしても、見知らぬ人とはいえ後輩相手にも同じ反応を見せるとは困ったものだ。もし部活に入っていたら全く馴染めないのではないか？

ま、それは僕が考える範疇外のことだ。彼女のことは彼女に任せしておくのが一番。専ら性格については尚更本人にしか直せるものではない。結局自分を変えられるのは自分だけなのだ。

「何だそこにいたのか…またいなくなっちゃったのかと思ったよ」

「さつき松川くんが犬連れてたけど、あれ、何？」

完全に犬扱いだった。

相原に心から合掌。

「いや、あれはその…一応、人だけ」

「そう」

「あ、話聞いてた？」

「うん、大体のところは。優志くんが死んじやったんでしょ」

展開が速すぎる。

「いや、まだそうと決まったわけじゃないんだけどさ」

「だって誰かが『生きてる可能性は低い』って…」

「だからそれはね。可能性が低いというだけであって全くないわけでは」

「じゃあ生きてるのね」

「そうとも限らないんだけど…」

ああ、白黒つけられない話はこれだから嫌いだ。会話の中に“可能性”なんて言葉を混ぜること自体間違ってるんだ。ややこしくなるだけじゃないか。

「とにかく。僕は優志が生きてると信じてる。まだ遠くには行っていないはずだから、今から探しに行つて来るよ」

「私も行く」

「分かった。分つたから、とりあえずここを出よう。危険だ」

「私は教室の中に入つてないよ。危険なのは啓くんだけ」

「はいはいそうですね、危険なのは僕だけです」

「なめてるの？」

茶凜がイラつき始めた。

笑顔だから感情の変化が分かりにくい。言葉で判断するまでもなく、これは怒っているんだろう。ごめんなさい。なめてないです！
スペクトしてますはい。

「うそうそ。マジになんなんて。ほんじゃま、探しに行くとしますか」

「そうね」

「そーやって逃げようとしても無駄ですよ」

出入り口に突然現れたニューフェイス。

…佐野だった。その後ろには塚本も控えている。

この人たちは…何でもタイミング悪くやってくるのだろう。嫌がらせか。嫌がらせなのか。あからさまに舌打ちしたくなった自分を押さえ込んで、努めて冷静に対処するとうしよう。

「……何用ですか？」

「偶然通りかかっただけです。いや…刑事の勘、と言つべきですかね？」

『ハッ。勘ですかそうですね。随分と優秀な第六感をお持ちでらっしゃるようですね。羨ましい限りです。ぜひその類稀なる能力をフル稼働してこの事件の犯人をさっさと突き止めて頂きたいものです』

ね」

真っ先に浮かび上がった皮肉をまさか言うわけにもいかず、内容に“善”を含めて言い換えてみた。

「はあ、勘ですか。さすがは刑事、第六感も健在ですね。全く羨ましいです。それを上手く活用すれば犯人像も浮かび上がってくるのではないですか？」

「いやあ、それほどでもありませんよ。キミはお世辞が上手だねえ！」

お世辞だよ。

「佐野氏…幸せ者ですね」

「いえいえ。塚本さんこそ幸せじゃないですか」
「は？」

この辺りから“大人の世間話”と化してきたので、僕と茶凜は隙を見て二人の間を通り抜けようと試みた。

……ん？

あれ。

聴覚が麻痺した。

何でだろう？

「——」
塚本の口が動いている。

声は聞こえなかった。

その代わり、聴覚が麻痺した原因が分かった。

「……！！——……！！」

「——。——」

「——！！——！！——」

「——…し津さんと私は何の交友関係もありません」

「分かりましたから！！銃をしまつて下さい銃を！！」

「あなたの誤解を解くまでは無理です」

「だから分かりましたって！」

僕は自分の運命を呪った。

この刑事2人…佐野は佐野で問題があるが、塚本も塚本で問題がある。

のろ気話で発砲するか普通！

ちゃんとマニユアル読んでんのか！

「……啓くん。今のうちに」

「そ、…そうだね。まあ、死ぬことはないだろ」

塚本さんは極度の融通の利かなさを兼ね備えている。…のろ気話が辞世の句、なんてことにならないように祈っておこう。

アーメン。

「で」

水谷は小沢と佐藤を交互ににらみ、次に安藤をにらみ、最後に――土石流に囲まれた周囲をにらんで言った。

「どうするんだ高所恐怖症リメンバー」

「リメンバー言うな！ 和訳で“あぶれ”って言われたほうがマシだわ！ いや両方嫌だけど！ 苦渋の選択！」

「どうするんだ高所恐怖症あぶれリメンバー」

「まとめちゃったよ！！」

「どうするもこうするも…悪いのは小沢じゃないか。俺は悪くないぞ。小沢の飛ぶ位置が悪かったんだ」

「いや。僕個人の考えだとあそこで佐藤が小沢に掴まらなければこのような事態が起こる事はまずなかったと思うが」

「人の考えは十人十色。大体、こんなことになるんなら最初から口―プで降りればよかったと後悔しているところだ全く」

このような事態。

こんなこと。

意味深な言葉が混ざった応酬。無理もない、彼らは今、考えうる限り最悪の事態に陥っているのだから。

落とし穴、と言えば子供の幼稚な遊びごと程度にしか聞こえないが、彼らはその“落とし穴”にはまっていた。

それも一般的な“落とし穴”と呼べる深さのそれではない。安藤、小沢、水谷、佐藤の4人が入ってもなお有り余る、超巨大な“落とし穴”であった。ざっと3mはあるだろう深さに加え、広さは2畳分ほど。強いて例えるとするならば、試験管の底から3cm地点をピックアップした感じ。周りは土石流が止まらず、穴の縁からも少しずつ砂が侵入してきている。この状況を一言で表すならば――。

絶体絶命。

「ま」

水谷がヒステリーを起こしている横で、安藤がその肩に手を置く。「こうなる運命だったんじゃないか。今まで俺達、人に褒められるようなこと何一つやってこなかったし」

「ちよ、何言ってるんの安藤。それって完全な死亡フラグだから。余命僅かだから」

「だってそうじゃねえか。水谷だって気づいてんだろ？ この状況の意味」

「……………それは、…」

分かっている。

この状況は危険。そんなことは一目見ても、いや場合によつては見るまでもなく分かりきっていることだった。脱出不能の落とし穴、絶え間なく進入する土砂…だが、問題なのはそんなことじゃない。

爆発騒ぎが起こってから、存在が薄れつつあった。

そこを狙って、犯人が自分達をはめたのだとすれば。

そしてその理由を考えてみれば。

「…？ この状況の、意味？ 何だそれは？」

「まあ、確かに危険ではあるな。でもこの程度の高さなら、出られないこともないのではないか？」

能天気な“分からない組”がうらやましい。この状況がもたらした意味など、きっと微塵も理解していないに決まっている。

「佐藤」

「何だ安藤。つかさつきから教師を呼び捨」

「どうすれば、この高さを超えて出られるっていうんだ？」

顔を上げて目線を上に移す安藤。

「簡単だ。誰かが下について、肩に乗れば楽々届く距離だろう」

「誰が下につく？」

「誰って……」

やっと気づいたらしい佐藤が言葉を濁す。

まだ気づかない小沢は興味津々と言った様子で3人に問う。

「さっきから一体、何を話している？ 俺にはさっぱり理解できん」

「テメエはどこまでも馬鹿だな」

安藤が呆れ気味に彼をにらむ。

水谷は哀れむような視線を彼に向ける。

佐藤は自分が先に理解できた優越感も混ざった眼で彼を見た。

「いやいや、何だその眼は。まるで俺が理解力のない馬鹿みたいではないか」

「自覚してなかったのかよ」

「よくそれで18年間生きてこれたね」

「周りが相当恵まれていたんだな。羨ましい限りだ」

更に呆然とする小沢に痺れを切らした水谷が説明する。

「今佐藤が言った脱出方法に間違いはない。3mの壁を越えるには一人の力では無理がある。なので土台代わりに人を置き、その上に立てば届かない高さではないだろう。見たところみんな170cmはありそうだしな」

俺は168だ、という佐藤のつぶやきはこれ際無視する。

「この場には4人いるから……仮に僕たちをA・B・C・Dとし、Aを土台に選んだとしよう。Aを踏み台にして、Bが穴から出る。同様にC、Dが脱出した。穴の中にはAだけが残された。そこで問題が生じる。穴が出るには2人必要。なぜなら一人分の身長だと穴の高さには届かないから。なら、一人取り残されたAはどうやって穴から出ればいい？」

「どうやって……」

小沢はまだ理解しきれていないのか、唸るように首をかしげる。

「…脱出したB、C、Dが、縄か何かを持ってきて穴に垂らせばよいのではないか？ 倉庫でもあされば適当な代物が出てくるだろう」

「残念ながらそれは無理なんだよ」

安藤が口を挟んだ。

「外の状況も忘れちゃいけない。今校内は爆発騒ぎだ。外にだって起爆装置が仕掛けられている。何かの弾みで爆発でもしたら…どうなると思う？」

地面で爆発が起きる。

その近くに大きくくぼんだ場所があれば、そこに土砂崩れが発生して――穴はふさがる。

残されたAを生き埋めにして。

「起爆装置はおそらく、人が多いところには仕掛けられていない。職員室やサポートルームで爆発が起きなかったのがその証拠だ。全員が校内に避難している中、外に人が一人でも現れると思うか？」

「……」

「きつと、主に起爆装置が仕掛けられているのは外だ。外の爆発で校内に被害を及ぼし、連鎖反応で校舎内の起爆装置にも引火した。その繰り返しで、各箇所爆発が起こっているんだろう。幸いB棟側の庭にはまだ爆発が起こっていない。…これが何を意味するか分かるか？」

「分かん」

「少なくとも“これから”、この付近で爆発が起こる可能性が100%だってことだ」

「…？ ちょ、待て。それはつまり、残ったAを助けようにも、いつ爆発が起こるか分からない状態で助けられない…てことか？」

「それだけじゃない」

水谷が加わる。

「爆発を起こしているのは犯人。犯人がなぜ、人が多いところで爆発を起こさないのかを考えてみる」

「被害……が、でるから？」

「まさかとは思っていたが本当に馬鹿なのかお前は。故意に爆発を起こす理由NO.1は危害を加えるためじゃないか。……しかし、そうじゃない。逆に、爆発まで起こしておいて被害を出す以外に何の目的があるかっていう方が僕にとっては不思議だった」

「水谷、お前分らないのか？」

放置されていた佐藤が素つ頓狂につぶやいた。

「貴様は分かると言うのか佐藤」

「簡単だ。俺達事件関係者を残しておくことだよ」

「……おい、そりやおかしいんじゃないか？ 犯人は当然だが捕まりたくなんてねえわけだから……普通、残すんじゃなくて消そうと思うだろ」

「犯人の心理を考えてみる。愉快犯でもない限り、殺人には何らかの理由がある。それも生半可な諸事情じゃない、人を殺めるほど深刻な理由がな。殺されたのは本校きつての不良のリーダー名倉。被害者は主に生徒たち。……その中に、名倉を恨んでいない奴なんていないだろう。そう考えれば、この学校の関係者全員が犯人にもなりうるんだ」

「……何を言いたい？」

「俺が思うに……この事件の犯人は、この学校の生徒、それも今校内にいる事件関係者の中にと踏んでいる」

その言葉に、3人がそれぞれ反応を示した。

安藤はギロリと彼をにらみ上げ。

小沢は『この期に及んで何をわけの分からんことを』といった風な嫌味な眼でにらみ。

水谷は――。

「……僕も、……そう考えていた」

「なっ……おい！ 俺達を疑ってたってことかよ！」

「違うそういうわけじゃない。疑ってなんかいないさ。……僕はもう、この事件の犯人を知っているからね」

「ッ！！！」

突然の爆弾発言に、その場にいた3人が戦慄する。

「犯人を…知ってるって、おい…」

「お前それ…本当か？」

「……ああ」

驚きの様子で確認する安藤と小沢にうなずく水谷は、なぜか不安気だった。

一方佐藤は、さっきまでの知的な雰囲気をぶち壊す怒鳴り声を上げた。

「いつから分かっていたんだ！！　なぜ犯人を教えなかった！！

…もしや…犯人はお前なのか……！？」

勝手にうるたえてろ、と安藤が履き捨てる。

小沢は水谷の様子に気づいたようで、

「…顔色が悪いが。どうかしたのか？」

「………何でもない」

告白したとたんに、落ち着きなく四方八方を見渡す彼は、まるで何かを恐れているように見えた。

「水谷、教えてくれ。犯人は…誰なんだ？」

安藤が神妙な顔つきで問う。

「…犯人は……」

ごくり、とつばを飲み込む。

続く言葉は。

「犯人は——………」

「いいんですか？　あの人たち…あのままにしておいて」

廊下を歩いていた彼が立ち止まる。

ゆっくり後ろを振り返り。

口角を上げ。

眼を細めて彼は言った。
「ヤツハ…シツテシマッタ」

読み切り 5 (後書き)

佐野刑事は、相当前回の事件で塚本刑事のことをお嫌いになられたようです。

この人、本来はこういうキャラなんだったわけ……。原作はこっちなんだよな、この人……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287r/>

abnormal dialy

2011年6月7日20時25分発行